

3

むいみちゆき  
must 鶴崎貴大

異世界魔王と  
召喚少女の  
隷魔術

SLAVERY MAGIC



本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

また、画面が小さい端末の場合、文字サイズの拡大等により稀<sup>まれ</sup>に体裁に違和感が生じることがあります。その際は、通常の文字サイズにお戻しのうえお読みください。



——甲殻に覆われた巨人。それが《魔王クレブスクリム》の姿だった。





二人が声を揃える。

「臭くないよ!？」

「臭くありません!」

とにかく、ディアヴロは背を向けていた。  
さらさらと流れる川の音と、  
彼女たちの声だけが聞こえてくる。





「くっ……」

「ひゃうんッ！ ふあー！ あッ！ あああッ！ んはああッ！  
熱いッ！ 熱いですッ！ デイアヴロ……も、もう……  
わたし……はふッ！ こんな……お、おかしく……なりそう……んッ！」





# 異世界魔王と召喚少女の 奴隷魔術3

---

むらさきゆきや



講談社ラノベ文庫



# c o n t e n t s

これまでのあらすじ 007

序 章 プロローグ 010

幕間 031

第一章 魔族と話してみる 056

第二章 封印を解いてみる 119

第三章 珈琲店に行ってみる 196

第四章 レムの話 247

幕間 292

第五章 魔王と魔王 300

終 章 エピローグ 349

口絵・本文イラスト／鶴崎貴大  
デザイン／AFTERGLOW

編集／庄司智



これまでのあらすじ

MMORPGクロスレヴェリさかもとたくまにおいて坂本拓真は、その圧倒的な強さと、公式ラスボスより雰囲気のある演技ロールプレイにより『魔王』と呼ばれていた。

誰より早く《脳の魔王エンケバロウス》を倒したことで、彼は超級レアアイテム《魔王の指輪》を獲得する。あらゆる魔術を反射するという、最強装備のひとつだった。

ある日——拓真はクロスレヴェリそっくりの異世界へと召喚されてしまう。

ひょうじんぞく

豹人族の少女レムと、エルフの少女シェラ、二人は同時に儀式を行ったらしく、自分こそが召喚主だ、〃と言いかう。

「……この召喚獣はわたしが召喚したのです。あなたの魔術は成功していません」

「違うし！ あたしのだし！」

しかし、《魔王の指輪》により魔術は反射されていた。《隷従の首輪》が、なんと彼女たち自身に嵌はまってしまう。

二人のケンカに困惑する拓真。彼はプレイヤーとしては優れているが、コミュ力は無なのだ。悩んで放った台詞せりふは、ゲームで使っていた魔王ロールプレイだった。

「くだらん争いはやめるがいい。貴様らは今、《ディアヴロ》の前にいるのだぞ」



地方都市ファルトラで、三人は宿を借りる。

そこへ街の重要人物——魔術師協会会長セレスが訪ねてきた。どうやら、レムには秘密があるらしい。なんとその身に《魔王クレブスクルム》が封じられているのだという。

誰にも助けてもらえまい、と悲観しているレムに、ディアヴロは言い放つ。

「俺に全て任せろ。貴様にどんな事情があるうと魔王が呑みこんでくれる」

翌日、冒険者となったディアヴロたち。

初クエストに行ってみると、実は罠<sup>わな</sup>だった。エルフの精鋭部隊がシェラを連れ戻そうと襲ってくる。なんとシェラは、エルフの宗主国グリーンウッド王国の王女だったのだ！

しかし、ディアヴロは彼らをあっさりと撃退した。

レベルに差がありすぎる……

死んでも復活できるゲームと、死亡リスクのある異世界の差を実感するのだった。

後日、魔族エデルガルト率いる一〇〇体の魔族が襲来する。同時に、街中にも強力な魔族が出現していた。

本気になったディアヴロは、エデルガルトたち一〇〇体の魔族を退け、帰還魔術により一瞬で街に戻る。そして、頑強な魔族グレゴールを圧倒的な魔力で撃破して、レムや



セレスやファルトラの街を救ったのだった。

ファルトラの領主ガルフォードから、クエストを依頼されたディアヴロ。

グリーンウッド王国が『シェラを引き渡さねば開戦も辞さず』と言ってきたらしい。

シェラを渡したくないのなら、戦争を回避せよ——というのがクエストの内容だった。

お目付役として、メガネで生真面目きまじめな国家騎士アリシアが同行することになる。

ディアヴロは解決策を模索するのだが……

グリーンウッド王国の王子キイラの策謀により、シェラは操られて「祖国へ帰る」などと言ひ出す。

コミュ障ゆえの気弱さから、引き留められぬまま彼女を攫さらわれてしまうが……

レムの説得を受けて、ディアヴロはいつもの調子を取り戻した。エルフの軍勢を撃破し、キイラの陣幕へと押し入る。

相手は慌てて逃げだす。キイラを斬り捨てたのは、領主ガルフォードだった。ディアヴロの消耗を待ち、シェラを奪う機を狙っていたらしい。

ディアヴロはガルフォードと戦う。やや苦戦するが、戦闘経験の差を活いかして勝利する。

いろいろあったが、平穏な日常を取り戻したのだった。



## 序 章 プロローグ

リフェリア王国の西端にある最前線拠点——城塞都市ファルトラ。

北には険しい山脈が連なり、南には大きなセプリア湖がある。その湖の東側に広がる森は、『湖東の森』と呼ばれていた。

『湖東の森』はファルトラ市から南東の位置にある。

危険な西側と違い、一応は人族の領内なので、魔獣や魔族などと遭遇する可能性は低く、さほど大型の獣も出ない。

この世界では、街の者たちの手頃な狩り場として使われているようだ。

ゲームでは、<sup>たど</sup>どうにかファルトラまで辿り着いたプレイヤーが経験値を稼ぐ場所<sup>だ</sup>だった。

リフェリア王国歴一六四年六月八日——

ディアヴロたちは『湖東の森』へと来ていた。

この近くで、エルフたちや領主ガルフォードと戦ってから、一週間以上が経っている。もうディアヴロ自身の体調（MP<sup>精神力</sup>の消費など）は回復していた。



木々の合間から、日差しが射しこんでいる。

鳥の声がした。

草と土の香りが満ちている。

ディアヴロは腕組みして、立木に背を預け——レムとシェラを眺めていた。シェラが地面に白砂を使って図を描いている。

「これでいいの？」

「……だীব雜ですが……初めてですから、よしとしましょう」

レムが眉をひそめつつ許した。

はたはた、とシェラが手を振る。

「初めてじゃないよ。ディアヴロを召喚したから、これで二度目じゃん？」

「……あるとき魔術陣を描いたのは、わたしです」

ため息をついた。

レム・ガレウは小柄な豹人族ひょうじんぞくの少女で、頭にある豹耳ひょうみみも、細長い尻尾も、腰まである

髪も艶やかな黒色をしていた。

普通の豹人族ひょうじんぞくはオレンジ色の髪に、黄色を基調とした耳と尾なのだが、レムは数少ない黒豹色くろひょうだ。

首には《隷従の首輪》がついている。



顔立ちは幼さを残しつつも美しく整っており、猫のような吊り目と、引き結ばれた口元が意志の強さを感じさせた。

そのレムが指導しているのが、召喚術士としては新米のシェラだ。

シェラ・L・グリーンウッドはエルフだった。スラリと手足が長く、胴も細い。金を溶かしたような髪と、海のようなセルリアンブルーの瞳——神族に最も近いといわれるほど美しい種族の、しかも王女である。

だからというわけでもないだろうが、普通は控えめであるはずの胸元が、シェラの場合はとても豊かだった。一般的な狩人の衣服を着ているのに、はちきれそうで谷間がこれでもかと強調されている。

「えっとお、この魔術陣の中心にクリスタルを置けばいいんだよね？」

「線を踏まないように」

「わかってるって……あっ!？」

「……………」

「ぎ、ぎりぎり! だいじょうぶだったから!」

あはは、と失敗を誤魔化すようにシェラが笑った。

彼女が前屈みになって作業していると、胸のふたつのふくらみが、たゆん、たゆん、揺れる。



思わず凝視してしまい、ディアヴロは慌てて視線を逸らした。

——魔王は谷間に視線を奪われたりしない！

ディアヴロは禍々しい角を生やした外見の男だった。顔と身体に刺青いれずみのようなアザがある混魔族だ。召喚されたときから、ディーマン「異世界の魔王」を名乗っている。

しかし、尊大で自信満々な態度は、全て魔王ロールプレイだ。実際には、演技ロールプレイしない  
と満足にしゃべることできないコミュ障だった。

「フンツ……召喚獣などより、元素魔術のほうが強いのくに」

「それはディアヴロが特別なんだよー」

シエラが唇を尖とがらせた。

これにはレムも同意する。

「……わたしたちが元素魔術を使っても、ディアヴロのように魔族を屠ほふるような威力は  
出せないでしょう。それに、召喚獣は戦闘時に盾となってくれます」

「まあ、よい。さっさと儀式を済ませるがいい。どんな能力を身につけようと、結局は  
戦い方だからな」

「うん！」

シエラが嬉うれしそうにうなずいた。

彼女の足元には、白砂で描かれた図がある。何重もの円を基本として、記号や文字が



ちりばめてあった。

レムが改めて講義をする。

「いいですか、この魔術陣とは――要素一つ一つが意味を持ち、魔力の流れを整え、世界に明確な現象を起こす鍵となっています」

「うん」

「……時間と場所と魔術陣と呪文と……なにより、術者の魔力と集中力が重要です。これらが合わさることにより行われるのが《儀式魔術》であり、今回、あなたがやろうとしている《召喚魔術》です」

「けっこう、めんどくさいよねー」

「それでも初歩の初歩なのです。召喚獣を使うときはクリスタルを投げるだけで喚よべますし、元素魔術などの《詠唱魔術》は口に出すだけで使えますが、《儀式魔術》は多くの準備が必要です。ちなみに、魔術陣だけで発動するものを《陣式魔術》といいます。戦闘向きではないので冒険者が使うことはありませんが、ダンジョンのトラップなどで

――

「くー……」

「寝るんじゃないません」

ぺしぺし、とレムがシェラの頭をたたいた。



——そういう扱いになっているのか。

ディアヴロは脳内の『異世界版クロスレヴエリ攻略メモ帳』に記録しておいた。

ゲームでは《儀式魔術》や《陣式魔術》はイベントでのみ目にするもので、プレイヤーが任意に使うことはなかった。

だから、ムービーで演出として見ることはあっても、ちまちました準備作業を見るのは初めてのことだ。

当然、手間がかかるぶん《儀式魔術》は他の方法よりも、より大きな効果が期待できる。

レムが指示して、シェラが魔術陣の前に立った。

「……わかりにくいかもしれませんが——儀式によって召喚獣を異世界から召喚することを《召喚魔術》と呼びます。そして現れたものを隷従させるのが《隷従の儀式》で、これによって召喚獣をクリスタル化できます」

「そういや、ディアヴロはクリスタル化できないよね？」

「彼は召喚獣ではなく異世界の魔王だそうですから……それと、《隷従の儀式》が反射されておりますし」

「じゃあ、あたしたちのほうがクリスタル化されちゃうの!？」



「……試したことはありませんが……人族をクリスタル化できたという話は聞いたこと  
ひとぞくがありません。魔術的には《奴隷の首輪》と似たようなものですし、クリスタル化は  
「召喚獣の能力」<sup>〃</sup> と思ったほうがいいかもしれませんね」  
「そうなの？」

「召喚獣はクリスタルから出していると、術者の魔力を消費していきます。ディアヴロ  
がいることで、わたしたちの魔力が消費されていますか？」

「あ、ないよねえ」

「そのことから、ディアヴロは異世界の魔王であり、召喚獣ではない——とわかりま  
す。まあ、召喚主がわたしであることは揺るがない事実なのですが」

また「どっちが召喚したか」わーわー言い合うが……最近は慣れたもので、すぐ話は  
元に戻った。

ディアヴロは内心で安堵の吐息をつく。

異世界に召喚された直後は、クリスタル化されるのではないかと冷や冷やしたもの  
だ。

実のところ、ディアヴロは異世界の魔王ではなく、ゲームで魔王を演じていただけで  
あり、たんなる廃人ゲーマーなのだが……

今さら恥ずかしくて明かすことはできない。隠し通さねばならない秘密だった。



レムが先を説明する。

「クリスタル化した召喚獣を喚び出すことも《召喚魔術》と呼ばれます。隷従化も使役も、一連の魔術ですから」

「ふむふむ。食堂に行くことも、食べ物を口に入れることも、食事する、って言うもんね」

「……あなたにしては、いい理解です」

ふふん！ とシェラが胸を張った。

「じゃあ、さっそく《召喚魔術》をやってみるよ!？」

「はい……魔術陣に魔力を注いでください」

「うん！ てやあ!」

「叫ばなくて結構です」

「んー、そういや、レムで練習したんだっけね」

シェラがニヤリと笑って、わきわきと指を動かす。

レムがカァツと顔を赤くした。

「ば、ばかなこと言ってるじゃありませんよ!？」

先日の夜に、彼女たち二人がお遊びでやっていたことを思いだし、ディアヴロまで赤面してしまう。



誤魔化すように咳払いした。せきばら

「ええい、早くやるがいい。我は暇ではないのだ！」

実のところ、クエストがなくて宿屋でゴロゴロしていたわけだが……  
シエラがうなずいた。

「うん、やってみるね！」

彼女が魔術陣の端に手を突いた。

白砂で描かれた図が、まるで油に火をつけたかのように燃えあがる。ただし、炎の色は緑色だった。

熱は感じない。

これは魔力の奔流なのか。

レムがつぶやく。

「……エルフという種族は『風』の属性を持っていますが、シエラ自身の魔力は『火』の属性に向いてるかもしれませんね」

ディアヴロは興味を持った。もともと人生を踏み外すほどファンタジーMMORPGにハマったくらいだ。それ系の話題には関心が強い。

「この世界の者たちは、生まれつき属性を持っているのか？」



「はい。ただし、心境が変わるような出来事を経験すると属性が変わることもあります。わたしの印象ですが……魔力の属性は、心のありように応じるのではないかと。苛烈な心持ちは火属性ですね」

「苛烈か？」

いつも、ぼやんぼやん笑っているシエラに、苛烈という印象はなかった。

「王女という地位を捨て、故郷も家族も捨てて一人で旅に出るなど——苛烈としか言いようがありません」

「ふむ、たしかにな。それを言ったら貴様もか？」

「……わたしは〴〵土〴〵ですね。もともと豹<sup>ひょうじんぞく</sup>人族は土属性ですが、今の心のありようは、忍耐です」

「なるほどな……」

自由を許さないグリーンウッド王国から飛び出したシエラの心は、苛烈な〴〵火〴〵で。

魔王クレブスクルの魂を封<sup>おり</sup>じる檻にされているレムは、忍耐の〴〵土〴〵なのか。

「我は、貴様から見て、どうだ？」

「え？」

「あ、いや、もちろん魔王は人族<sup>ひとぞく</sup>の尺度などで測れぬものではあるのだが、小物から見た印象というのに興味がわいた。許す、見立てを言うがよい」



本音は、レムの属性診断に興味津々<sup>〃</sup>なのだが、自分のことを他人に聞く魔王なんて格好悪い。だから魔王ロールプレイで尊大に尋ねたのだった。

ふうむ、とレムが考えこむ。

「……混魔族は、<sup>デーマン</sup>闇<sup>〃</sup>の属性を持っています……あ、もちろん、ディアヴロは魔王ですが、外見が似ているから属性も似ているかもしれませんね。前に魔術師協会でレベル判定をしたとき鏡が真っ黒になりました。あのことから考えても、やはり闇属性ではないでしょうか？」

「そうだな」

魔王といえ、闇属性だろう。他の属性だと言われたら、ちよつとイメージが違う。

「……しかし、闇属性の心のありようは、欺瞞<sup>ぎまん</sup>……だと思ふのです」

「なに？」

「ディアヴロには、なにか大きな隠し事があるのでは……と……いえ、なんでもありません。たんなる占いのようなものです。複雑多様な人の心を六属性に大別するのが、そもそも乱暴な話ですから」

レムが恥ずかしそうに苦笑した。

フツ、とディアヴロも余裕ぶって笑う。

内心では、魔王ロールプレイが見透かされてないか、ドキドキだった。



おしゃべりを中断し、シェラのほうを見る。

彼女は熱心に魔力を魔術陣へと注ぎ続けていた。

レムがうなずく。

「……悔しいですが、シェラには才能があるようですね。初めてなのに異世界へのゲートは安定しています」

「どんな召喚獣を喚ぶのだ？」

「それは、運しだいですね」

「ふむ……」

ガチャ  
運なのはゲームと同じだった。

散々苦勞して召喚術のための素材を集めて、試してみたら下級の召喚獣だった……なんて話はよく聞く。攻略サイトだと希少な召喚獣のコメント欄は『出ない』『未実装』

『ツチノコ』などの悲鳴で埋まっていた。

レムが身を乗り出す。

「来ました」

ゴウツ！ と風が卷いて、青白い炎をまとった魔術陣を吹き散らした。白砂が舞い上がり、視界を隠す。

その向こうに召喚獣のシルエットが浮かびあがった。



「やったあ！」

シエラが叫んだ。

+

大きさはバスケットボールくらいの召喚獣だった。

まるまると太った七面鳥に見える。黒い羽根に、扇のような尾を持っている。ばっさばっさと羽ばたいて、ゆっくりと飛んでいた。

黒色のつぶらな目が、まばたきを繰り返している。

レムがため息をついた。

「……それは《ターキーショット》ですね」

「かわいい！ これこれ！ こういうのが欲しかったんだあ！」

シエラが嬉し<sup>うれ</sup>そうに笑みをこぼした。

「……初めての練習用としては、ちょうどいいかもしれませんね」

「そうなの？ これ、どんななの？」

「……はつきり言って、強い召喚獣ではないです。風属性のなかでは、最弱のひとつかと。《風の精》などと同程度か……戦闘力だけなら劣ります」



「ええーっ!？」

「特殊能力<sup>スキル</sup>は、視界の共有<sup>グ</sup>というものです。召喚獣が見たものを自分も見られる能力です。」







「あ、それって便利じゃない？」

「偵察には使える、と思いますか？ 魔力を消費するから長時間は使えません。道に迷ったときには便利かもしれませんが……」

「ビミョー」

シエラがしよげたような顔をする。

レムが肩をすくめた。

「召喚獣にはいろいろありますが、結局は頑丈で攻撃力が高いものが強いのです」

「そっかあ……」

「どうしますか？ べつに《隷従の儀式》までやる必要はないのですよ？」

「ううん。せっかく来てくれた召喚獣だし、契約しとくよ」

シエラは腰のポーチから宝石を取り出した。

白色をしている。

ディアヴロは首をひねった。ゲームでは見たことがない。

「それはなんだ？」

「ん？ よくわかんないけど、なんか必要らしいよ？」

シエラの返答に、レムが顔をしかめた。

「……昨日、ちゃんと説明したでしょうに。それは《契約の魔石》です。《隷従の儀



式』に使用します」

「うん、そうそう、お、覚えてたよ？」

そんなものがあるのか。MMORPGクロスレヴェリには《隷従の儀式》なんかなかった。ゲーム演出的に冗長だから省略されたのか？

あるいは、別の理由があるかもしれない——召喚獣を隷従させる《隷従魔術》は、人<sup>ひと</sup>族を奴隷にする《奴隷魔術》と同質のものらしい。おそらく、そちらでも《契約の魔石》は使われるだろう。

奴隷に関わる要素は、ゲームにおいて徹底的に排除されていた。

レムが白い石を差し出してくる。

「……ディアヴロは召喚獣に興味ないようですが、わたしたちの《隷従の首輪》を外す研究に役立つかもしれません。魔術師なら一つくらい持っておいてもよいかと」

「そうだな。邪魔になるものでもなし」

ディアヴロは《契約の魔石》を受け取った。

シエラが短い呪文を口ずさむ。

「……シエラ・L・グリーンウッドの名において命ずる。我に<sup>こた</sup>応え、我に属し、我に従え」



そして、薄い桜色の唇を開いて、白色の魔石を口に含んだ。

召喚獣《ターキーショット》は地面に降りて、まるで眠っているかのように静かにしている。

その頭に、ちよんっ——とシエラが唇をつけた。

彼女の唇の端から、かすかに赤色の輝きが漏れる。《契約の魔石》が光ったのか。じっ、とシエラは召喚獣を見つめる。

《ターキーショット》の首に、黒い光がまとわりついた。

ブウン……と耳に残る低音が響く。鍵がかかるのに似た、ガチッ！ という音が続く。

前にレムとシエラに《隷従の首輪》がついたときと同じだ。

ただし《ターキーショット》についたのは、その細い首に合わせたような小さな首輪だった。羽毛が深いためにほとんど隠れている。

シエラが瞳を輝かせて、こちらを見た。

レムがうなずく。

「成功です」

「やったあ！」

「ふふ……魔術反射されなくてよかったですね」



「うえ〜。《ターキーショット》に隷従するなんてイヤだよ！」

少女たちが笑い声をあげる。

ディアヴロも、つられるように笑みを浮かべた。

ふと、攻略サイトにあつた情報を思い出す。

「……その《ターキーショット》だがな……貴様は弓も使えるから、面白い組み合わせかもしれないぞ？」

「ふえ？」

「FPSでいう無人偵察機<sup>UAV</sup>とスナイパーのような使い方が、と攻略サイトに……」

「え？ え？」

シエラばかりかレムまでが困惑する。当然か。それらの用語を知っているわけがなかった。説明をし直す。

——ゲームでできたことが、この世界でもできるとは限らないけどな。

ディアヴロは二人から少し離れて、下草の間に銅貨を置いた。

「そこから、コインは見えるか？」

「ううん？」

「ならば、召喚獣を飛ばしてみるがいい」



シエラがうなずいて集中する。

「えっと……見てきて！」

命令を受けた《ターキーショット》が、ばっさばっさと飛び上がった。たしかに鈍重だ。

しかし、たとえ撃墜されたとしても術者にダメージはない。

シエラが目を見開いた。

「わわっ！ 飛んでる！ あっ、見えた！」

「場所がわかれば、矢を当てることもできるのではないか？」

「まっかせて！」

彼女が淀みよどのない動作で腰の後ろから矢を取り出す。と同時に、背負っていた弓を構えていた。

狙いを付けるような様子もなく、ぽんと空に向けて放たれた矢が――

放物線を描いて、ディアヴロの近くへと落ちてくる。

下草の間に置いた銅貨へ。

正確に真ん中を射た。

「やったあ！」

「うむ！」



ゲームだと、視界が通っていない相手を照準することはできない仕様だった。しかし、召喚獣《ターキーショット》によって視界を拡張すると、空から把握することで攻撃目標にできる。

現実でも、場所さえわかれば、あとは弓の腕次第だった。

レムが驚きの声をあげる。

「なんてこと……!? そんな使い方があるとは思いませんでした……。さすがはディアヴロです。異世界から来たというのに、わたしたちよりも深い知識を持っているなんて」

「フンッ、少し考えればわかるだけのこと。我は魔王だからな」

実際のところは、攻略ページの小ネタを覚えていただけだ。クロスレヴェリのプレイヤーは何百万人もいた。それくらい多いと変わり者もいるもので——みんながハズレ扱いする《ターキーショット》を、どうにか使えないかと試行錯誤したらしい。

むしろ、ディアヴロは別のことに感心していた。

シエラの弓矢の腕前だ。

あんな適当にしか見えない放ち方で、コインを射貫くとは。シエラの射手としての実力は、かなりのレベルに思えた。

地面に刺さった矢を引き抜く。貫かれた銅貨は、真っ二つになっていた。



シエラが駆け寄ってくる。

「ありがとう、ディアヴロ！ あたし、ちょっとハズレだったかも……なんて思っちゃったけど、この子のことすっごく気に入ったよ！」

感謝されるなんて慣れていない。ディアヴロは照れ隠しに、そっけなく視線を逸らした。

「そ、そうか……」

「えへっ、いっぱい練習してレベルを上げるね！」

「うむ」

「……練習するのはよいことですが……その練習で向上するのは、射手のレベルではありませんか？」

レムの鋭いツツコミに、シエラがショックを受けていた。



## 幕間

リフエリア王国歴一六四年六月六日――

場所は、王都セヴンウォールの七枚の城壁に囲まれた王城グランディオス、その深部にある控え室だった。

王に謁見する者が順番を待つ部屋だ。

異国の王すら利用する場所なので、リフエリア王国の威勢を示すがごとく調度は豪華ごうか絢爛けんらんを極めている。

黄金の壺つぼに、水晶のテーブル。床と柱は大理石で、壁は刺繡ししゅうされた絹でおおわれ、天井には巨大な神々の姿が描かれている。

幾度も魔王と戦って退けてきた歴史から、英雄にまつわる物品も多く飾られていた。

その部屋に――

国家騎士アリシア・クリステラは静かに立ち尽くしていた。

巨大な姿見に、自分が映っている。

通常の謁見者であれば全ての武器を取り上げられるものだが、アリシアは国家騎士として帯剣を認められていた。

なにかあったときには王を守る側である、と信頼されているのだ。



本人が気づかないうちに呪術的な物品を持たされていることもありえるので、所持品の検査は入念にされたが。

ファルトラからの帰路、途中で悪天候や騎士団の襲撃により足止めをされたため、予定より遅くなった。

これからリフエリア王に謁見する。その順番を待っているところだった。

部屋に、二人の来訪者があった。

四〇代半ばの人間ヒューマンの男女だ。

綺麗な身なりきれいをしており、一目で身分の高いことがわかる。アリシアの両親である公爵夫妻だった。

アリシアは任務のため王都を離れ、戻ってきてからすぐ王宮に来た。そのため顔を合わせるのは半月ぶりだった。

立派な髭ひげを生やした父親が、アリシアの肩に手を置く。

「長くのお役目、本当によく務めたな」

アリシアはわずかに口の端をあげて上品な笑みを形作った。

「ありがとうございます、お父様。国家のために働ける名誉を思えば、なんの苦も疲れもあります」



「そうか。お前ならば心配はないと思うが、くれぐれも陛下に失礼のないようにな」

「心得ております。公爵家の名に泥を塗るようなことはいたしません」

「うむ……立派に育ってくれたものだ。女性の身で陛下への拝謁を許される者は少ない。それもこれもお前の優秀さがあってこそだ。私たちの誇りだよ。これからも国家のために立派で優秀であるようにな」

「はい」

母親が、目元を指さしてくる。

「……それ、外したほうがいいんじゃないかしら？」

「あ、これは……」

「女性の顔に、金物なんて」

彼女は娘がメガネをかけていることを気に入っていないようだった。

昔は視力に問題なかったが、連日連夜の猛勉強の結果だ。

「……外しておきます」

これがないと、相手の顔がわからない。陛下は立っている位置で判別できるが、横にならぶ大臣となると怪しかった。

しかし、アリシアはメガネを外し、腰の後ろのポーチに入れておく。

そうそう、と母親が言う。



「あなたの部屋にあった、あの気持ちの悪い本のことなのだけけれど……」

「……え？」

母親が確認するように父親へ視線を向ける。

父親がうなずき、優しく笑った。

「お前の教育にあまりよくなさそうな書物があったのでね。どんなものでも興味を持つのはよいことだが……過激な思想や、魔族についての伝承など……べつに知らなくとも陛下のために働くことはできるだろう？」

「そう思って捨てておいたわ」

「………本を」

「あなたの為よ？」

「お前の為なのだよ？」

アリシアは満面の笑みを浮かべ、頭を下げた。

「お氣遣い、ありがとうございます。ご心配をおかけして申し訳ありません」

母親が嬉しうれそうにうなずく。

父親が安堵あんどの吐息をこぼした。

「うむ、本当にお前は完璧な国家騎士で、公爵家の子供だ。これで男ならば、さらに言うことはなかったが……いや、近いうちに相応ふさわしい相手を選んでおこう。我が公爵家は



安泰だな」

コンコン、と部屋のドアがノックされた。自分の順番になつたらしい。アリシアはもう一度両親に頭を下げる。

「お父様、お母様、それでは……」

彼らは誇らしげな笑みを浮かべて娘を送り出した。

+

——あの二人の首を落とすことができたなら、どれほど気持ちがいいだろう？

赤絨毯<sup>じゆうたん</sup>を歩きながら、アリシアは剣の柄頭<sup>つかがしら</sup>を左手で抑えた。

この剣は、ファルトラ市で購入したものだ。さすがは人族<sup>ひとぞく</sup>の最前線拠点。装飾は二流だが、斬れ味は一流だった。

ファルトラ地方騎士が襲ってきたので十人ほど斬ったが、刃こぼれひとつしていない。

この剣ならば、ただの人間<sup>ヒューマン</sup>二体の首など……空想のなかで剣を振るう。



——まだ、早い。

アリシアにはまだ立場が必要だった。

この腐臭のする醜い人族ひとぞくを駆逐するには、自分一人の力では足りない。

魔王が必要だ。

復活させるためには、公爵家令嬢という立場も、国家騎士という立場も有用であり、失うわけにはいかなかった。

世界を美しくするために……

アリシアは素直な娘であり、生真面目な国家騎士でなければならない。

腰のポーチからメガネを取り出し、掛け直す。

笑顔の仮面を被り、謁見の間へと入るのだった。

天井は高く、いくつもの柱があり、壁は遠い。

軍隊が出陣する前には多くの将官が並ぶことのできる広い部屋だった。

赤を基調とした国旗が壁に掲げられている。

そして、絨毯じゅうたんも赤い。

天井からは豪華なシャンデリアが吊るつされている。蠟燭ろうそくの灯りを受けていくつもの宝

石が煌めきらいていた。



六代目リフエリア王——ダルーシユ・サンドロスは今年で三七歳になる。

アリシアは壇の前、玉座まで八歩ほどの距離へ近づくと、ひざまずく 跪いて頭を垂れた。

「……国家騎士アリシア・クリステラ、ただいま戻りました」

ダルーシユが声をかけてくる。

おもて  
「面を上げよ」

許され、アリシアは改めて壇上を見つめた。

玉座は立派だった。大理石から削り出し、黄金と宝石をあしらった大きな椅子は、風格ある者が腰掛ければその威厳を知らしめることだろう。

今のリフエリア王は、まだ若い。

ダルーシユは内政外交においては大きな問題を起こしていないが……

もともと、この国は気候が穏やかで、土地は豊かで、海産物にも恵まれている。

問題は軍事の才だった。

それは未知数だ。

十二年前に即位して以来、大規模な会戦は起きていなかった。

ダルーシユの目つきは鋭いが、余裕がなくなっているだけかもしれない。

魔族の大軍がファルトラ市に押し寄せ、冒険者たちがウルグ橋砦きょうせうで撃退したという話は、もう王都まで伝わっていた。



だからこそ、アリシアがあのだへ派遣されたのだ。

——魔王。

その動向はリフエリア王国にとって、あらゆる問題よりも重要で危険なものだった。

ダルーシユの周りには、六人ほどの人間ヒューマンがならんでいた。

将軍や大臣など、国の重要人物たちだ。

当然、アリシアは彼らのことをよく見知っている。

壇上からの視線が、自分へと向けられていた。常人ならば卒倒しそうなほど緊張するのだろうか。

ダルーシユが両手を広げた。

「よく無事で戻った、アリシア・クリステラよ。遠くへの任務、ご苦労だった」

「もったいないお言葉にございます」

「事前の報告によれば、グリーンウッド王国と交戦があつたとのことだが……詳しい顛てん末まつを聞かせてもらおうか？」

アリシアに求められているのは私見ではなく、王の耳目としての情報だった。

しかし、物は言いようだ。

「報告いたします——グリーンウッド王国は出奔しゅつぽんしたシェラ王女の引き渡しを求めて、軍隊を《湖東の森》まで進めてきました。侵略の意図はなかったように思われます。し



かし、ガルフォード卿は領内に入ってきたことを宣戦布告と見なして撃退し、司令官であるキイラ王子を処刑いたしました。エルフの部隊はファルトラ市までは来ておりませんでした。いくら領内とはいえ、キイラ王子を害する必要はなかったかもしれせん。今後の隣国との関係は不透明になりました」

「ふむ……」

ダルーシュが腕組みした。

領主側からの報告も届いているだろう。あからさまな嘘はつけない。

しかし、ファルトラ領主に自重をうながすべき——という程度の情報は入れておいた。これでガルフォードは動きにくくなるはずだ。

魔王復活のために、障害は少ないほうがいい。人族とは思えぬほど強い大戦の英雄に、できればファルトラ市から消えてもらいたいほどだった。

しかし、無理はしない。

本当に隠さなければならぬことは別にあつた。

ダルーシュが尋ねてくる。

「……ディアヴロ」は何者であろうか？」

「その者は冒険者かと。ガルフォード卿の報告にあつたのでしょうか？」

「いいや、街の情報を収集させた者からだ」



なるほど、とアリシアは思う。

どうやら——ガルフォードは一度は排除しようとしたものの、ディアヴロの戦闘力を高く評価したようだ。

わざわざ王に「危険」と報告して、もしも「捕らえよ」などと命令されたら、対処に困ることだろう。

たった一人の冒険者を相手に「勝てません」と報告するわけにはいかない。

ガルフォードの魂胆は——ディアヴロのことを隠しておき、他国や魔族との戦いに上手く利用しよう、といったところか。

ディアヴロのことを秘密にしたいという点では、アリシアの考えと一致していた。

——我ながら、仮面の多いことだ。

両親に向けては、素直で生真面目な良い子を演じている。

ディアヴロたちに対しては、人道主義者という仮面を被っていた。わたくしは人助けが目的です、と偽って。

アリシアの本当の目的は、魔王の復活による人族の殲滅だった。

だから、ディアヴロを庇う。今の彼は人族の側に立っているようだが、いつか魔王と

して覚醒するかもしれない。それと、レムの中に魔王を感じた。もしかしたら、彼女が魔王復活の鍵なのかも……？



今は王の関心を逸らす必要があった。

「陛下、そのディアヴロという名の冒険者はおりますが……お気にされるような者とは思われません」

「一〇〇体の魔族を退けた、という噂うわさがあるが？」

「撃退はファルトラ市の多くの冒険者たちの活躍によるものかと。なにせディアヴロという冒険者は《元素魔術師》です」

リフェリア王国で魔術師といえば《召喚術士》のことだ。《元素魔術師》は弱くて話にならない、とされている。

そのことはダルーシュも理解していた。

「……ふうむ……たんなる噂か」

「あの街には、亜人も多い。流布している噂が真実ばかりとは申せません」  
「なるほどな」

王都では亜人への蔑視が根強い。

ダルーシュは高潔な人物で平等であろうとしているが、周りの者たちの価値観から完全には決別できていなかった。

亜人たちの噂話だと言え——ありえないほど強い元素魔術師の存在など、信じることはないだろう。



これで「ファルトラに異常なし」と謁見は終わるはず。そうアリシアは考えていた。しかし、ダルーシユの執着は予想外に強い。

「……ビナシエンがな」

宮廷占星術師の名前が出てきて、アリシアは内心で舌打ちした。わずかにも顔に出すことはしないが。

「ビナシエン様の予言でしouxか？」

「うむ。三日前に、西の街に魔王復活の兆しあり」と予言している。西の街といえばファルトラ市だろう」

「なるほど。これまでになく具体的ですね……」

アリシアは歓喜を抑えるのに苦労した。表情に出さないように。

占星術というのは、未来を見るのに重宝されている。しかも国王お抱えの占星術師となれば、的中率は相当なものだ。

それが「魔王復活」を予言した！

アリシアにとって、これほど喜ばしいことはない。

しかし、予言されたことで、復活を阻止される危険性も跳ね上がってしまった。これまでも、そういうことは何度もあったのだ。軍隊や冒険者が、魔族の儀式を邪魔したり、復活直前の魔王を再封印したり……



ダルーシュは悩んでいる様子だった。

「もちろん、ファルトラ市の備えは万全のつもりだ。英雄ガルフオードに精鋭一万を与えて配している。多くの冒険者たちもいる。なにより、大規模な結界がある。たとえば魔王が復活しようとも、王都の主力部隊が着くまでの時間稼ぎくらいはできるはず……」

「はい、万全と思われます。むしろ西方にばかり戦力を割いては、王都の守りや、他方への備えが心許なくなりましよう……東方にはヴィラール聖国もあります」  
臣下たちも、それぞれの意見を口にする。

とある將軍は、魔王の気配があるのであれば主力部隊を投入すべし、と主張する。  
しかし、大軍を動かすには莫大ばくだいな予算が必要だった。国庫を預かる大臣からは慎重論があがる。

予算は有限だ。無為に浪費しては、肝心なときに予算不足となってしまう。  
有事だからと重税を強いれば、民が疲弊する。

民は国の土台だ。民が豊かなまま負ける国はない。民が貧すれば国が滅ぶ日も近づくだろう。

ダルーシュは暗愚ではなかった。

疑心暗鬼に駆られての挙兵はしない。

しかし、何かしら手は打っておきたい、という様子だった。



アリシアは一步、前に出る。

「陛下、それならば自分をもう一度ファルトラ市へ向かわせてください。今回はグリーンウッド王国とすることがあり、早々に報告へ戻りましたが……魔王復活の予兆があるのであれば、発見し、必ずや阻止してご覧にいきます」

正義感と使命感を声ににじませた。

ダルーシュが重々しくうなずく。

「む……遠方への任務の直後だ。そなたには休養を与えねば、と思っているのだが……」

「ご配慮いただき、ありがとうございます。しかし、国家のために働けるのであれば、この身に疲れなどありません。どうぞ、わたくしにご命令ください、陛下」

「素晴らしい。余はそなたのような部下に恵まれ、歴代で最も幸せな王だな。よし、この件は貴殿に任せよう。再びファルトラに赴き、魔王復活の兆候を探り出すのだ」

「必ずや！」

頭こうべを垂れる。

いくらか予定外のこともあったが、結局は計画通りだった。内心の高揚を隠すのが大変なほどだ。

アリシアは顔をあげ、すぐ出立する旨を伝えようと口を開いた。



背後から、固い足音が聞こえる。

+

足音だけではなく、金属同士がこすれあうような音も一緒にあがった。

これは金属鎧よろいの音か。

戦時でもないのに謁見の間に、鎧姿で……？

思わず振り返る。

刃物のように鋭い印象の男だった。

重厚な緋色ひいろの板金鎧プレートメイルを身につけている。

そして、何本もの剣を所持していた。腰の左右に二本ずつ、背中にも二本、合計六本の長剣。それと、ベルトで固定された短剣もある。

剣の柄頭つかがしらから鎖が伸びており、それがこすれて不快な金属音を響かせていた。

近く来ると――

血の臭いがした。

洗い落としてはいるようだが、染みこんだ血が臭っている。

戦時のような風体とは不釣り合いに、男は人の善さそうな笑みを浮かべて、アリシア



の隣で跪ひざまずいた。

「聖騎士サドラー、大主神官だいしゅしんかんより書状を預かって参りました」

差し出された書簡を、足早に近寄った従者が受け取り、王へと届けた。

羊皮紙の書簡を広げながら、ダルーシユがうなずく。

「うむ……なるほど、ご苦勞であつた」

謁見の順番すら守らないとは無礼な——とアリシアは思ったが、口にはしない。

大主神官は教会の最高位だ。

リフエリア王国は「古代の神と神族」を信奉している。その力は明確に人族ひとぞくの生活を支えていた。治癒の奇跡は珍しいものではない。豊穡ほうじようの祝福は確実に効果を發揮する。

かつて、この世界には神族と魔族がいたという。

神族の長たる神と、魔族の王たる魔王は長く長く戦い続けた。その果てに、神は魔王を倒し、砕いて、破片を方々に封印する。

そして、戦乱によって荒れ果てた大地に、神は豊かな恵みをもたらした。さらに神族の血から人族ひとぞくを生んだ。

つまり、人間・エルフ・ドワーフ・グラスウォーカー・豹人族ひょうじんぞくは、神族の末裔まつえいなのだ。



亜人のなかには混魔族デューマンというのもいるが、これは人間ヒューマンに魔族の血が混じったものだといわれている。

祝福された大地を人族ひとづかに与え、神族は空へと帰っていった。

我々は天から見守ってくれているであろう神々を讃えたた、畏敬し、現世と死後の救いを求めて祈る。

これがファルトラ王国で最も一般的な宗教だった。

教会の権力は強く、大主神官ともなれば国王にも匹敵するほどだ。

重臣たちも口々に聖騎士へ労いの言葉をかける。その声には怯えおびの色が混じっていた。

聖騎士というのは、神の意志を武力によって代行する者」を指す。

彼らが討伐するのは魔族やその信望者——魔王復活を望む《魔王崇拝者》たちだ。

その点では、軍隊や国家騎士と変わらない。

ただし、仕えている者が違う。

聖騎士は神に仕え、教会の意向に従って動いていた。彼らは法ではなく教義に従う。

そして、何者が魔王崇拝者であるかは神の御意志による」と言いながら、結局は聖騎士が独断と偏見で判断していた。



たとえば貴族や富豪であろうとも、魔王崇拝者と決めつけたなら凄惨な拷問を加える。つまり、聖騎士は教会の権力を守る剣だった。

それゆえに、王の重臣たちですら、彼らとは関わりたがらない。目を付けられたくないのだ。

幸いなことに聖騎士は多くない。国家騎士が全国に一〇〇〇人以上いるのに対し、聖騎士は十三人しかいないのだった。

アリシアはつぶやく。

「つい先日、南方に発たれたばかりとお聞きしておりましたが……お早いご帰還ですね、サドラー様？」

「ええ、速やかに確実に魔王崇拝者を救済するのが我ら聖騎士の使命ですから。南方の村も最初は疑わしい者がなかなか姿を見せずに苦勞しました。しかし、小生は神の御心みこころに従うのみ……最後は全ての村人たちに快く協力していただきました」

「……村の者たちはどうなったのですか？」

「救済されましたよ、全てね」

アリシアは思わず背筋が凍るような感覚を抱いた。

はつきりとは答えなかったが、聖騎士のやり口は決まっている。拷問と虐殺だ。

その南方の村は「魔王崇拝者がいる」とされ、結局は村人全員が、むごい方法で殺さ



れたのだらう。

——ひとごとく人族が死んだことは、どうでもいい。

そんなものに、アリシアはわずかにも心を痛めない。

しかし、聖騎士は脅威だった。

例えば王や重臣たちに「実は魔王復活を望んでいるのではないか」と疑われたとしても、いくらでも言い逃れの方法は用意してある。疑われないための実績作りもしていた。

聖騎士には通用しないだらう。

少しでも疑われたら、容赦ない拷問が待っているのだ。口を割らない自信はあるが、この身や心を壊される不安は拭えなかった。

できれば関わりたくない。アリシアは早々に謁見の間を辞してしまいたかった。ところが、サドラーがとんでもないことを言い出す。

「失礼かとは思ったのですが……国家騎士クリステラ殿に与えられた任務について、聞こえてしましまして」

「……それが、なにか？」

「魔王復活の予言ありと聞くや、自ら赴こうという、その献身！　素晴らしい！」

「……ありがとうございます」



「しかし、あの街に、そのような疑いがあるのなら、我ら聖騎士こそが相応しいかと。どうか、ファルトラ市のことは小生に任せていただきたい！」

「それは……」

困る。

しかし、どう言って断ればいいのか咄嗟とつさに思い浮かばなかった。

迂闊うかつに反論して、魔王崇拝者と疑われれば、この身が危険に晒さらされる。

冤罪えんざいであつても証明は難しい。ましてアリシアは魔王復活を望んでいる魔王崇拝者なのだから、どこまで隠しおおせるかわからなかった。

ダルーシュもすんなりとは受け入れられない。難しい顔をしていた。

聖騎士がファルトラ市を、南の小さな村と同じようにしたら看過はできない。なにより、領主ガルフォードが黙っていないだろう。

国軍と教会が衝突するような事態は、国王として絶対に避けなくてはならなかった。

重臣たちの末席にいる若い大臣が、うやうやしく頭こしうべを垂れた。

「陛下、おそれながら……」

「お、おお、ノアか。なにか妙案があるか？」

この場合は、できれば聖騎士を黙らせるか、せめてファルトラ市を守る策が求められ



ていた。

ノアと呼ばれた男のことをアリシアはまだよく知らない。

最近、どんどん宮廷で評価を上げている若者らしい。政治や軍事ばかりでなく、農業や薬剤についても造詣を持ち、その提案は国家規模で産業に変革をもたらしめているという噂だ。<sup>うわさ</sup>





ギヴン侯爵家の養子だというが、それ以前の素性までは調べていなかった。

金髪碧眼へきがんで造り物めいた欠点のない美形だが、冷たい印象はなく、むしろ柔和な笑みを浮かべている。髪を短くした少女のようでさえあった。

「……国家騎士のアリシア殿も、聖騎士のサドラー殿も、どちらも信に足る人物です。

ここは両者に任せてはいかがでしょうか？」

「ふむ。同行させよ、ということか」

「魔王復活の予兆を見つける、という目的は同じ……手を取り合って無事に解決していただければよいかと」

「……悪くない」

ダルーシュはノアの提案を気に入ったようだ。

サドラーの意見を却下することなく、その暴走を監視することができる。

監視を押しつけられたアリシアは内心で毒づいていたが。

——ノアという男、私を排除する気か？ それとも、本気で聖騎士を抑えられると考えているのか？

ダルーシュが改めて下命する。

「国家騎士アリシア・クリステラは余が最も信頼する者の一人だ。聖騎士と共に魔王復活の兆しを探す大役を任せるに、なんら問題ないと思うが……どうか？」

少なくとも王は、アリシアを捨て石にするつもりはないようだった。ここまで評されれば、旅先で意見が衝突したところで、サドラーが安易にアリシアを魔王崇拝者などと決めつけることはできない。

教会が国王と対立するつもりならば別だが……

サドラーが恭しく礼をした。うやうや

「有能で勇敢な国家騎士が共にあらば、なんとも心強い。必ずや魔王復活の予兆を探し出し、神に誓って阻止したく思います」

アリシアも頭を垂れる。こうべ

「陛下のご期待に添えるよう、全力を尽くします」

サドラーと並んで、謁見の間を退室する。

背後で扉が閉じられた。

彼はあいかわらず善人そうな笑みを浮かべている。

「クリステラ殿、早速、旅支度をいたしましょう。出発は明朝でいいですか？」

「ええ、それが適切かと」

「ファルトラ市は初めて行きます。旧魔王領が近いですし、どれほどの魔王崇拝者がいるのか……多くの救済が必要な街ですね」

「救済が……そう、かもしれませんね……サドラー様は……」



「なにか？」

「人族ひとぞくが嫌いなのでしょうか？」

「まさか！ 僕は人が大好きですよ。愛しています。神々に祝福されし末裔まつえいなのですから。だからこそ魔王崇拜などというものが許せないのです」

「……なるほど。よくわかります」

この男は人を好きだから人を殺すのか……意味がわからなかった。

確実なのは、面倒が増えた、ということだ。うまく進んでいた計画に、大きなほころびが出たことを認めるしかなかった。

深いため息を押し殺す。

サドラーの顔から、貼りつけたような善人の笑みが消えていた。

「ところで、クリステラ殿は表情が変わらないのですね？」

「え？」

「ほら、今も。意識して表情を隠している。いったい、どういう理由なのでしょうか？ 隠さなければならぬ思惑が？」

胸の内側に、刃物を挿しこまれたような錯覚に、アリシアは吐き気さえ覚えた。

しかし、長く演じてきた仮面が、苦笑の表情を作る。

「わたくし、驚いたり笑ったりすると幼く見えてしまうもので……王宮などでは意識し

て真面目そうな顔をしています。どんな表情でも凜々しく見える殿方にはない苦勞かもしれない苦勞かもしれない

「ああ、これは失礼を！ でも、僕の前では気にしないでください。顔の表面で人を判断するような愚かなことはいたしませんから」

「ありがとうございます」

「やっぱり、人の価値は、内臓の色で決まりますよね」

「……………え？」

もうどんな顔をすればいいのかわからない。ただ、気味が悪いと思うばかりだった。



## 第一章 魔族と話してみる

召喚獣を手に入れた翌日――

ディアヴロたちは、今度は《湖西》こせいの川辺に来ていた。ウルグ橋砦きょうしから、一時間ほど下流に向かって歩いたあたりだ。

岩がごろごろ転がっているが、だいたいは平たくて、膝丈くらいの下草が生えている。

今日は、ちよつとした採集クエストだった。

簡単な割に、最近治安が悪化したとかで報酬が高めに設定されている。いわゆるお得なクエストだった。

どうにか必要量の薬草を集め終え、持ってきた堅焼きパンで昼食を済ませる。ファルトラ近辺は四季の変化は穏やかで、夏になっても気温上昇は少ないという話だが、それでも六月に入ってから、暑いと感じる日が増えていた。

今から帰れば、夕方になる前に街に着くだろうか。

シエラが眉をひそめる。

「そういえばレム、なんか臭わない？」

「……ニオイですか？ 川辺ですし、水や草のニオイはありますが？」

「そうじゃなくって、レムが臭くない？」

「……………は？」

「んー、やっぱり臭うよ。ほら、すっごく動き回ったじゃん。だから、汗臭い。あと、土臭い。それから……なんだろこれ、獣臭い？」

すんすんと鼻を鳴らす。

レムが身体を抱いて、飛び退いた。

「か、嗅がないでください！ 臭くありません！」

「でも水浴びくらいしたほうがいいよ。っていうかあたしは水浴びしたい！ ねえ、そうしようよ！」

「くっ……あなた……自分が水浴びしたいからって人を『臭い』などと言うのは、かなりどうかと思いますよ!？」

「違うよ！ 本当に臭いんだよ！」

力強い断言だった。

レムが絶句する。

シエラが矛先を変えた。

「ね、ね、ディアヴロも思うよね!? レム、臭うって」



「ん？ む……さて……」

ディアヴロは二人から目を逸らして頬を搔いた。

——目の前で、臭いの話なんてしないではいいなあ。

ようやく一緒にいることには慣れてきたが、素だと会話できないくらいディアヴロは女性に不慣れだった。

念のために嗅覚に意識を向けてみる。

——べつに、臭くないな。

レムの言うとおり、川辺だから水の匂いがする。それと、草の匂いか。

少なくとも昔の自分の部屋よりはマシだ。カビとホコリと……いや、思い出したくもない。

「ねえ、ディアヴロ、あたしは、どう？ けっこう汗かいてんだよねー」

シエラがわざわざ身を寄せてきた。

なにかの匂いがあるとするれば、薬草摘みで身体が温まっているせいか、甘い女の子のニオイがいつもより強く感じられるくらいか。むしろ、いい香りだとさえ思う。

しかし、そんなことを言うのは変態っぽいので、返事に困った。

「う……む……」

レムが泣きそうな顔で、こちらを見る。彼女は離れて距離を取っていた。

「……ディアヴロも、その……わたしが臭いと思っ  
ているのですか？」

こんなときは、彼女が傷つかないように上手いことフォローしつつ、話題を逸らすのがいいだろう。

「う……いや……」

そんな気の利いたことが言えたら、コミュ障などやっていなかった。

女の子に臭いについて訊きかれたときの魔王の反応なんて知らない。想像もつかなかった。

シエラが元気よく言う。

「もういいじゃん！ 水浴びすれば綺麗きれいになるよ！」

「……くっ……それでは、わたしが現時点で臭うことを認めたことになるではありませんか」

「えー、じゃあ、こっち来てディアヴロに嗅いでもらう？」

レムがジト目で睨にらんだ。

「……豹ひょうじんぞく人族は水に濡ぬれるのが好きではありません……毛が濡れると動きが重くなるし、周囲の状況を把握しづらくなりますから……」

「じゃあ、いい機会だからレムも水浴びを好きになろう！」

「どういう理屈ですか!？」



反論はしつつも、シェラがレムの手を取ると——渋々という様子だったが、抵抗はしなかった。

そういえば、ディアヴロもたまに濡れた布で身体を拭いている程度だ。

リフェリア王国には風呂やシャワーの習慣がないらしい。それでも、空気が乾燥しているし、風もあるから過ごしやすかった。

暑い日でも、新品のシャツを着た直後は快適だと思う。あの感覚がずっと続いているようなものだ。

たまには水浴びくらいしてもいいかもしれない。

十

クエストを受ける冒険者が減っているとはいえ、薬草摘みに使われる場所で水浴びするのはマズイだろう——ということ、もうすこし下流へ移動した。

手頃な寄州よりすを見つける。川が曲がっている内側に、砂と玉砂利が堆積している弓状の部分だ。

川の流れも外側より内側のほうが穏やかだから、水浴びにはちょうどいい。

寄州は周囲より低くなっていることもあって、これなら水着姿を見られる心配もなさ

そうだった。

「……ん？ 水着だと？」

「どうしたの、ディアヴロ？」

小首をかしげたシェラに尋ねる。

「貴様ら、水着など持ってきているのか？」

「なに、それ？」

「……ミズギですか？ なにかの道具でしょうか？」

「貴様らは服を着たまま水に入るのか？ 洗濯もできて、ちようどいいかもしれんが」

ディアヴロの言葉に、シェラが笑う。

「あはは、そんなことしたら風邪ひいちゃうよー」

「……そうですね。服も傷みますし」

シェラが装備を寄州のうえに置いた。摘んだ薬草と、弓と矢と、小さなポーチには小  
銭や召喚獣のクリスタルが入っている。

衣服の紐をゆるめはじめた。

「水浴びなんだから、裸が当然だよ、ディアヴロ？」

「……これも、水浴びが好きになれない理由のひとつです。他人の前で装備を手放すな  
どと」



「他人じゃないよ、仲間だよー」

「まったく……」

レムは肩をすくめつつ、否定はしないのだった。

彼女も装備を置いて、背中側のホックを外す。

ディアヴロは暑さとは別の理由で、だらだらと汗を流しはじめた。

——ハ・ダ・カ!?

この世界には、水着がないのか!? おかしい! MMORPGクロスレヴェリには

水着装備も普通に実装されていたぞ!

軽くパニックになる。

とくに恥ずかしがる様子もなく、シエラが狩人の衣服を脱いでしまう。ぷるん、と豊かな胸が揺れた。

レムは赤面してはいたが、薄い胸を覆う軽装鎧よろいを外した。形のいいふくらみかけの丘に小さなピンク色のぽっちがのっている。

ディアヴロは鼻先を殴られたかのように、のけぞった。

「はぶうあっ!」

「……どうしましたか、ディアヴロ?」

「だいじょうぶ? なんかあった?」

二人が心配そうな顔をする。

むしろ、彼女たちのほうが大丈夫なのだろうか。

「い、いひゃ……キシヤマらは恥ずかしくもないんスカ？」

思わず地が出た。

レムが片手で胸元を隠す。

「……そ、そういうことは言うものではありません。他の場所ならばともかく、水浴びで服を脱ぐのは当然のことです。相手の身体は見えても見ないのがマナーです」

「そうそう、ひようじんぞく豹人族のくせにぺったんことか、そういうこと言うのはマナー違反だよ？」

「はー!? なんで言うのですか、このおっぱいエルフ！」

「ひどい!？」

言い争いつつも、二人は下まで脱ぎはじめる。

シエラがショーツに指をかけて、レムもスパッツ——なのだろうか、この世界にポリウレタン弾性繊維なんてありえないから、綿か。あるいは、魔術的な素材で作られた衣服だろう。とにかく、スパッツをつまむ。

引き下ろす。

まるん、としたお尻や、女の子たちの秘密の場所を——見てしまう前に、ディアヴロ



は背を向けていた。

この世界に来て初めてというくらい心臓が脈打っている。

心臓発作で死ぬかもしれない。

女の子の裸が目に入っても気にせず堂々と振る舞ったり、欲望のままに凝視できるような性格だったら、もう少し違った人生があっただろう。

——はあ、ヘタレだな、俺。

内心でため息をつきつつ、言葉では誤魔化ごまかしておく。

「我は水浴びなどという戯たわむれは好まぬ。貴様たちだけ臭いを落としておくがいい」

二人が声を揃そろえる。

「臭くないよ!？」

「臭くありません!」

とにかく、ディアヴロは背を向けていた。

さらさらと流れる川の音と、彼女たちの声だけが聞こえてくる。

レムがため息まじりに。

「……あなたのせいで、とんだイメージダウンです。わたしは毎日、身体を拭いていますし、ちよつとくらい汗をかいても臭くありません。豹人ひょうじんぞく族の汗は臭くないのです」

「それ本当!？」

「……く、臭くもないし、しよっぱくもありません」

「へー、どれどれ？」

「ひゃっ!? なんてところを舐<sup>な</sup>めるんですか!？」

「ふむふむ、たしかに、しよっぱくない……かも? へー、どうなってるの?」

「……理由は絶対に言いませんから」

「エルフも同じかな。というか、あんまり汗かかないんだよね。森に隠れてるときに臭いがしたらバレちゃうもん」

ひょうじんぞく

「……豹人族も同じです。わたしたちの先祖は平原で狩りをしていたようですね」

「そうなんだー。あたしの汗も舐めてみる?」

「ばっ!? そんな趣味はありません」

「じゃあ、あたしが舐めよう」

「やめなさい、二度も!」

「ばしゃん! と水音があがる。」

「あー潜っちゃった」

「ふふん、これで汗は流れましたね」

「あたしも、潜るー!!」

また水音がした。



ばしゃばしゃ、と暴れている。

「なんで、抱きついてくるのですか!？」

「えへへ！ エルフの国ではさ、みんな水浴びのとき、こうして抱きしめたり、追いかけてっこしてたんだよねー。でもあたしは王女だから、いつも離れたところで身体を洗われるだけだったんだ……」

「……なるほど……ひゃうっ!? なんでお尻を揉もむんですか!？」

「前も思ったけど、レムって筋肉、しっかりついてるよね」

「あなたはエルフのくせに贅肉ぜいにくがつきすぎなのです!」

「贅肉じゃないよ！ 胸についてるだけだよ!? ほら！ ほらほら！ ちゃんとお腹もへっこんでるし、くびれだって!」

「くっ……これが！ 駄肉だというのはです!」

「ひゃんッ！ そ、そんな乱暴にしたら……んんッ……や、やさしくしてくんないと……ダメだよお」

「このっ、これがっ！ こんな駄肉が!」

「ふあうんッ！ ん、んんッ!」

ばしゃばしゃという水音と、シェラの鼻に掛かったあえぎ声を聞いているうちに、デアアヴロは、たまらん感じになってしまう。

——ちよつとくらい見てもいいんじゃないか？

べつに「見るな」と言われてるわけじゃないんだし。

チラツと一瞬だけなら……

ディアヴロは周りを見る振りをしつつ、チラツと背後に視線を送ろうとする。

「きゃああああああああああああああ——ッ!!」

シエラの悲鳴が響き渡った。

「わあ！ ごめ……ッ!？」

いや、この切迫した感じの悲鳴は、なにか違う！

謝りかけたディアヴロだったが、様子がおかしいことに気づいた。

レムが叫ぶ。

「こ、こいつは……まさか、魔族なのですか!？」

+

——魔族だと!？」



恥ずかしがっている場合ではなくなった。

ディアヴロは川のほうを向いて身構えつつ、腰のポーチに手を伸ばす。《天魔の杖》てんまつえが必要だ。

川の中には、レムとシェラがいた。

それだけでなく、もう一人。

見覚えのある魔族だった。

銀色の髪が、ふわりと腰まで広がっている。

肌は褐色であり、よく見れば表面が鱗うろこのようになっていた。

小柄で胸もない体型なのと、目が大きいせいで、幼い印象を受ける。しかし、まぎれもなく魔族だ。その金色の瞳には爬虫類はちゆうるいのような縦に裂けた瞳孔があった。

以前、ウルグ橋砦きょうしやうせきに攻めてきた一〇〇体もの魔族を率いていた指揮官——名をエデルガルトといったか。

そいつが、レムの腕を掴つかみ上げていた。

もう一方の手には大きな馬上槍ばじやうそうを握っている。

ディアヴロの背筋を冷たい汗が伝った。

レムの内には魔王クレブスクルの魂が封じられている。そして、解放の手段は彼女の死だという。

もしも、その秘密がバレていたら、殺される。殺されてしまう。  
ディアヴロは内臓が熱くなるのを感じた。





「貴様、なにをしに来た？」

自分でも驚くほど、硬い声だった。

どの魔術を使おうと、あれほど至近距離にいては、エデルガルトにだけ攻撃を当てるのは難しい。

高精度の魔術もあるが、威力が弱かった。それでは魔族を退け<sup>しりぞ</sup>られない。

シエラは怯<sup>おび</sup>えて震えていた。

ウルグ橋砦<sup>きょうしやう</sup>で戦ったことのある魔族だと覚えているのだろう。レムの絶望的な状況に、ぽろぽろ、と涙をこぼしはじめた。

「レ、レム……やだ……」

「くっ……は、離しなさい！ まさか、こんな場所に魔族が……ううう……デИАヴロ、魔術を使ってください！ わたしのことは気にせず！」

馬鹿を言え。

レムを見捨てるなんて、絶対にしない。やるしかない、一撃で魔族を吹き飛ばすくらい高威力の魔術を……

——俺の技術で、魔族だけに当てるんだ！

発動位置を外して、効果範囲のギリギリにエデルガルトを捉えた。

デИАヴロは魔術を発声しようとする。



その直前、エデルガルトが手にした馬上槍ばじょうそうで、水中を突いた。川底に突き刺した槍から、手を離す。

「戦う気は、ない。そっちと戦うのに、一人では来ない」

「なんだと？」

「話す？ 話さない？」

「レムを解放しろ。さもなくば、跡形もなく消し飛ばす」

「わかつた」

驚いたことに、エデルガルトはレムからも、あっさりと手を離れた。

レムが慌てて逃げてくる。

泣いていたシエラが駆け寄った。ぎゅっ、と抱きしめる。

「わぁん！ レムッ！」

「ば、ばかシエラ」

「もうダメかと！ 死んじゃうかと思ったよお！」

「……わたしだって覚悟を……ううう」

死の恐怖を思い出してか、レムは小さな肩を震わせていた。

エデルガルトが両手を広げる。

「今日は、戦わない。エデルガルト、話しに来た？」

レムとシェラが不安げにこちらを見る。

信じるのか？

魔族と会話など成立するのか？

しかし、レムを解放したのは間違いなかった。

ディアヴロは杖を下ろす。<sup>つえ</sup>

「フンッ……貴様は馬鹿ではないらしいな……俺の怒りを買えばどうなるか理解しているようだ」

「エデルガルト、はー、頭いい？」

「話がある、と言ったな？　しかし、ならば、どうしてレムに手を出そうとした？」

「……こっちにも、事情があるっぽい？」

「ほう？」

「魔王様の魂を、感じる？　触って確信した。たしかに、いる」

エデルガルトが金の瞳でレムを見つめる。

「ひっ!？」

レムが身をすくめ、シェラがかばうように抱き寄せた。

ディアヴロは舌打ちする。

「チッ……触ったらわかるだと……?」



すこし前に、ディアヴロは魔力の流れを感じ取る練習をしている。そのおかげで、触れれば相手から多くの情報を得ることができるようになった。

エデルガルトの言っていることは嘘うそではないだろう。

まして、魔族ならば、人族ひとぞくよりも《魔王クレブスクルム》の存在を感じ取れて不思議ではなかった。

——それ以前の疑問はあるがな。なぜ、レムに目を付けた？

先日、街に出現した魔族グレゴールは気にしてもいなかったようだが……

今は詮索よりも、対処を考える必要があつた。

「レムの中に魔王の魂があるとして、どうするというのは？　レムを殺すか？　我と戦うというのか？」

「だーからー今日はー、ない。その豹人族ひょうじんぞくをー殺すはー、ない」

槍やりは川底に刺したままで、手に取る様子はなかった。

エデルガルトは魔族だ。

しかし、彼女は話し方が独特なだけで馬鹿ではなかった。一〇〇体を率いる指揮官なのだから当然か。

なにより、ただ殺せば復活するのであれば——可能性がありそうな人族ひとぞくを片っ端から殺すはずだった。わざわざ魂の存在を確かめる必要はない。

「ふむ……どうやら、俺が聞いている話とは別の情報がありそうだな」  
シェラが目をはちくりする。

「なにに？　どういう話なの!?　あたしにもわかるように説明してよ！」  
レムが小さなため息をついた。

「……仕方ありませんね。わかりました。全て隠さず話します。わたしの秘密について」

+

おだやかに流れる川の中に、槍<sup>やり</sup>を突き立ててエデルガルトが立っている。  
深さは腰まで水に浸かるくらいか。

ディアヴロは寄州<sup>よりす</sup>から、膝下まで川に入ったところにいた。

すぐ横に、まだ裸のままのレムとシェラがいる。二人とも髪から雫<sup>しずく</sup>がこぼれ、その肌のうえを水が伝い落ちていた。

レムが静かに話す。

「……わたしの中には、魔王クレブスクルの魂が封じられているのです」  
シェラが大きな声をあげる。



「えええッ!? 魔王って!? 魔王だよね!?」

「……わたしが死ねばクレブスクルムが復活してしまう、と母親からは聞かされてます」

「そんな! じゃあ、なんで冒険者なんかしてるの!? 危ないよ!?」

「わたしは封印を母親から託されました。そして、わたしが子供を産めば、その子に封印が受け継がれていくのでしよう……いつかクレブスクルムが復活するときまで、連綿と続きます。だから……わたしは、この手で倒すと決めたんです。その強さを得るために冒険者になりました」

「あ、ひょっとして、前に宿屋で言ってた〴〵とある問題〴〵ってそれなの?」

「あなたにしては、よく覚えていましたね。そうです。わたしはクレブスクルムを倒さないかぎり、のんびり珈琲店<sup>カフェ</sup>をやる余裕などないのですよ」

少し前の夜——故郷を捨てたシェラが〴〵ディアヴロとレムと三人で珈琲店をやりたい〴〵と夢を語った。

そのときにレムは〴〵今は問題を抱えていて応えられない〴〵と返したのだ。シェラが頬をふくらませる。

「レムの大切なことだもん、覚えてるに決まってるじゃん! でも、まさか魔王の魂のせいだなんて想像もつかなかったよ」

「……そう簡単に気づかれては困ります。このことを知っているのはセレスとディアヴロだけなのですから」

魔術師教会の長であるセレスティーン・ボードレールだけは、以前から秘密を知っていたようだ。

ディアヴロはレムと出会った日の夜に、彼女を拷問して白状させた。そのとき、約束もしている。

彼女の問題は、自分が呑みこんでやる——と。

シエラが寂しそうだった。

「言えないくらい大きな秘密って、わかるけど……でも、打ち明けてほしかったな」

「……すみません。でも、あなたにまで背負わせるべきではないと判断しました」

「あたしは、そりゃ、弱いけどさ？　でもレムが大変な目に遭ってたら、なんか手伝いたいよ。だって仲間だもん！」

シエラが再びレムを抱きしめる。そして、ぽろぽろと泣きだした。

レムが意外そうにする。

「……泣くほど秘密にされたことがショックでした？」

「ぐす……ちがうよ……これは……あたしが泣いてるのは……レムが、今まで、ずっと秘密にしてがんばってきたことにだよお。そんなの、つらくて、寂しくて、悲しい……」



大変だったよね。ごめん……気づかなくて……ごめん」

「……ぐっ」

齒を食いしぼるレムの瞳からも、透明な雫<sup>しずく</sup>がこぼれた。

エデルガルトがぼんやりした顔で首をかしげる。

「……質問していい、空気？ 長くなりそうなら、帰る。人族<sup>ひとぞく</sup>に見つかるの、やだ」  
ディアヴロがうなずいた。

「許す、尋ねるがいい」

打ち明け話だけで終わらせる気はない。

「おまえは、魔王様を打倒したい？ それ、本気？」  
レムがうなずいた。

「……本気です。わたしも、あなたに訊<sup>き</sup>きたいことがあります。魔族に魔王の魂<sup>ありか</sup>の在処が知られたら、すぐさま殺されるものと思っていきましたが……わたしの死では、復活はしないのですか？」

「する。間違いなく、おまえが死ねば、魔王様は復活する。け、ど……ちよつと違う。魔王様は、繊細？ 器を壊しただけじゃ、いろいろ足りない」

「……なるほど、魔王復活には儀式が必要だという話は聞いたことがあります。魔族の

儀式が」

「そう。エデルガルトは、魔王様の完全復活を望んでる。だから、おまえの命は狙わない？ 死なせない！」

はつきりとした声での宣言だった。

ディアヴロは問いかける。

「貴様は、その魔王を完全復活させる方法を知っているのか？」

「知ってる。魔族の司祭から聞いた、から？」

「ふむ……」

シエラが目をすがめる。

「その方法って、レムは安全なの!? 儀式の最後に刃物でドスツ！ とかじゃないの!?」

たしかに、それはいかにも魔族の儀式らしいフィナーレだった。

エデルガルトが首を横に振った。

「……危険……ない、はず。むしろ、魔王様の母として、大切にされるっぽい？」  
うんうん、とうなずく。

——信用できるのか？

たとえばレムが死ぬような儀式だとしても、ここで『死ぬらしい』などと白状するほど



愚かではあるまい。

エデルガルトが言う。

「おまえは、エデルガルトのこと信じない？　信じない！　だから、儀式は教える。やるのは、おまえら。魔族は、さわらない。信じる？」

「いくらかマシな提案だな」

信用しきるのは難しいが、魔族が近づかずに、ディアヴロが儀式を行うのであれば危険は少なくなる。

レムの安全が一番の問題だった。

もう一つの懸念は……

——俺は、クレブスクルムに、勝てるのか？

ディアヴロは左手を見る。そこには《魔王の指輪》が嵌<sup>は</sup>まっていた。全ての魔術を反射する超級レアアイテムだ。

他にも、《漆黒<sup>しつこく</sup>の虚<sup>うつろ</sup>》という黒い服や、《暗雲<sup>あんうん</sup>の帷<sup>とばり</sup>》という黒いマント。

頭に《歪<sup>ゆが</sup>んだ王冠》という装備をつけている。角が生えているように見えているのは、これのせいだ。

武器は《天魔の杖<sup>てんまつえ</sup>》を持っている。

これらは、どれもMMORPGクロスレヴェリにおける最強装備のひとつであり、ディアヴロの勝利を支えてきた。

この世界での戦闘も何度となく経験している。

——今さら、臆する理由はない。

頭からノイズが減っていくのを感じた。強敵に挑む前、ときどきこうなる。思考がシンプルになっていく。

ごちゃごちゃしたことが、全てどうでもよくなった。

「魔王クレブスクルムを復活させ、この俺が倒す！」

ディアヴロは断言した。

レムがうなずく。彼女には秘密を打ち明けられた夜に、自分が倒すと話していたからだ。

「……信じています……ディアヴロ」

それは祈りのような言葉だった。

シエラが驚きの声をあげる。



「ええっ!? 魔王を倒すの!? そんなことできるの!?」

エデルガルトが唇の端を歪めて笑った。

「フツ……魔王様、はく、魔族を一〇〇体束ねたって勝てないほど、強い」  
当然だろう、強くなければ苦勞して復活させる意味もない。

ゲームではラスボスと直前の中ボスとで、一〇〇倍以上もの能力差はなかったが……  
さて、この世界ではどうか?

安全を確かめる術はない。

しかし、安全が確認できるまで何もしないというのは、唾棄すべき怠慢でしかなかった。そもそも、何もしないことが安全だという保証はどこにあるのか?

「エデルガルトよ……クレブスクルム復活までは協力してやろう。そのあと、偽物の魔王など俺が粉碎してくれる。本物の魔王はこのディアヴロなのだからな!」

「んく? 魔王様はく、強い。強いから、魔王様……だから、魔王様は負けない」  
シエラが不安げに言う。

「ディアヴロは強いけど……魔王って、ものすごく強いんでしょ? あたし、ディアヴロが死んじゃうのはイヤだよ?」

勝てる保証はない。

そもそも、魔王クレブスクルムはゲームで未実装だった。能力は未知数だ。

「もしも、何年も先に実装する予定の敵だったら？ その頃には、プレイヤーたちのレベル上限が変わっているかもしれない。装備も遥かに高性能なものが実装されているかも。」

不安を挙げれば切りがない。

頭を抱えて転げ回りたいほどの恐怖心があった。

しかし、魔王はいつだって余裕の笑みを浮かべているものだ。不安に怯えたり、劣勢だからと焦ったり、安全が確認できるまで行動しないなんて、魔王ではない。

——強敵を笑顔で迎えてこそその魔王だろう！

だからディアヴロは笑う。

「我が力を疑うか？」

「そ、そうじゃないけど……危ないよ？ クレブスクルムがどのくらい強いのかわかんないのに……」

ディアヴロは鼻を鳴らした。

「何度も言っていることだ。本物の魔王は俺だ。このディアヴロが真の魔王であり、最強なのだ。いかなる存在が復活しようと、我に挑むのならば殲滅するのみ！」  
レムがお腹に視線を落とす。

「……わたしは……ディアヴロを信じます。どうかわたしを救ってください」



「当然だ。不安など愚かなこと。全て我に任せておくがよい」  
シエラがうなずいた。

「うん、わかった。あたしも……ちよつと恐いけど……信じる！　ディアヴロを信じる！　だから、お願いだよ！　レムを助けてあげて！」  
真剣な表情だった。

彼女たちの信頼と期待を裏切るわけにはいかない。

ディアヴロはエデルガルトへ視線を向けた。

「クレブスクルム復活の儀式とやら、協力してやろう。不満はなかるうな？」

「わかつた。エデルガルト、が……儀式を教える」  
話がまとまった。

エデルガルトが目をすがめる。

殺気を感じ、ディアヴロは身構えた。

しかし、それは自分たちに向けられたものではなかった。もつと後ろだ。  
草を踏む音がした。

よりすのぞ 寄州を覗きこむ人影がある。

男が五人だ。

ひようじんぞく

豹人族やドワーフなどで、いずれも汚れた服を身につけており、剣や斧おので武装している。  
た。

薬草を摘みに来た冒険者——とも思えない。

目つきが淀よどんでいた。

レムが表情を引きつらせる。

「……くっ……野盗のようですね。こんな時に」

「やだっ!？」

シエラが自分の身体を両手でかばった。

まだ彼女たちは服を着ていない。

ディアヴロは舌打ちした。

——そういえば、治安が悪化しているから、クエストの報酬が高騰しているのだった  
な。

こいつらが原因か。

ゲームにも野盗は出現したが、NPCではなくモンスターと同じ扱いだった。

当然、この世界では、街にいる人ひと族たちと明確な差はない。



先頭の豹人族ひょうじんぞくが下卑げびた笑い声をあげる。

「うひゃひゃつ！ 見ろよ！ こいつはラッキーだぜ！ 上玉だ！ 見ろよ、あの乳！ こいつはすげえ！」

視線の先にはレムたちがいた。

二人が両腕で自らの身体をかばい、表情を引きつらせる。

「くっ……あんな連中に」

「うえ、やだ」

野盗どもが寄州よりすに入ってくる。砂利を踏んだ。

「どうする？ 頭かしらを待つか？」

「いやいや、しつかり捕まえとかねえと。逃げられたら頭にどやされちまう。だからだな、男は殺して！ 女はいただくんだよ！」

野盗の一人が、シエラを指さした。

「んお？ オイ、オレ、こいつ見たことあるぞ！ たしかエルフの王女だ！ 街で噂うわさになつてた！」 「うひゃひゃ！ マジかよ、すげえぜ！ 一度、王族にぶちこんでみたかったんだ！」 「豹人族ひょうじんぞくのほうも、黒豹くろひょうだぞ！ めちゃくちゃ高く売れる！」

「んで、もう一人は——」

エデルガルトに視線を移したドワーフが、いぶかしむような顔をした。

「すげえ上玉……だけど……混魔族？　違うのか？　目玉がトカゲみたいになってて……肌に鱗が……浮かんでるような？　え？　なんだ……こいつ？」

他の野盗も気づいた。

後ずさる。

「うお!?　お、おいおいおいおい！　ま、まさか……魔族なんじゃ!?」

「魔族だ！　魔族が出たあああ！」

野盗たちが逃げだす。

相手はシエラのことを知っていた。そして、魔族に気づいた。このまま逃がせば、自分たちが魔族と会っていたことを街で広められてしまう。

ディアヴロは杖を構えた。

あんなものはモンスターと同じだ。そう頭ではわかっているが、躊躇してしまった。

野盗たちが寄州から出てしまう。

下草を踏んで……

このままだと、逃げられる。

ディアヴロは強く杖を握りしめた。

「ぐ……くっ……」

水音がした。



エデルガルトが川底に刺していた槍やりを引き抜く。その馬上槍ばじょうそうに、黒色の光が宿った。

「……《ダークネススラッシュ》！」

叫ぶと同時に、槍よこなを横薙ぎに払う。

漆黒の閃光せんこうが槍の鋒先ほしざきから放たれる。

それは大きな黒色の刃となり、飛んでいった。

ディアヴロは目を見開く。

——その技は、強すぎるんじゃないのか!?

剣でも槍でも使える《武技》だった。SP気力を武器に寄せ、刃と化して放つ。

遠くまで広範囲に攻撃できる。

本来は威力の低い技だが……魔族であるエデルガルトの基本能力値パラメーターを考えると、それが人族ひとぞくにどれほどのダメージを与えるか。

逃げていく野盗を、《ダークネススラッシュ》の巨大な刃が切り裂く。

「ガッ……!?!」

五つのうめき声が重なった。

胴体が、真っ二つになる。

まるで不出来なホラー映画のようだった。

レムが眉をひそめ、シエラが小さく悲鳴をもらした。

ディアヴロは奥歯を嚙む。

——あつさり、殺しやがった。

シエラが、エデルガルトに叫ぶ。

「こ、殺すことないじゃん!？」

「人族ひとぞくに見られるのは、困る。だか、らく、殺した。おまえたちも、魔族と会つてるとこ、見られるのは、まずい、はず？」

「そ、それはそうかもしれないけど……でも！」  
レムが、シエラを制した。

「人族ひとぞくの法でも、野盗に襲われたときは殺しても罪になりません。モンスターと同じです。連中は、そう扱われるだけのことをしているのです。生かしておいても、どこかで弱者を殺し、奪い、なぶものにすりだけです」

声は震えていたが、さすがは熟練の冒険者だ。

「野盗が悪いのは……わかるけど……」

シエラが肩を落とす。

ディアヴロは平静を装っていたが、内心では動揺していた。

——モンスターと同じか。

この世界では、そうなのだろう。いや、ディアヴロのいた世界でだって、人を殺して



金品を奪うような輩は死刑になる可能性が高いし、襲われたときに殺しても正当防衛が認められる。

相手がモンスターだろうと野盗だろうと、自分を守るために敵を殺すのは、生き物として当然のことだった。

ちゆうちよ  
躊躇した自分のほうが、平和な国の平和な生活に慣れきって平和ボケしているのかもしれない。ため息をつく。

「……余計なことをしおって」

エデルガルトが肩をすくめた。

「ここは、落ち着かない？　だか、ら……三日後……満月の夜、ほしふり《星降の塔》で待つ。儀式は、そこで」

ディアヴロはうなずいた。

たしかに、儀式の最中に邪魔が入るのは困る。

あと、大火力の敵と戦うときは、遮蔽物のある場所のほうが望ましかった。こんな開けた場所は可能なら避けたいところだ。

エデルガルトは川の中へと歩いていく。どうやら、彼女は水中も苦手とはしていないようだった。

魔族の姿がなくなると、レムたちは張り詰めていた息を吐く。

急いで衣服を身につけはじめた。

ディアヴロは草原に転がる野盗たちの死体に視線を送り——こういう世界だ。殺さなければ殺されるのだ、と自分に言い聞かせるのだった。

+

三日後——

ディアヴロたちは《三角耳亭》で食事を取っていた。

ファルトラ市の西通りにある店で、ひょうじんぞく豹人族の男が店主をやっている。面白いことに、店内に猫がいる食堂だった。

いつもの《安心亭》の食事も悪くないが、たまには別の味も欲しくなるものだ。

この店は分厚い肉と、香りのいいチーズが自慢で、庶民の食事としてぜいたく贅沢なほうだった。

昼時とあって、店は混んでいる。

店主や店員がひょうじんぞく豹人族のせい、客もヒューマン亜人が多かった。人間の使う高級店は北地区に多い。

最初は、角の生えたディアヴロの外見や、レムとシェラに《隷従の首輪》がついてい



るせいで周りから好奇の視線を向けられた。

何度か来て慣れたせいか、今はいちいち騒がれるようなことはない。

レムが隣の席の会話を気にする。

ディアヴロも注意を向けた。

ドワーフの男女が話している。

「なあ、聖騎士が来てるらしいぞ」

「ええー、なにしに？」

「魔王復活の噂うわさでもあるんじゃないか？　ちよつと前に魔族も出たしな。魔王崇拝者がいるって情報があつたのかも」

「こわいねえ」

「せいぜい俺たちも気をつけようぜ」

「なんで？　魔王崇拝なんかしてないよ？」

「いや、その聖騎士はサドラーってヤツらしいんだが……本当にヤバイらしくてな。理由もなく捕まえては拷問して、魔王崇拝者だつて言わせて処刑するらしい」

「ええー、なんで!？」

「さてな？　亜人はとくに狙われやすいらしい。しばらく街から出るのも手かもしれね

えぞ」

「でも、仕事があるしねえ？」

「……ここから南東に四日ほどのところにドワーフの集落がある。俺の故郷で両親がいる。お前さえよければ……その……」

「え？　そ、それって……ほんとに？」

チツ、爆発しろ。

ディアヴロは舌打ちしながら考える。

——とんでもなく俺と相性が悪そうなヤツが来てるようだな。

レムが不安そうにこちらを見た。

「……しばらくは、街を出歩かないほうがいいかもしれないね」

考えることは同じか。

シエラもうなずく。

「そうだね。ディアヴロは魔王なんだし、見つかったら危ないかも！」

たしかに彼女たちの言うとおりだ。しかし、怖いから外出は控えよう、なんて言うのは魔王らしくない。

フンツ、と胸を張る。



「下らんな。聖騎士だかなんだか知らないが……俺に刃向かうなら粉碎するのみだ」

——しかし、用事もないのに出かける必要はないがな！ と内心で付け足した。外出は控えたほうがいいだろう。

家にいるのは得意だ。通販があれば、どれだけでもひきこもっていられる自信があった。

レムが肉にフォークを刺しながら言う。

「ディアヴロ、今夜は例の件があります……騒動は控えてください」

「わかっている」

もちろん、揉め事もめごとなんてお断りだった。

——エデルガルトとの約束は今夜だ。

夜というからには、おそらく日没後だから、十九時以降だろう。まだ六時間以上もあった。

それまでは部屋にいたほうが……

店の中にどよめきが広がる。

さほど大きくない扉から、《三角耳亭》ヒューマンに人間の女が入ってくる。見覚えのある人物だった。

背の高い女性だ。

体つきは全体的に細く、手足がすらりと長い。

金髪を腰まで伸ばしている。

メガネをかけていることもあって、理知的な印象の顔立ちだった。

動きやすそうな肩の出た軽装鎧よろいの上から、刺繡ししゅうのほどこされたマントを羽織っている。

国家騎士アリシア・クリステラだった。

彼女は店の中を見渡すと、ディアヴロたちを見つけるなり、こちらに近づいてきた。シエラが気づいて片手を挙げる。

「アリシアさん！」

「お久しぶりです、皆様。ただいま戻りました」  
軽く礼をした。

レムが嬉しうれそうに笑みをこぼす。

「アリシア……無事でなによりです。道中、問題は起きませんでしたか？」

「ええ、まったく。そちらは、いかがですか？」

「……はい」

レムは少し言いよどんだが、彼女はいつも少し考えてから話す。だから、わずかな間が気になることはなかった。



おそらく、今夜クレブスクルムを復活させる約束が、脳裏を過つたのだろう。当然、こんな周りに人のいる場所で話すことではないが。

シエラが、たんたん、とテーブルを叩く。たた

ちょうど席は一つ空いていた。

「ね、ね、座りなよ。お腹、減ってない？ ここのチーズ、美味しいよ！」

「……なにを言っているのですか、シエラ？ 《三角耳亭》といえは肉です」

相変わらずのレムたちに苦笑しつつ、アリシアが尋ねてくる。

「ディアヴロ様、ご同席させていただいて、よろしいでしょうか？」

「好きにしろ。貴様を拒む理由はない」

彼女はシエラを助けに行くとき、立場も命も顧みず剣を抜いてくれた。恩を感じている。

アリシアは微笑んで、勧められた椅子に腰掛けた。ディアヴロの向かい側だ。

「ご報告させていただきます」

「うむ」

そんなやり取りを見て、周りの客たちが、ヒソヒソと言葉を交わす。

「おい、あれって国家騎士だぞ」「てっきり、怪しい混魔族を捕まえに来たのかと思っ

たけど……」「ディアヴロ様ただものだってよ。やっぱり、アイツは只者じゃねえな」「ど

んな関係なんだ？ おっかねえな」

なにやら周囲からの偏見が強くなった気がする。

——魔王は陰口にビビツたりしない！

腕組みして、周りの内緒話など聞こえていない振りをした。

アリシアが報告する。

「国王陛下には、グリーンウッド王国については予断を許さないものの解決済み。そして、ディアヴロ様のことは一介の冒険者である——と納得していただきました。不必要な注目を浴びることはないでしょう。軍隊の出動もありません」

——感謝！ 圧倒的、感謝！

しかし、軍隊を遠ざけてもらって感謝する魔王というのも情けない。

かといって、苦勞してくれたアリシアに、「余計なことを」なんて言うのも、どうだろうか。

黙っていると、レムが身を乗り出した。

「ありがとうございます、アリシア。この時期に軍隊が来ていたら、とても大変なことになっていました」

シエラがうなずく。

「ほんとだねー。なんてったって、今夜——痛ッ!？」



余計なことを言いそうになった彼女の足を、レムがテーブルの下で蹴飛ばした。アリシアが付け足す。

「それと、ガルフォード卿<sup>きょう</sup>はディアヴロ様について、陛下に報告しておりませんでした。おそらく存在を隠しておき、他国や魔族との戦いで利用するつもりなのでしょう」  
「なるほどな」

だから、あれ以来、なにも干渉してこないのか。

「さすがはディアヴロ様です。存在するだけで危険を撥<sup>は</sup>ね除<sup>の</sup>けてしまうとは……国家守護の使命を帯びた者として、その在り方には憧れを持ちます」

「ふんっ……俺は国家守護など考えておらんがな」  
アリシアが声をひそめる。

「それと、もう一つだけ、ディアヴロ様のお耳に入れておきたいことが」

「なんだ？」

「……この街に、聖騎士サドラーという男が来ているのです」

「そうらしいな」

先ほど噂<sup>うわさ</sup>になっていた人物だった。

アリシアがうなずく。

「もうご存知とは、さすがです。聖騎士サドラーは非常に危険です。充分に気をつけて

ください」

「さつきレムたちにも言ったが……」

「ディアヴロ様の實力は充分に承知しておりますが、聖騎士は騎士としての實力だけでなく、奇跡の御業みわざも身につけておりますので」

「ふんっ、いかなる力を持っていようと、俺が負けることはない」

ゲームでの「聖騎士」を思い出してみる。

あまりストーリーには関わってこなかったが、教会に仕えている者が、そういう肩書きだったか。

戦闘になるようなイベントはなかったから、パラメーター能力値は不明だった。

——ゲームでは無害な情報提供役だったんだがな。

サドラーという名にも記憶はなかった。

アリシアが心配そうに言う。

「ディアヴロ様は心配なくても、レム様やシェラ様のこともあります。警戒してしすぎるということはありません」

たしかに、ディアヴロと対立すれば、二人が狙われる可能性は高まるだろう。

「それほど危険なヤツなのか？」

「はい……残念ながら……聖騎士サドラーに『魔王崇拝者の疑いあり』と睨まれると、



かなり酷い拷問を受けます。そして、苦痛は魔王崇拝者だと認めるまで続くのです」

「なんだ、それは？」

ディアヴロは眉をひそめた。

「そうして、世界は教会により護られている……という実績作りですね。それと、教会には逆らえないという雰囲気にもなります」

「馬鹿な……罪もない者を殺して、だと？」

「教会に批判的な者を『魔王崇拝者』だとして減らしていけば、批判の声は小さくなりますから」

「理解できんな。野盗やモンスターと何が違うのだ？　なぜ放置している？」

「この国は、教会がなくては成立しないのも事実です」

ディアヴロはゲームではない知識を思い出す。

「そういえば……中世じゃ教会が社会保障の大半を担ってるんだったな。病院や学校や銀行の代わりになってるし、福祉も……」

つぶやいた言葉に、アリシアだけでなく、レムたちも首をかしげる。

この世界には存在しないのだから『銀行』や『福祉』なんて言葉があるはずもない。

彼女たちの知らない概念は、うまく伝わらないようだ。ディアヴロがこの世界で会話できている仕組みは、まだ調べていなかった。

咳払い<sup>せきばら</sup>して誤魔化<sup>ごまか</sup>す。

「オホンッ！ とにかく、教会は国民の生活において欠かせない存在で、それ故に大きな支持を受け、相応に大きな権力を握っている。だから横暴も看過されている、というわけか？」

「はい。民衆はサドラーのような聖騎士を恐れつつも、魔王崇拝者を減らしていると信じて、賞賛しているのです」

「実際のところは、どうなのだ？」

「その実力は間違いありませんが、わたくしの個人的な見解からすると、魔王崇拝者など街や村にいるものではないかと……」

「だろうな」

教会に関わる全ての人が、そういう利己的な考えを持っているわけではないだろう。

しかし、聖騎士というのは教会の利益のために人<sup>ひと</sup>族を殺している。

シエラが憤慨する。

「ひどいよ！ 人間<sup>ヒューマン</sup>の国はおかしいよ！」

「……彼らには彼らの言い分があるのでしようが、関わりたくはないですね」

聖騎士にとっては、教会に批判的な者こそが敵であり、モンスターに見えるのだから。



だから、外聞の悪くならない理由をこじつけて殺す。

自衛のための行動だと思えば、理解はできる。

理解はできるが、そんなヤツの利己的な行動に、付き合っ  
てやる理由はなかった。

ディアヴロは魔王ロールプレイをしてるから、粉砕するのみ、  
などと言ったが……

——ああ、どうか絡んできませんように！

アリシアが頭をさげる。

「みなさまには、できるだけ宿屋にいてもらいたいです。わたくしのほうで手を打っ  
て早めに王都へ帰ってもらえるよう努力しますので」

「フンツ……貴様の言いたいことはわかった。しかし、俺は俺のしたいようにする！」

——宿屋にひきこもるのが、俺のしたいことだ！ クワツと内心で宣言した。

やや不安げな表情をしつつも、アリシアはうなずいた。

「お聞きいただき、ありがとうございます」

シェラが料理を勧める。

「アリシアさん、なんか食べるよね？ チーズ？ チーズ？」

「肉を追加しましょう」

レムが豹<sup>ひょうじんぞく</sup>人族の店員を呼ぶ。

アリシアが困ったような笑みを浮かべた。

「わたくしはサドラーのお目付役なのですが……少しくらいならいいでしょうか？」  
「……大変なですね」

「問題を起こされても困りますし」

ざわっ、と店内の雰囲気が変わった。

アリシアが振り返り、ディアヴロも《三角耳亭》の入口を見る。

よろい  
鎧姿の男が柔和な笑みを浮かべていた。

何本も剣を提げている。柄頭つかがしらに繋いだ鎖つなが、耳障りな金属音をたてていた。

ここは旧魔王領も近いので、板金鎧プレートメイルは珍しくないが……

その男が、こちらを見て微笑む。

アリシアが慌てた様子で席を立った。その表情が緊迫感を放っている。

ディアヴロは気づいた。こいつが、サドラーか、と。

——やっぱり、外なんか出なけりゃよかった！

ひきこもり思考を爆発させつつ、ディアヴロも立ちあがる。

レムたちも腰を上げた。

サドラーの後ろには、似たような格好の人間ヒューマンの騎士が四人ほど付き従っていた。持つ



ている剣は普通に一本だけで、警戒するような視線を周囲に向けている。

聖騎士の護衛か。従騎士というやつか。

+

サドラーたちがテーブルに近づいてくる。

「お疲れ様です、クリステラ殿。用事があると言っていました。こちらの方々と会っていたのですね？」

アリシアが笑みを浮かべた。先ほどの緊迫した雰囲気は消えている。

「はい、前に来たときにお世話になった冒険者の方々なので、ご挨拶しておこうと思いまして」

「なるほど。僕たち聖騎士は従者を連れています。国家騎士の方々は現地で冒険者に協力していただくことが多いそうですね」

「一人で解決できれば、それが一番なのですけれども」

お互いに人の善さそうな笑みを浮かべて会話しているので、事情を知らない者が見たら、さぞ仲がいいと思えるだろう。

実際には、空気の軋みきしが聞こえてきそうなほど、緊張が高まっていた。

サドラーが、ディアヴロのほうに視線を向けてくる。

「はじめまして、王都大教会所属の聖騎士サドラーと申します」

「……」

黙っているわけにはいかない。

せめて名乗るくらいはしておかないと。

正直、ディアヴロは緊張していた。

挑発してはいけない。でも、へりくだっては魔王ロールプレイとして問題がある。魔王らしくしつつ余計なことは言わず名乗らなくては。いつもどおりでいい。いつもどおりでいいはず。

「我はディアヴロ！ 異世界から来た魔王である！」

——あつ、今、魔王って言っちゃったね？

汗が噴き出した。

アリシアが驚愕きょうがくに目を見開く。こんなに表情を崩した彼女を見るのは初めてかもしれない。

レムが額に手を当てて、シエラが首をかしげた。



サドラーが笑い声をあげる。

「あははは！ さすが、田舎の冒険者は面白い人が多い。なるほど、魔王ですか。これは、まいった」

アリシアが表情を取り繕い、いつもの困ったような笑みを浮かべる。

「ええ、ディアヴロ様は本当に冗談がお好きで」

サドラーの顔から笑みが消えていた。

獲物に喰<sup>く</sup>らいつく獣の目だ。

「――冗談であろうと、魔王を名乗るような胡<sup>うろ</sup>乱な者と親しくしているとは……これは看過できぬ問題でありますよ、クリステラ殿？」

「ッ!？」

まさか、アリシアのほうへ行くとは。

今さらディアヴロが取り消すわけにもいかない。

けれども、どう言ったらいいのか……

アリシアが釈明に窮する。

サドラーは瀕<sup>ひん</sup>死の獲物をいたぶるかのようだった。

「陛下の信頼がいかにも厚くとも、このような者たちと密談をしているようでは、むしろ信を裏切っていると言えるのではありませんかな？」

「協力いただいた冒険者の方々です。わたくしは何ら恥ずべきことをしておりません」

「さて……本当に隠し事がないのでしょうか？」

「わたくしを拷問にかけますか。この場でなんと言いがかりをつけようと、陛下がどうお考えになるでしょう？」

「ほほう、陛下が教会と対立してまで国家騎士一人をお守りになる、と」

「大主神官が陛下をだいいしゅしんかん蔑ろないがしにしてまで聖騎士一人の横暴をお許しになるのでしょうか？」

さすがのアリシアも厳しい表情になっていた。

女だてらに国家騎士になった者だ。言いがかりをつけられて、弱腰になっているばかりではない。

二人が睨み合にらった。

手を出したら火傷やけどしそうな、火花の飛び散る睨み合いだ。

そこに、第三者が割りこんだ。

レムが前に出る。

「……おかしい話です。アリシア・クリステラ殿がわたしたちと会ったから、なんだと言うのですか？ わたしは冒険者として実績を積んでおりますし、こちらにいるディアヴロだって……ちよつと変なことも言いますが、魔族と戦って街を守りました。褒められこそすれ、会って話しただけで咎とがめられるなど妙なことです」



サドラーが殺気だった目をする。

「奴隷が……僕に、話しかけるな！」

今にも斬りかかってきそうな勢いだった。

レムが怯<sup>ひる</sup>んで、首に手をやる。

彼女には《隷従の首輪》が嵌<sup>は</sup>まっていた。知らない者からしたら奴隷に見えるだろう。

「……くっ……わたしは奴隷などではありません。アリシア殿は悪いことをしていない。むしろ困っている人を助けるために命を懸けてくれるような素晴らしい人物です。

わたしは共に戦った者として、彼女が疑われることが見過ごせません」

「黙れ、と言いましたよ、奴隷？」

「ですから、わたしは奴隷などではありません！」

「神の使徒である僕に説教をするのですか、奴隷ごときが……」

サドラーは批判されたという悪感情だけを膨らませていき、レムの言葉に耳を傾けることはなかった。

レムは真正面から受け止める。

「……あなたが誰であろうと、理の通らない嫌疑をかけるならば、否定します」

今夜の約束や、自分の中にある封印のことを考えれば——レムは目立つべきではなか

った。むしろ、この街で最もサドラーから身を隠さねばならないのは彼女のはずだ。しかし、アリシアが疑われている状況を、レムは見過ごせなかった。彼女は常に困難に立ち向かっていく。

クレブスクルムのことだって、抗<sup>あらが</sup>わずに結婚して子供を生めば、封印はそちらに移る。無難な人生を歩めたはずだ。

しかし、レムは自分で終わらせるべく冒険者になり、強い力を求めた。

今も同じ。サドラーの目はアリシアに向いていたのに、レムは自ら前に出た。

——勇敢だな。

自らの危険を顧みないレムのことも、大切に想われるだけのことを成したアリシアのことも、それらを祈るように心配しているシェラも……それぞれ、みんな大切だとディアヴロは思う。

言い争いは苦手なので、今は出て行かない。そのほうが穏便に収まる可能性が高いだろう。しかし、相手が剣を抜いたなら、絶対に守る——そう考えて、ディアヴロは警戒していた。

サドラーがレムを睨<sup>にら</sup>みつける。

「僕に……説教するとは……この神の使徒に……なんという愚かな」

「あなたが間違っているから、そう言っているのです。正しいと思うのなら、勝手な決



めつけではなく、みんなが納得できる理由を挙げなさい」

「神を侮辱するか、奴隷の亜人めが！ 天罰を受けるがいいッ!!」

サドラーが顔を醜悪に歪ゆがませた。

魔力を感じた。

——なんだ!?

レムが自身の首を押さえる。金属の首輪がガシヤツと鳴った。

「ケホッ！ ケホッ！」

苦しげに咳せきこんだ。

シエラが慌ててレムへと駆け寄り、肩を支える。

「レム!? レム!?’

「うっ……ぐっ……ケホッ！ ううう……!?’

「こ、これって……《麻痺》スタンしてるの!?’

ディアヴロは驚愕きょうがくした。

今、サドラーは睨にらんだだけだった。

いや、罵声は浴びせたが、あれは決して魔術の詠唱などではありえない。

魔導具や特殊な武器を使った様子もなかった。少なくとも、ディアヴロから見ても、特別な行動を取った様子はなかった。

——《無詠唱》か!?

能力値を魔術師系へと伸ばしてレベル60で覚えられる特殊技能<sup>スキル</sup>だった。

《麻痺》を引き起こすような状態異常系<sup>バッドステータス</sup>の魔術も、元素魔術などと同じ《詠唱魔術》に分類される。これは発動のために「魔術の名称を発声する」ことが必要だ。

しかし、どうやら《無詠唱》を覚えていれば、発声しなくても魔術が使えるらしい。  
ゲームでは詠唱時間<sup>キャストタイム</sup>——操作してから、魔術の効果が見れるまでの時間を減らすだけの特殊技能<sup>スキル</sup>だった。

設定から考えれば推測可能だったが、この世界では、こんなふうに表現されるのか。  
まるで、本当に神の天罰によってレムが苦しみだしたかのようにだった。

——レベル60以上か。

しかも騎士としての剣技も備えているらしい。だとすると、総合的なレベルは、もつと高い。

サドラーの実力は、そこらの連中とは桁<sup>けた</sup>が違っていた。

この世界の冒険者たちは「生きるための強さ」を身につけて安全を優先して暮らしている。軍人なども、大半は同じだろう。命を大切にしなければ早々に死んでいる。そして、この世界では死んだらそれまで。拠点からのリスポーンも、死者蘇生<sup>そせい</sup>の魔術も存在していないのだった。



しかし、サドラーは異質だ。

ガルフォードと同じく勝利するための強さを身に付けている。間違いなく強敵だった。できるなら戦いを回避したい。

充分に危険を理解して――

ディアヴロは嗤<sup>わら</sup>った。

「下らん真似をしてくれたな、雑魚<sup>ざこ</sup>が！ 天罰だと？ たんなる魔術ではないか！」

「なっ!？」

サドラーが血走った目を見開く。

「神ならざる力を神のものと偽るとは、神の使徒を僭<sup>せん</sup>称<sup>しょう</sup>するに等しい。つまり、貴様の信仰も疑わしいということだ。周りに嫌疑をかける前に、自らの潔白を証明するがい」

「ぼ、僕の潔白を疑うだって!? 聖騎士に向かつて!？」

「貴様のような怪しげな輩<sup>やから</sup>に地位を与える愚かな教会の身分なんぞ、なんの証にもならんな！」

「ぐっ、くっ………混魔族<sup>デイーマン</sup>ごときが、聖騎士を侮辱するのか!？」

「聖騎士ごときが我の所有物に、ふざけた魔術を使ったから事実を言ったまでだ。貴様など侮辱する価値もない」

嘲笑した。

やってしまってから、ようやくディアヴロは自分の感情に気づく。

——なるほど、俺は怒っていたのか。

伝え聞いた聖騎士の横暴と、それによる周りの萎縮。アリシアへの言いがかりと、勇気を持って抗議したレムへの罵倒と、騙し討ちだまうのような魔術の行使……

それらを前にして、ディアヴロは怒った。

相手の立場や実力を考えれば、対立しないのが賢いのだろう。

しかし、そんな打算を蹴散らすほどの強い感情に、思わず言葉が出ていたのだった。

一気に緊迫が高まり、周りにいる客たちが店の壁際に逃げだす。

店員たちも、そこらにいた猫たちまで、カウンターの奥へと引っこんだ。

サドラーが肩を震わせる。

「僕の信仰心を……神を疑うとは……貴方は神を怒らせました」

「フンッ、貴様ごときに怒りを代弁されるとは、神とやらも大したことはない」

「貴方に神の天罰を与える。神の救済を知って悔いるがいいでしょう。それから、他の者たちは教会に連れて帰り、じつくりと徹底的に神の救いを教えることとします」



レムは《麻痺》<sup>スタン</sup>が続いており、まだ苦しそうだった。

シエラが寄り添って介抱している。

アリシアは二人を守るかのように立ち、右手は剣を握<sup>つか</sup>んでいた。

彼女たちに手を出させるわけにはいかない。

いくらか冷静になったディアヴロは、サドラーの次の行動を誘導する。

「フンッ……神の天罰だと？　魔術なら魔術と言ったらどうだ？　あんな下らぬもの

は、我には通用せん」

「神の力を信じぬ愚か者めが！　石になって悔いるがいい！」

サドラーが睨<sup>にら</sup>みつけてくる。

短気に見えるのに、まだ攻撃してこなかった。

そういえば、特殊技能<sup>スキル</sup>は一回使うと一定時間は使用不能となる。この世界だと、感覚

的には、その行動に集中できなくなる感じだった。例えば、針穴に糸を通すような集中力が必要なことをした直後は、すぐに同じ作業ができない——それに似ていた。

サドラーは《無詠唱》のために休みを入れていたのかもしれない。

なんにしても、関係なかった。

相手が使ったのは、間違いなく魔術だ。そのはずなのだから。

サドラーから放たれた怪しげな光が、ディアヴロに向かってきて——

《魔王の指輪》の能力が発動した。

あらゆる魔術が反射される。

サドラーが睨みつけた形相のまま固まった。

パキパキパキ……と灰色になる。

石になった。

背後で見えていた従騎士たちが、動揺して互いに顔を見合わせる。彼らはサドラーの勝利を疑っていなかったのだろう。たしかに、それくらいヤツのレベルは高かった。

ディアヴロは鼻で笑う。

「フンツ……《石化》の魔術を使ってきたのか。我には効かぬと教えてやったのにな」  
内心では、よかったー!! と安堵あんどしていた。

本当に「神の天罰」なんて不思議なもので攻撃されて、  
《暗雲あんうんの帷とばり》バッドステータスの状態異常防止も効かなかったら、石にされていた。

——わざわざ攻撃を受けてやる必要はなかったかな？ でも、こっちが魔術で攻撃していたら死んじゃったかもしれないし、この店を壊したくなかったからなあ。

手加減用の《試製大戦鎌しせいおおいくさがま》は取り出す暇がなかった。

何が起きたのかわからず、客や店員たちは、まだビクビクしている。

猫たちだけが、ヒョコツと隠れていた場所から顔を出した。



アリシアが、サドラーの様子を確かめて息を呑む<sup>の</sup>。

「これは!? 完全に石になっています」

「この《石化》は、おそらく《セメントロック》あたりだ。土属性の状態異常魔術<sup>バッドステータス</sup>だな」

「すさまじいです……これが魔術反射なのですね。実際に目にとすると、改めて驚愕<sup>きょうがく</sup>します。ここまで圧倒的な能力だなんて」

「我の力について、貴様は聖騎士に教えていなかったようだな？」

「……サドラーが罪なき人に嫌疑をかけるような慮外者<sup>りよがいもの</sup>でなければ、教えていたかもしれません」

「敵対すると予想していたわけか」

そして、ディアヴロの不利になる情報は与えていなかった。アリシアは国家騎士という立場だが信用できる。そう感じた。

「この《石化》は解けないのでしょうか？」

「どのていど持続するかは、術者のレベル次第だが……いずれは魔力が霧散して解ける。それまでに、その身を碎かれなければだが、な」

「碎いたら死んでしまうのですか？」

「腕や脚だけなら助かるのではないか？ 頭なら無理だろう」

自分で言っておいて、ディアヴロは背筋がゾワツとなった。相手が何者であれ人の死を想像するのは嫌な気分になるものだ。

ケホケホ、とレムが咳払いせきばらしたあと、深呼吸した。

「ふう……驚きました。《無詠唱》とは……」

「無事か、レムよ？」

「はい。ありがとうございます、ディアヴロ……また助けられましたね」

「フンツ……」

素直な笑みを向けられて、ちよつと照れた。

ディアヴロはサドラーに手で追い払う仕草をする。

「その勝手に石になった愚か者を外に出すがいい。まだ食事中だ。店内に醜い石像があるのは味が悪くなる」

アリシアが従騎士たちに命じる。

「わたくしを疑い、なんの罪もない冒険者たちに危害を加えたこと、陛下に報告させていただきます。しかし、神に仕える聖騎士の命を奪うようなことは誰も望まないでしょう。運んで領主の館に戻りなさい」

もともとサドラーについてきただけの者たちだ。主がこんな有様では、アリシアの命令に逆らうはずもなかった。



いそいそと石化した聖騎士を持ち上げ、逃げるように店の外へと運んでいく。

——落とすなよ？ 死んじやうから。

店内にいた客たちが、ようやく状況を理解した。やんやと野次を飛ばす。

「ざまーみろ、聖騎士！ 亜人をバカにしやがって！」 「俺たちにはディアヴロ様がついてるんだぞ！」 「また来やがったら今度こそ容赦しねえからな！」 「ファルトラから出て行け！」

さつき故郷がどうこう言っていたドワーフの男女のうち、女のほうがちちらを見て瞳を輝かせていた。

「ス・テ・キ！ やっぱり、男は強くないと！」

「えー、そんな!? 金のある男がいいって言ってたじやないかあ……」  
ドワーフの男が肩を落としていた。

爆発しろ——と、さつきは思ったが、ああなると少し不憫<sup>ふびん</sup>だった。

なんにしても、面倒が片付いてよかった。

席に着いたレムが、先ほどの《麻痺<sup>スタン</sup>》など嘘<sup>うそ</sup>のように、食事を再開する。  
まだシェラは心配そうだ。

「大丈夫なの？」





「……魔術による状態異常ですから、残るものではありません。でも、その肉をくれれば、もっと元気になります」

「いいけど、そっちのチーズをちょうだいね？」

ディアヴロも食事を再開しようとする。

アリシアが耳打ちしてきた。

「……本当にサドラーを逃がしてしまつてよかったのですか？」

彼女は殺したほうがよかった、と考えているのか。

たしかに、あの性格からして殺したほうが後々の面倒はなかったかもしれない。

しかし、〃危険かもしれない〃というだけで人を殺すのは抵抗がある。自分は平和ボケなのかもしれないが……

ディアヴロは魔王らしく鷹揚おうようにうなずいた。

「あの程度の雑魚ざこ、生きようと死のうと興味はない。また挑んでくるなら、そのときは容赦せぬがな」

「……わかりました。たしかに、ディアヴロ様の敵ではありませんでしたね。余計な心配をいたしました」

アリシアが優しげな笑みをうかべてうなずいた。

## 第二章 封印を解いてみる

昼食後――

ディアヴロたちは宿屋に戻ってきた。

レムがつぶやく。

「……《星降の塔》ほしふりに行くなら、そろそろ出る必要がありますね」

「食事に邪魔が入って時間がかかってしまったからな」

「あはは……あの変な人のせいで、大変だったよね」

ディアヴロはうなずき、シェラが世界には何一つ心配がないかのような笑い声をあげた。

レムがため息をつく。

「……聖騎士に睨にらまれたことを『食事の邪魔』などと評することができる者は、そうそういないでしょうね」

「まあ、あんなヤツのことはどうでもいい。それよりも――」

ディアヴロは宿屋のドアに目を向ける。

隣の部屋にはアリシアがいた。

《三角耳亭》から一緒にいつてきているのだが……



おそらく、黙って出かけるのは不可能だろう。彼女は勘が鋭いし、宿屋を出るときには彼女の部屋の前を通る。

レムは迷っている様子だった。

「……打ち明けるべきなのかもしれません」

「そうだね。アリシアさんは、いい人だから、わかってくれるよ」

シエラにかかると、たいていの人は善良だった。もちろん、ディアヴロとてアリシアは信用できると考えている。もう仲間と言ってもいいだろう。

しかし、だからこそ。

レムは悩んでいる。

「……アリシアは国家騎士です……いくらなんでも、魔王復活を看過するわけにはいかないでしょう。困らせるよりは黙っているほうがいいのかもしれません」

以前、少し話して気が合ったのか、レムとアリシアは仲良くなったようだ。

立場を考えたら隠しておくほうがお互いのため。

しかし、打ち明けたい。仲間だと考えているからだ。

そういった微妙な人間関係は、はつきり言って全くわからなかった。どうするのが正解なのか。

どう言えば、仲が悪くならないのか。

赤の他人ならば、むしろ簡単だ。親しい相手だからこそ難しい。

自分には絶対に無理だと思うから、ディアヴロは黙っていた。

レムが尋ねてくる。

「あなたは、どうしたらいいと思いますか？」

——対人問題を俺に訊<sup>き</sup>くなんて、亀に飛び方を訊くようなもんだぞ？

しかし、わからない、などと答えるのは情けない。

ディアヴロは「それっぽいこと」を言ってみる。

「貴様は悩んでいる。それが答えだ」

自分で言ってから「はあ？」と思った。適当に答えるにしても程がある。

ところが、レムが納得した様子でうなずいた。

「……なるほど。たしかに、話すべき相手でなければ、わたしは悩まなかったでしょ。

信じられる仲間だと思ったからこそ悩んでいます。だとすれば、その悩みまで含め

て信じられる仲間に相談すべき……そうおっしゃるのですね？」

「う、うむ」

レムが晴れ晴れとした顔になる。

「……さすがはディアヴロです。強いだけでなく、心の問題にまで聡<sup>さと</sup>いとは……あなた

から見たら、きっとわたしなど自明のことで悩む小さな存在なのでしょうね」



ちよつと申し訳ない気分になった。

なんとなく賢いっぽいことを言ってみただけで、答えを出したのはレム自身だ。シエラまで感心したように瞳を輝かせていた。

「やっぱり、ディアヴロはすごいね！ そのとおりだよ、アリシアは仲間なんだから、話したらわかってくれるよ！」

「と、当然だな」

「……はい。彼女には迷惑をかけるかもしれませんが」  
そして、アリシアを部屋に呼んだ。

意外なほどあっさり、アリシアは受け入れてくれた。

レムが長く秘密に苦しんでいたことに同情し、涙を流し、全力での協力を約束する。その親身な態度にレムが泣きだし、シエラももらい泣きをはじめた。

問題はない。やはり、アリシアに打ち明けてよかった。

そのはずなのだが……

少女たち三人が涙を流して互いを思いやる姿を、ディアヴロは壁際で腕組みして眺める。

なんだか、薄っぺらい。

似ていると思った。

まるで——学年が変わる前のクラスメイトたちを見ているかのようだ。

泣いて、語らって、生涯の友情を誓い会う。けれど新しい学年になると、一緒にいるところは見かけなくなる。

その内面はわからない。

レムの悩みは人生を懸けるほどのものだし、シエラだって魔王復活に立ち会う気なら、命懸けなのは理解しているだろう。しているといいな。

そして、アリシアは立場的にも葛藤があるはずだった。女性が国家騎士という役職に就くまでには、尋常ではない苦労があったはずだ。

彼女たちの涙は、クラスメイトたちの「お別れごっこ」とは違う。そのはずなのに、なにか違和感があった。

ディアヴロは内心でため息をつく。

——やれやれ、俺がコミュ障で友達いなくてLINEグループ入ってないから、歪ゆがんだ見方しかできないのかねえ？



《星降の塔》  
——

時刻は夜八時頃だろうか。

この世界では、持ち運べるような小さな時計は超がつく高級品だった。懐中時計なんて同じ重さの金より高い。

壁掛け時計が貴族の屋敷や教会にあるだけ。

ほとんどの市民は教会の鐘を時報にして生活していた。朝五時から夜九時まで一時間ごとに鐘が鳴る。

五時なら五回、六時なら六回……午後一時には一回に戻った。最初は不便かと思ったが、電車もバスもTVもなく、通勤通学も遅刻もないのだからなんの問題もない。

正確な時計だとか、交通機関だとか、コンピューターだとか、インターネットだとか、便利な発明が、人を生きにくくしているのかもしれない。

ふと、そんなことを思った。

空に満月が輝いている。

月に向けて伸びる古びた石造りの塔は八角形で、わずかに下のほうが太くなっていた。

召喚されたときに見たきりで、ここに来るのは二回目だ。夜に見ると、ずいぶん雰囲気が違うものだった。

ディアヴロ、レム、シエラ、アリシアは足を止めて周りを見渡す。

「約束どおりのはずだがな……?」

「……あの魔族は、どこでしょうか?」

「お、襲われたりしないよね?」

「伺ったお話からすれば大丈夫だと思いますが……慎重に参りましょう」

アリシアが腰の剣に手を伸ばした。

塔の入口から、小さな人影が月明かりの下に出てくる。

「やつと、来た?」

エデルガルトだ。右手には馬<sup>ば</sup>上<sup>じょう</sup>槍<sup>そう</sup>を持っていた。

ヒッ!? とシエラが、ディアヴロの後ろに隠れる。そんなに恐いなら、宿で待っていてもよかったのだが……

レムも緊張している様子だった。

さすがは国家騎士か、アリシアは堂々としたものだ。

褐色の肌に銀色の髪魔族が、無表情にディアヴロたちを一瞥<sup>いちべつ</sup>する。

「もう、儀式の準備は、できてる」



——ん？ アリシアのことは訊きかないのか。

国家騎士を伴って来たことについて、なにかあるかと心配していたが、エデルガルトは気にした様子がなかった。

あれだけ強いと、国家騎士の一人くらいどうでもいいのか。

わざわざ話題にして面倒を増やす必要はないので、ディアヴロは黙っておいた。今は儀式に集中するべきだろう。

ディアヴロは内心の緊張を押し殺して、鷹揚おうようにうなづく。

「ご苦労だった。あとは俺とレムが儀式を行うだけ、ということだな？」

「そう。じゃ、あゝ……行く？」

いつもながら、話し方が独特すぎてなにを考えているのか、わかりにくかった。魔族にとって魔王復活は悲願のはず。

少なくとも前に魔王が倒れてから三〇年は、新たな魔王を求めてきたはずだ。それだけの大事に臨むにしては、飄々ひょうひょうとしていた。

エデルガルトが左右へと視線を巡らせる。ついでに上も見た。

「急いだほうが、いい」

うながされて、ディアヴロたちは《星降ほしふりの塔》へと入る。  
暗い。

ゲームだったら、ディスプレイの明度をめいっばい上げているところだ。

小さな窓から月明かりが差しこんでいる。満月だけあって、そこだけが明るかった。

エデルガルトが先頭で、その次にディアヴロ、レム、シエラ、アリシアと続いている。階段を屋上へと向かいながら、レムが問いかけた。

「……周りを警戒していたようですが、なにかあるのですか？」

「バアル派の連中は、儀式とか、好きじゃない。魔王様の器、を壊して……すぐ復活させるのを望んでる」

「うっ……」

レムが怯むひるのも当然だろう。つまり、今すぐレムを殺したい〃と考えている魔族がいる、という話なのだから。

ふむ、とディアヴロは顎に手を当てる。

バアルという名前は知っていた。ゲームでも登場したことがある。熊のような外見で、なかなか強力な相手だった。

「魔族にも派閥などあるのか？」

「う、ん。ある。とにかく人族ひとぞくが殺せればいい〃というバアル派……あいつらは、ばか？ 頭が悪いひとぞくいつまでも。人族を殺すことしか考えない」

「なるほど……そいつらは、なぜ街まで来ない？ 結界の外で農作業をしている人族ひとぞくも



いるはずだが？」

「バアル派はく気分で動く、から。でも本当は怖がつてる。魔王様がいないとく魔族は、弱い。弱いから戦いたくない？　でも人族は殺したい？」  
ひとぞく

「それでは、魔獣のようなものだな」

理屈が通じないぶん、遭遇すると面倒そうだ。彼女が警戒するのもわかる気がした。

「あとはく、オウロウ派」

「そいつらは、どんな連中だ？」

「オウロウは前の前の魔王様より長生き？　一番古い魔族で一番強いくらしい。わからない。エデルガルトは戦ったの見たことがない。けどく……無気力？　使えない……ちがう……無気力じゃない、と言ってた。穏健派？　そう言ってた」

「フンツ、魔族のなかに穏健派がいるとはな」

オウロウも知っている。

巨大な梟ふくろうだったはず。魔獣じゃないのか、と話題になったが——外見に関係なく言葉を操れるものを魔族というらしい。

ゲームのほうでは、魔族の拠点を攻略するというシナリオだったので、あまり会話もなく、いまましい冒険者どもめ！　などと一方的に言われただけで戦闘に突入した。

穏健派という印象はなかったし、一番強いとも思えない。

派閥があるという情報も、初めて知った。

「オウロウは、待ってればいつかまた魔王様は復活なされる、って言ってたから、動かない？ 動かない！」

レムが驚いていた。

「……魔族に穏健派が……そんな話は聞いたことがありません。今の会話だけでも、多くの人族ひとぞくにとって驚きの情報でしょう」

「信用される前に、魔族と通じたとして処刑されそうですが」

アリシアの言葉で、ディアヴロは納得した。

人族ひとぞくの間では、魔族の情報があまりに乏しかった。ゲームの設定にも書かれていなかった。魔族の数は？ 指揮系統は？ どう暮らしてどう増える？

馬鹿げた話だった。本当に勝とうと思ったら、敵のことに敵よりも詳しくならなくては。

「エデルガルトよ、貴様の派閥はどちらなのだ？」

「違う。エデルガルトは、エデルガルト！」

「つまり、派閥は三つあるわけか」

「う、ん……はぐれもいるけど、だいたい三つ？ 三つ！ エデルガルト、は、

魔族の司祭から話を聞いて、魔王様を復活させるために、いろいろやってる。大切な



はく魔王様を、ちゃんと復活させること。ちゃんと」

バアルとオウロウは、クロスレヴェエリに実装されていた。アップデートされていけば、いずれエデルガルトも登場していたのだろうか。

ディアヴロは彼女を眺める。

——こいつ、この外見だったら、グッズとか発売されただろうな。そんなことを考えてしまった。

屋上に着く。

しばらく真っ暗な階段を歩いていたせいか、月明かりですら眩まぶしく感じた。

ディアヴロが召喚された場所だ。

五人いても狭く感じないほどには広く、八角形で、中央に石柱で囲まれた祭壇がある。

天井はなくて、夜空が見えていた。

大きな満月が浮かんでいる。

+

ほしふり  
《星降の塔》屋上——

ディアヴロ、レム、シェラ、アリシア、エデルガルトの五人は、中央にある石の祭壇の前に来た。

エデルガルトが説明する。

「魔王様が復活するためには、封印の器になつてる人族が死ぬか、魔王様の魂に、魔力が満たされたときだけ……まだまだ何百年もかかる、かも？」

レムが身を固くした。

「……では、この儀式は、クレブスクルの魂に、魔力を満たすものなのですか？」  
「そ、う」

エデルガルトが、ディアヴロのほうを向いた。

「あなたの魔力を、魔王様の魂に注ぎこむ。そしたら、早く魔王様が復活できる、はず。たぶん。司祭は言ってた」

レムは不安げだった。こくん、と喉を鳴らす。

「……信用……するしかないのでしょうね」

たしかに、雲をつかむような話だった。

判断するための情報が、圧倒的に足りていない。エデルガルトの言葉の真偽を確かめる方法はなかった。

レムが、ディアヴロに手を伸ばしてくる。



彼女の小さな両手で、《天魔の杖》<sup>てんまつえ</sup>を握<sup>つか</sup>んでいる右手を握られた。  
やわらかい。

「な、なんだ？」

「……ディアヴロ……わたしは、魔族を信じることはできません」

「そうか。であれば、やめておくか？」

「いえ、儀式は行いましょう。おそらく、魔力を蓄えてクレブスクルムは復活するでしょう。そのとき、わたしが助かるのかどうかは、わかりません」

「うむ」

「それでも、かまいません。わたしは自分の命よりも、クレブスクルムを倒したい。あなたになら、それができる……きつとできる。だから、わたしは、ディアヴロを信じます」

じつ、と見つめられた。

命懸けの顔だ。

いつか復活する魔王の卵として、ひっそり隠れ住む生<sup>せい</sup>ではなく、戦うことを選んだ者の顔だった。

月光を浴びて、その姿はあまりに美しい。

ディアヴロは彼女の肩に手を置いた。

「我に刃向かう者は、等しく殲滅<sup>せんめつ</sup>してくれよう」

この言葉を、少女を安心させるために言うとは思わなかった。

魔王らしく演じたものだが、ディアヴロの本心でもある。クレブスクルムは倒す。そして、もしもレムの身になにかあったら、エデルガルトも許すつもりはなかった。エデルガルトが祭壇へとうながす。

「じゃ、あゝ……ここに寝る！」

この世界にディアヴロが来たとき、目を覚ました場所だった。

レムが祭壇に横になる。

「……これでいいのでしょうか？」

「いい。でー……魔力をそそぐ」

視線を向けられた。

それは自分の役目だ。ディアヴロは内心の緊張を表に出さないようにする。

「なにか、道具とかは使わないのか？ 儀式の準備をしていたのだろうか？」

「足元に、魔術陣。注がれる魔力を増幅？ する」

「それだけか？」

「ほか、に必要？」

エデルガルトが首をかしげた。



魔力を注ぐというのは、奴隷屋で店主メディオスから教えられ、シエラに試みた行為だろう。

たまたま習得していたからいいようなものの……

もしも、ディアヴロが魔力を注ぐ方法を知らなかったら、ここで儀式は失敗だったわけだ。

居たたまれない空気になっていたことだろう。

内心で「覚えておいてよかったー!!」と万歳した。

——しかし、エデルガルトは、けっこう行き当たりばつたりな性格みたいだな。

妙な話し方のわりに、意外と考えている。知識もあるし、冷静だ。三つある派閥の一つを束ねている、というだけのことはある。

しかし、勢い任せなところもあった。

あるいは、ディアヴロが魔力を注ぐことができるという情報を得ていたのだろうか？

だからこそ、今回の提案を？

シエラが顔を赤らめる。

「えっと……魔力を注ぐって……アレだよね？」

ディアヴロはうなずいた。

「そうだろうな」

「アレかあ……レム、大丈夫かな？」

「……か、覚悟はしています。でも、これはクレブスクルムを復活させ……そして、倒すための儀式です。真面目なものなのです」

以前、シェラがお遊びでレムに魔力を注いだことがあった。それを思い出したのだから、レムの顔も赤くなった。

「う、うん。がんばって！」

近づこうとするシェラを、エデルガルトが遮った。

「魔術陣が乱れる。からゝ関係ないのは、離れて」

「そっかあ……」

「任せておくがいい！」

ディアヴロは祭壇へと近づく。

ふわっ、と周囲に描かれた魔術陣が青白く浮かびあがる。

レムの乗った祭壇にも、細かい模様と文字がびっしりと記されていた。

彼女は震えている。

「……ふふ……冒険者になる、と決めたときから、たいていのことは覚悟しておりました。しかし、魔族の描いた魔術陣のうえで、魔王から魔力を注がれるなんてことは、想像の外でしたね」



「貴様は空の星でも数えている。すぐ終わる」

——すぐ終わる、よな？

魔力を注ぐのは集中力が要求される。覚えただけだから、そんな長くは続かなかつた。

レムの身体に触れる。まずはお腹へと右手を置いた。ひんやりとして、やわらかい。「ふっ……」

彼女が小さく吐息をもらした。

「大丈夫か？」

「ええ、ちよつと、くすぐったかったただけです」

「苦しかったら、すぐに言うがいい」

「……はい」

「ええつと……」

レムの服は上下のセパレートだ。剥き出しのおへソに手で触れて、魔力の流れを読み取る。

強い流れが、心臓を中心に渦を作っていた。

シエラとは異なるパターンだ。

そこに魔力を注ぎこもうとする。

レムが背筋を震わせた。

「んううう……ッ!？」

横から、エデルガルトが口を挟んでくる。

「ちがう、それ。違う。それ魔王様じゃなくて、その豹人族ひょうじんぞく！ そつちに魔力、違う」

「ふむ、なるほど」

もつと慎重に情報を読み取る。

レムの魔力の流れの奥に、どろりとした塊があった。

ヘソの奥か……

いや、もつと下だ。

魔力の流れを読み取っても色はわからない。そのはずだが、そいつは黒色だった。まるでレムの奥に底なしの穴が開いているかのようだ。

何人も魔力を読み取ったわけではないが、少なくともシェラとは違う。おそらくはデアヴロとも違う。

メデイオスが怪訝けげんな顔をするわけだ。

「ここか……」

魔力を注ぐ。



先ほどと同じように、レムが身体を震わせた。

「はふうんうううう……ッ!!」

「む……届いていないな」

奥にあるせいで、いまいち魔力が届きにくかった。半分くらいレムのほうへ流れていく感じがした。

エデルガルトが不満げに言う。

「それだと、足りない。魔王様に渡らない？ 指を突き刺したらいい」

「……待て。指を、だと？」

「そう。ドスツと、ひと思い」

「却下だ。肌に擦り傷ひとつ許さん、とまでは言わないが、そんなことをしたらレムの命に関わるからな」

ひとぞく

「むゝ人族はひ弱……穴の一つや二つで……そう。穴。穴ならあった？ ある」

彼女が祭壇の横に来て、指し示す。

魔族は近づけないという話だったが、儀式が順調に進んでいないので、細かいことは言わないでおく。

そんなことより、彼女の提案が大問題だった。

「……なん、だと？」

「ここから指を入れれば、腹を突き刺さなくても、大丈夫？」

「貴様、からかっているのか!？」

「エデルガルトは、冗談が……嫌い」

レムが小さな声をだす。

「……てください」

「ん？」

「やって、ください……ディアヴロ。それが必要なことでしたら」

「う、ぐ……いや……ううむ」

見ているシェラが「なんだか、よくわかんないけど、がんばって!」と声をあげた。  
アリシアは黙って見つめている。

ディアヴロはうなずいた。

「よし! 痛かったら言うがいい! 待つくらいはしてやる!」  
声が震えそうだ。

改めて、彼女の身体へ手を伸ばす。

身体の奥にある存在に、最も近づける場所へ。

——これは、魔王クレブスクルの魂に魔力を注ぐための行為だ!

ディアヴロはレムの下腹部へと手を伸ばす。



「脱がせるぞ」

「は、はい……」

スパッツに手をかけて、ずり下ろした。腰のところを空気にさらす。

そして、両足の間に手を伸ばした。

なるべく目は向けないように、むしろレムが痛がったらすぐわかるように彼女の顔を見ておく。

手探りで、彼女の奥への入口を探した。

ぴくつ、とレムが睫毛<sup>まつげ</sup>を震わせる。

「はんッ!？」

「お、おい？」

「だ……大丈夫です……ちよつと、敏感なところに、触れただけで……気にせず、続けてください。無理そうなら、ちゃんと言いますから」

「そうか」

前にレムは十四歳だと言っていた。

——いいのか？

いや、<sup>ひょうじんぞく</sup>豹人族だから人間と同じ基準では考えられない。<sup>ヒューマン</sup>MMORPGクロスレヴェリ

の設定によれば、エルフなんて三〇〇年くらい生きる。他の亜人も総じて長寿なのだ

か。

細かいことを気にするのはやめて、ディアヴロは行為に集中した。少し離れて見ているシェラが顔を赤くする。

「え？ え？ 儀式……だよね？」

「もちろんです」

アリシアが答えた。

ディアヴロの指先が、レムの大切なところに届くと、彼女が背筋を反らせた。

「ふッ！」

「こ、ここか……」

「んんッ、あッ！ ああッ！ は……入って……ディアヴロが、入って……くッ……る」

「あ……」

思ったより、すんなりと入った。

温かい。

やわらかくて、ねつとりと絡みつくようだった。

指先をちよつと入れたくらいでは、まだクレブスクルムまでは遠い。腹の上に手を置いたときと大差なかった。



もつと奥へと押しこむ。

レムが息を引きつらせる。

「はんうッ！ くふうううう……うううッ！ んッ、あッ！ はッ！ はッ！」  
「もうすこしだ」

ディアヴロは中指を奥まで押しこんだ。

彼女の体温が、はつきりと伝わってくる。ぎゅうぎゅうと締め付けられた。  
そして、魔力も感じる。

——近くまで来てやったぞ、クレブスクルム！

「いくぞ！ レム！」

彼女の腰を中指だけで持ち上げるようにして、さらに深くへと押しこむ。  
魔力を注ぎこんだ。

レムが甲高い声をあげる。

「ひああああああああああ——ッ!？」

ディアヴロから放たれた魔力が、彼女の奥底にある漆黒の空洞へと流れこんでいく。  
エデルガルトが目を細めた。

「そ、う……それで、いい……はず」

「あッ！ あッ！ あッ！ ひあッ！ んはああああッ！ だ、だめ、つよ……い

え、そのままッ！ んはあ……あぐうううッ！ お、お腹の奥が……熱く……も、燃えちゃいそうですう……ううッ！」

「まだだ！ もっとだ！」

ありったけの魔力を注ぎこむ。遠慮はしない。

ここまでやったからには、絶対にクレブスクルムを満腹にさせ、叩き起こす！

足元に描かれた魔術陣が眩しいほどの輝きを放った。

ディアヴロの魔力を増幅しているのだ。

レムの中で、膨大な魔力の放流が荒れ狂う。内側をかき乱されて、彼女が何度も祭壇のうえで身体を引きつらせた。

「はうううぐあッ！ あぐッ！ んんッ！ く、つふう！ あッ！ そ、そんなところまで……んあああ、えぐられて……つはあ……んッ！ お、おかしくな……ちや……はッ！ あッ！ んはあッ！ あああああ……あああッ！」

「ふう……ふう……」

魔力を消費しすぎて、目眩がしてきた。

鈍痛にも似た感覚が背筋から、頭の奥へと響いてくる。

指先は熱に溶かされたように感覚を失いはじめ、まるでレムの身体とひとつになってしまったかのようだ。



それでも、ディアヴロは彼女の奥へと突き入れる。

「くす……」

「ひゃうんッ！　ふあ！　あッ！　あああッ！　んはああッ！　熱いッ！　熱いですッ！　ディアヴロ……も、もう……わたし……はふッ！　こんな……お、おかしく……なりそう……んッ！」

「ああ、あふ溢れてきたぞ」

レムの奥にある深い穴から、注ぎこんだ魔力が溢れてきた。

——クレブスクールが満腹になったか！

とどめとばかりに、残った魔力を深いところへと放つてやる。

「くおおおッ！ 届けッ！」

「んんう！ あッ！ ひぐうううううううううううううううう

ディアヴロは彼女の内側をひっかきつつ、指を抜き取る。

液体が祭壇に散った。

来るツ!!

深い穴の中から、なにか出てくる。

「あぐうううう……ッ！」

レムが苦しげに声をあげた。

出てくるといっても、物質的な存在ではない。

濃密な魔力の奔流だった。

彼女の中で膨れあがり、まるで氾濫した濁流のような勢いで溢れ出してくる。

ディアヴロは祭壇の傍らで踏ん張っていた。

警戒するならば、距離を取るべきだが……

守る者が、ここにいます。

魔族の魔術陣が、どういう仕組みかわからない以上、うかつにはレムを動かすことはできなかった。

「おい、エデルガルト！ 本当に大丈夫なのだろうな!? かなり苦しんでいるぞ!?」

エデルガルトは泣きそうな顔をして魔力の奔流を見つめていた。

空中を見上げて、うめく。

「お……お……魔王様……」



「チツ……聞いてないか」

ずっと飄々<sup>ひょうひょう</sup>としているように見えたが、彼女もまた命懸けで目標に向かっていたとい

うことか。成功を目前にして、忘我していた。

一瞬――

<sup>めまい</sup>目眩がした。

<sup>精神力</sup>

MPを限界近くまで消費したせいか、気を抜くと倒れてしまいそうだ。状況が状況のせいか、無気力には襲われないが。

ディアヴロは壁際へ視線を向けた。

シエラも魔力の流れというのが見える。そして、出現したあまりに巨大な魔力の渦に、身体を震わせていた。

「な、なんなの、これ……これが……クレブスクルムなの？」

「そうです……これこそが……」

アリシアがつぶやいた。

彼女もまた空を見つめて、身体を震わせている。

レムが弱々しく手を伸ばしてきた。

「はあ……はあ……くっ……はあ……はあ……ディア……はあ……」

「大丈夫か！　しっかりしろ、レム！」

ディアヴロは彼女の手を、左手で掴む。右手には《天魔の杖》を握りしめていた。この少女を守るために。

「うっ、くっ……はあ……はあ……」

「おい！ レム！ 目を開けろ！」

彼女の額には、すごい量の汗が浮かんでいた。

蒼白そうはくになつて震えている。

「はあ……はあ……ディアヴロ……勝つて……勝つて……ください」

「当然だッ！ 貴様には、それを見届ける義務がある！ 俺の所有物が勝手に死ぬなど、絶対に許さんから！」

「……………そう、ですね」

レムが苦しげにしつつ、微笑んだ。

シエラが叫ぶ。

「固まるよ！」

封印から解き放たれ、膨大な魔力の渦となっていた魔王クレブスクリムが、その姿を現す。

ディアヴロは身構えた。

巨大な胴体が、その姿を形作る。



蛇にも似た細長い胴だった。

そして、頭ができる。

二本の曲がった角が伸びていた。赤く輝く目が開く、二つ、四つ、頭の中央にも。表面は艶のある黒色であり、昆虫のような硬い表面を思わせた。

手が生え、足が生える。シルエットこそ人型と呼べるものになっていく。

ディアヴロよりも、大きい。

三メートルくらいはあるだろうか。人族として長身なディアヴロですら、相手の腰までしかなかった。

その背中から巨大な光の翼が発生して、天に届かんばかりに伸びる。横へも広げられた。まばゆい光翼が羽ばたく。

——甲殻に覆われた巨人。

それが《魔王クレブスクルム》の姿だった。

クレブスクルムが笑う。

女の声だった。

甲高い悲鳴にも似た笑い声が、この場にいる全員の鼓膜を震わせた。

エデルガルトが感極まったように両手を挙げる。

「おああおああ！　魔王様の復活ううッ！！」

獣の咆吼ほうこうにも似た叫び声だった。

やはり魔族なのだと感じる。

クレブスクルムは全身から魔力を迸ほとばしらせていた。

シエラが声を震わせる。

「……だめだよ。これ……復活させたら、ダメなやつだよ！」

「はあ……はあ……これが……」

レムは顔色を青ざめさせていた。

しかし、呼吸はいくらか落ち着いてきたようだ。このままなら、命に関わることはないのではないか。

ディアヴロは叫ぶ。

「シエラ！ アリシア！ レムを任せる！」

腰のポーチから、ポーション缶を取り出した。

精神力MP回復ポーションだ。しかも、この世界で調合したものではなく、ゲームをやっ

いたときに極めて希少な素材を集めて調合したものだった。

使用する。

限界近くまで消耗した精神力MPを一気に最大まで回復させた。それまで意識していなかつ

た疲労感が、吹き飛ぶ。もや靄のかかっていた思考がクリアになり、失われていた知覚が元



に戻った。

「ふうふう……」

ディアヴロは《天魔の杖<sup>てんまつえ</sup>》を構える。

相手が人族<sup>ひとぞく</sup>であれば、初手の動きから狙いが読み取れる。

しかし、クレブスクルムについては全く情報がない。いかにクロスレヴェリのトッププレイヤーでも、こればかりは戦ってみないとわからなかった。

——初見殺しの技を持っている可能性もあるが、受けてやる意味もない、か。  
ゲームなら口上を聞いてやるところだが、この世界ではラスボスの演出に付き合う必要はなかった。

杖<sup>つえ</sup>を相手へと向ける。

「——ッ」

魔術を発声しようとした、そのとき——

ばっしゅううううう！

まるで風船の空気が抜けていくような音だった。

魔王クレブスクルムの姿が縮んでいく。

ディアヴロと同じくらい……いや、もっと小さくなっていく。シエラやレムどころか、もっと小さく。

空中から、すっと落ちてきた。

ディアヴロは思わず攻撃するのも忘れて見入ってしまった。

まがまが禍々しい姿で現れたはずのクレブスクルムが、あまりに姿を変えていた。

思わず、何度も見る。

目をこする。

「……子供、だと？」

クレブスクルムが幼い女の子になっていた。

頭には山羊やぎのような巻き角がある。瞳はアメジストのような紫色で、ふた房に結った

黒髪は膝下まで伸びていた。着ているのは、ひらひらとフリルがあしらわれたドレスだが、肩もお腹も見えており、これが幼女でなければ扇情的なほどだ。

レムより小さい女の子であり、小動物にも似た愛嬌あいきょうすらあった。

エルフのように耳が長く、お尻からはトカゲの尻尾が垂れてぷらぷらしている。

幼女だった。

ディアヴロは我が目を疑う。ゲーム仕込みのMP回復ポーションが強力すぎて幻覚を見ているのではないか、とレムたちの様子も確かめる。

彼女たちも驚いた顔をしていた。

やはり見間違いではないのか。

幼女——クレブスクルムは塔の縁の高くなった場所に降り立ち、腕組みをして周りを睥睨した。その高い場所に立ってすら、ディアヴロのほうが背が高いのだが。

「くつくつくつ……マオーの眠りを覚ましたのは、キサマらか！」

普通にかわいらしい声だった。

エデルガルトがひざまずく。

「……魔王様……ご復活、お喜び申し、あげ？ あげます！」

幼女がうなずいた。

「キサマは？」

「エデルガルトはエデルガルトと申し、ます」

「そうか。うむ！ マオー復活、おおいに褒めてやるのだ！」

魔族との会話からして、この幼女が間違いなく魔王クレブスクルムだった。倒すべき敵だ。

しかし、ディアヴロは戸惑ってしまう。



MMORPGクロスレヴェリには、人型のモンスターだって登場する。野盗もいたし、魔族も人型だ。

女性型も初めてではない。

けれども、幼女はいなかった。

推測だが――未実装ではなく意図的にゲームで削除されている要素として、性差別、種族差別、奴隷などがある。

そして、未成年者虐待に見える要素も削られていたのではないか？

あのクレブスクルムを魔術で吹き飛ばすのは、あまりに酷い光景となることだろう。しかも、この世界はゲームではない。

「倒す」ということは「殺す」ということだ。

魔王なのだから、当然といえば当然なのだが……

――はつきり言って、抵抗あるな。

レムとの約束もあるし、ひとぞく人族のためにも放ってはおけない。あの幼女はひとぞく人族を滅ぼす魔王だ。そのはず。

――本当に？

「おい、貴様は本当に魔王クレブスクルムなのか？」

「む？ いかにも！ キサマは何者なのだ？」

「我が名はディアヴロ。異世界から来た真の魔王であり、貴様を復活させ……そして貴様を屠<sup>ほふ</sup>る者だ！」

「ふふん、その魔力……そうか……マオーを起こしたのはキサマなのだ。うむうむ……褒美として、恐怖を教えてやろう！」

小さな身体から、すさまじい魔力が溢<sup>あふ</sup>れ出てきた。

空気が歪<sup>ゆが</sup>められる。

——こんな見た目でも、やはり魔王か。戦うしかないらしいな。

ディアヴロは《天魔<sup>てんま</sup>の杖<sup>つえ</sup>》を構え、唇の端を歪めた。強敵を前にしたときこそニヤリと嗤<sup>わら</sup>うのが魔王というものだ！

「ククク……起きたばかりの魔王ごときが、どのように恐怖を教えるというのだ？」  
クレブスクルムが尖<sup>とが</sup>った犬歯を見せて笑う。

「くつくつく……そうだな……マオーを復活させしキサマには、あの方法がよからう。とびつきり残虐なやつで殺してやる！」

おおぎよう  
大仰に言い放った。

なにやら戦い方を思いついたのだろう。あるいは、処刑方法か。

こいつは間違いなく強敵だ。

——先手を取るか？ いや、あの体格なら魔術を使ってくる可能性が高い。

攻撃させて《魔術反射》に重ねて、極大魔術を叩きこむべきか。ディアヴロの思考は完全に戦闘へと没入していた。

ところが、クレブスクルムが困った顔をする。

「……あれだ。ええっと、その……とびっきりの方法がある……はずなのだ。ちよつと待て」

様子がおかしい。

「どうした？ なにを迷っている？」

使える魔術が多すぎるのか？ できるだけ一発目から強力なやつを期待したいところなのだが。

「待て！ ちよつと待つのだ。今、思い出す！ ええっと、どうしたものだっただか……たしかになんかあったはずなのだが……」

「……………まさか、貴様、思いついていないのか？」

「いやいやいや！ マオーはマオーだからマオーの様々な知識がある！ あるはずなのだが……その……なんだ。ちよつと忘れちゃつてるといふか……」

「戦い方を忘れているだろ!？」

「ええい、そんなことはない！ もうよいわ！ 見えるもの全てを焼き尽くせばいいのだ！ それって、マオーっぽいだろ!？」



まるで痼癢<sup>かんしゃく</sup>を起こした幼女だった。

シエラが叫ぶ。

「そ、そんなのダメだよ！」

魔王に通じるわけもない、そのはずだった。

クレブスクルムが怯<sup>ひる</sup>む。

「……ダメなのか？ では……どうしたらよいのだ。さっぱり思い出せぬ」  
止まった！

これには、言葉を放ったシエラですら驚いた。

レムやアリシアも啞然<sup>あぜん</sup>としている。

エデルガルトも目を丸くした。

「魔王様!? 人族<sup>ひとぞく</sup>の言葉などに、従う……違う？ 違う！」

「む？ そうか？ しかし、ダメと言われたら、ダメではないのか？」

「な……に……を？」

困惑した表情をエデルガルトが浮かべるのは当然だろう。

他の者たちも同じだった。

ディアヴロだけは、なんとなく察する。これはMMORPGクロスレヴェリの知識と  
いうよりは、架空の物語に多く触れてきた結果だった。

——クレブスクルムは記憶の一部を失っているのか？

儀式は中途半端に成功し、中途半端に失敗していたらしい。理由はわからないが。アリシアが尋ねる。

「魔王は……人族を滅ぼす者です。そうではないのですか!？」

ひとぞく

「ん？ うむ、そうだな。そうだった気がする……」

クレブスクルムが考えこんだ。

レムが、シエラに支えられながら声を張りあげる。

「なぜです!？　ずっと不思議に思っていました。どうして、魔王は人族を殺すので

ひとぞく

す!？　魔族は領地を持ち、生きていくのになんら人族の土地を必要とせず、利害を対

ひとぞく

立させていないはず。なにが目的なのですか!？」

たしかに、それはディアヴロも知らなかった。

クロスレヴェリの設定にも一切書かれていない。

そもそも敵対存在が人類を滅ぼそうとする、その理由を説明しているゲームなど、ほとんどもなかった。

モンスターは人を襲うものだ。

しかし、この世界の魔族は派閥を持っており、自分の命を無駄に捨てないために人族<sup>ひとぞく</sup>の街へは不用意に近づかない。

エデルガルトのように利害が一致すれば人族<sup>ひとぞく</sup>と協力することもできる。

そして、こうしてクレブスクルムとは対話が成立していた。

「なぜ人族<sup>ひとぞく</sup>を殺すのか？」

レムの問いに、クレブスクルムは頭を悩ませる。

「ううう……いや……それは……なんか理由があつたような気がするのだ」

「では、あなたは人族<sup>ひとぞく</sup>を殺したいとは思っていないのですか？」

「ん？　そうか？　そうかもしれぬ」

「それなら、お願いします。人族<sup>ひとぞく</sup>を殺さないでください！」

魔王に対して、ありえないような頼み事だった。

しかし、レムは真剣だった。

シエラも続く。

「あたしもお願いするよ！　人族<sup>ひとぞく</sup>を殺すなんてよくないよ！　やめて！」

アリシアは啞然<sup>あぜん</sup>としている。

クレブスクルムがうなずいた。



「んー……殺す理由も思い出せないから、いいか。わかった。キサマらは殺さないでやってもよい」

彼女がディアヴロのほうを睨<sup>にら</sup>んだ。

「マオーを屠<sup>ほふ</sup>るとのたまうのであれば、やっぱり焼き殺すのだが？」

売り言葉だった。

魔王の威厳を保つには、<sup>〃</sup>焼き殺す<sup>〃</sup> などと言われたら、<sup>〃</sup>やってみるがいい<sup>〃</sup> と答えるしかない。

ディアヴロは買い言葉を――

慌ててレムとシエラが割りこんでくる。

「屠りません！ 殺しません！ 戦いけません！ 人族<sup>ひとぞく</sup>を殺さないなら、きつと！」

「そ、そうだよ！ ディアヴロは本当は優しいんだから！」

長く一緒にいるだけあって、魔王ロールプレイでどう反応してしまうか理解したうえでの割りこみだった。

ディアヴロは内心で安堵<sup>あんど</sup>する。

――ナイスだ。

クレブスクルムが納得する。

「ふむ、そっちに戦う気がないなら、戦う意味はないのだ」

アリシアが信じられないものを見るような顔をしていた。意外と多彩な感情を見せるものだ。

「……本気なのですか？　魔王が人族を殺さない、ひとぞくと云うのですか？」

「そんなことする理由を思い出せぬからな。ひとぞく人族など殺しても腹は膨れないのだ。マオ―は腹が減ったぞ」

「エ、エデルガルト!?　それでいいのですか!？」

アリシアの言葉に、ずっとひんみん跪いていた彼女が、立ちあがった。眉間にしわを寄せて厳しい表情をしている。

――やはり、魔族のほうは「人族を殺さない」ひとぞくなどという考えには賛同してくれないか。

ディアヴロは身構える。

しかし、エデルガルトはうつむいた。

「べつに、ひとぞく人族はどうでもいい？　エデルガルトは、魔王様が大切。魔王様だけが大切。はあ……魔王様の、おやつを、用意して、なかった……エデルガルト、不覚」

どうやら、空腹のクレブスクルムに食べさせる物が無いことを嘆いているようだった。

そういえば、彼女は魔族に派閥があると言っていた。

バアル派は人族を殺すことしか考えておらず、オウロウ派は穏健派だったか。そし

て、エデルガルトは「魔王に従う」という方向らしい。

この場合は好都合だった。

アリシアが奥歯を噛む。

彼女は剣を抜いた。キーン、と金属音がする。

「……………ッ!!」

「落ち着くがいい、アリシアよ。どうやら、戦う必要はないようだ」

そうディアヴロは声をかけてやった。

アリシアが《星降の塔》の最上階に視線を巡らせる。

シエラは、どうやら戦闘が回避できそうだったということで、安堵していた。

魔王を倒してほしいと願っていたレムだが、彼女も戦闘が回避できたことは喜ばしく思っているようだ。先ほどよりは表情をやわらげていた。

エデルガルトが「おやつ、取ってくる？　今？　なにを？」と悩んでいる。

ディアヴロは杖を下ろしていた。

そして、クレブスクルムはお腹を押さえて、ため息をつく。

「はあ……………お腹が減ったのだ」



「くっ」

アリシアが剣を納める。

——もしかして、魔王と戦いたかったのか？

彼女は生真面目な国家騎士だ。魔王討伐に情熱を持っていたのかもしれない。

たとえ<sup>ひとぞく</sup>「人族を殺さない」という魔王だろうと、倒すべきだ——と考えている可能性もあった。

しかし、仲間であるレムたちも、主戦力のディアヴロも戦わないと言うのであれば、無理強いはできない。

ディアヴロはアリシアの心情をそう推測した。

——堅物だからなあ。でも、そうやって警戒する者も必要だな。

魔王が「殺さない」と言ったからといって、あまり油断しすぎるのも問題だ。

記憶が戻った途端、本来の<sup>ひとぞく</sup>「人族の敵」としての行動を起こす可能性はあるのだから。

レムをアリシアに預け、シェラがクレブスクルムに近づく。

恐がりに見えて、度胸があるというか……

先ほどの会話ですっかり信用したというのか？ シェラはアリシアとは逆に警戒心が薄すぎだった。

「おやつ、持ってるよ？」

ポーチの中から取り出したのは、ビスケットだった。

小麦粉を固めて焼いた円盤状のお菓子だ。いや、この世界だと砂糖もバターもほぼ使われておらず甘くない。お菓子というよりは保存食だろう。

クレブスクルムが目を輝かせた。

「それはなんなのだ!？」

「ビスケットだよ、美味しいよ？ ほら、美味しい」

シエラは一枚を差し出し、もう一枚を自分でかじった。パリツと音がする。

クレブスクルムが受け取った。

「ほほう、ビスケットというのか。そうか。どれどれ、食べてやるのだ」  
パリツとかじる。

叫ぶ。

「うまいのだ！」

「そう？ じゃあ、もつとあげるね」

「おおー！ よこすがいい！」

「物をもらうときは、ぐくください。ありがとう」って言うんだよ？」

渡しながら言う。

もうクレブスクルムは話を半分も聞いていないくらいビスケットに夢中だった。

「くださいありがとうございます、なのだ！」

受け取ったビスケットを口に放りこむ。

「うまいのだ！ うまいのだ！ キサマは名をなんといいう!? とっておきの強い魔族にしてやるぞ!」

「あはは……あたしはシエラ。エルフだよ？」

「なんだ人<sup>ひと</sup>族か。まあ、よいのだ。褒めてやるのだ」

「ここにいる魔族は……エデルガルト、ただ一人？ 一人！」

クレブスクルムにおやつを与える役を取られて、彼女は不服そうだった。

なるほど、と幼女がうなづく。

「ならば、キサマには力を与えておくのだ！」

片手をかざす。

小さな手から放たれた魔力が、エデルガルトに浴びせられた。

ドンツ！ とエデルガルトの気配が変わる。圧力が増したのをディアヴロは肌で感じた。彼女が奥の手《サクリファイスチャージ》を出したときと同じくらいのプレッシャーだ。今は槍<sup>やり</sup>すら構えていないというのに。

——魔王から力をもらうと、あんなに変わるのか！



エデルガルトが跪く。ひざまずく

「おおお……ありがたき、幸せ！」

ひとぞく人族を殺さないと言い、ビスケットに喜ぶ少女だが……

やはり魔王だった。なんの造作もなく魔族のレベルを大幅に引き上げてしまう。

以前、ディアヴロはウルグ橋砦きょうせうに押し寄せてきた魔族一〇〇体と対峙たいじした。極大魔術で大半を吹き飛ばしたが……

あるとき、魔族たちが魔王によって強化されていたら勝つのは難しかったかもしれない。

——今のところ、心配なさそうだけだな。

エデルガルトから戦意は感じられない。魔王の言葉に従って、ひとぞく人族は殺さないつもりなのだろう。

ディアヴロは、レムのところへ近づく。傍らにはアリシアもいた。

「体調はどうだ？」

「……落ち着いてきました。でも、びっくりしすぎて、脚に力が入りません」

「フツ、腰が抜けたか。いずれ回復するだろう。それで……貴様はアレを受け入れられるのか？」



声を潜めて尋ねてみた。

レムが目ですがめる。

「……わたしも母も祖母も……ずっと魔王の魂に苦しめられてきました。クレブスクルムを倒すことだけを生きる目標としてきました……だから、簡単には受け入れられませんが」

「そうか」

「……ですが、人族を殺さないというのなら、戦う理由はありません。理由もなしに殺すのでは、わたしのほうこそモンスターのようにではありませんか？」

そう言って、レムは微笑んだ。

疲れ切っている。しかし、晴れ晴れとした笑みだった。

隣でアリシアが黙って聞いていた。彼女も複雑な想いを抱えているようだが、もう戦意は失っているようだ。

ディアヴロはうなずく。

「物事の全てに納得できることなど多くはない。だが、貴様は選んだ」

「はい」

「果たせた約束は半分になってしまっな」

レムからクレブスクルムの魂を引き剥がすことは成功した。しかし、それを倒すとい



う約束は果たせずに終わりそうだ。

——あれを殺すなんて、たしかに自分のほうがモンスターだな。幼女のクレブスクルムが、ビスケットを貪っている。

「はぐはぐ……うまいのだ！　これは、うまいのだ！　おかげでマオーは使命を思い出したぞ！」

「えっ!？」

シエラが焦る。

クレブスクルムが、ぺったんこの胸を張った。

「この世のビスケットを食べ尽くす！　それこそがマオーの復活した意味なのだ！」

——そんなわけあるか！

ディアヴロは内心で、つつこみを入れる。

この世界はゲームではないから、平和が一番だ。しかし、クロスレヴェエリのほうで、こんな魔王が実装されたら、運営のポストがクレームで溢れる<sup>あふ</sup>だろう。

いつだって、娯楽作品にはシンプルにぶん殴れる敵が望まれる。撃破してスカッとできる標的が求められる。

しかし、この世界では……魔王でさえ、プレイヤーの憂さ晴らしのための存在ではな

かった。生きて、笑って、ビスケットを食べるのだ。

クレブスクルムが、シエラに尋ねる。

「もうビスケットはないのか？」

「うん、ごめんね。でも街に帰れば、いくらでもあるよ？ ジヤムをつけたら、もっと美味しいんだあ。あと砕いたクルミを混ぜたのが、もっともっと美味しい」  
うっとりした表情でシエラが語った。

じゅる、とクレブスクルムが涎よだれをすすする。

びっ、と東を指さした。

「よし！ もっとビスケットのあるトコに案内するがよいのだ！」

「ええっ!? 街に行くの!? 魔王が!？」

エデルガルトが慌てて詰め寄る。

「ま、魔王様、はゝひとまず魔王城へ！ それが、お約束？」

「魔王城か……そこにはビスケットはあるのだな？」

「いえ？ 城にあるのはゝ、死肉とゝ、血の酒とゝ、悲鳴の演奏と？」

クレブスクルムが唇を尖とがらせる。

「キサマ！ マオーをビスケットのないトコへ連れていこうというのか!? マオーは

ビスケットを食べるために復活したと言ったのに！ 言ったのに！」

「……あ、いえ……その……魔王様は、魔王城にいるのが、ふさわしい？ ふさわしい！ かと……も、申し訳、なかった。ごさいません」

エデルガルトが深々と頭を下げた。

ふんっ、とクレブスクルムが腕組みする。

「マオー復活の功を評価し、今のは聞かなかったことにしてやるのだ。マオーの意志に従わぬ魔族など必要ないのだぞ？」

「は、ははっ！」

エデルガルトは恐縮しきりだった。ショックを受けたような顔をしている。

クレブスクルムが、シェラの腕をつかんできた。

「よし！ 街とやらに案内するのだ！」

「やっぱり行くの!? いいの!？」

シェラが困ったように視線を泳がせる。

こうなつては、もう連れて行くしかないだろう。下手に断ったら今度こそ本当に魔王と戦うことになりそうだ。

ふとディアヴロは考える。

——謎が多い魔族の生態だけど、ひとつだけわかったことがあるな。



魔族の世界にビスケツトという文化はない。それだけは、はつきりしたのだった。

十

《星降<sup>ほしふり</sup>の塔》から外へと出た。

まだ満月が煌々<sup>こうこう</sup>と輝いている。

深夜だ。

今からファルトラ市に向かえば、夜明け頃には着くだろう。

ディアヴロはゆつくりと草原を踏んだ。

結局、まだうまく歩けないレムことは、左手で脇に抱えていた。

腰を抱きかかえられて、彼女は不本意そうな顔をしている。

「……歩けますが？」

「しかし、階段で二度も転びかけたではないか。心配するだけ面倒だ」

「……心配、してくれるのですか？」

「んっ？ あ、いや……フンッ、貴様は我の所有物だからな。傷が増えるのを心配するのは当然だ」

「……はい。そうですね」

赤面しつつレムが微笑んだ。

そんなディアヴロたちの少し後ろ――

クレブスクルムはすっかりシエラに懐いたようで、手をつないで歩いていた。

最初は魔王だと思って怖がっていたシエラだが、良くも悪くも警戒心の薄い性格なので、もう慣れたらしく笑みを交わしていた。

魔王をビスケットで取られた――と暗い顔をしているのはエデルガルトだ。肩を落としてついてくる。

そして一番後ろを、人生の大勝負に負けたような顔をしてアリシアが歩いていた。ふと空を睨む。<sup>にら</sup>

「……あっ!? ディアヴロ様、上を!」

「なんだ!？」

アリシアの声に反応して見上げるのと、月明かりが遮られて影が落ちるのは、ほぼ同時だった。

空から羽音が降りてくる。

頭に大きな一本角を生やした、梟<sup>ふくろう</sup>だった。

ただし、大きい。頭から尾の先まで一〇メートルくらいはあるだろうか。

——魔獣か!? と咄嗟<sup>とつさ</sup>に思った。

けれども、その姿に見覚えがあることに気づく。ゲームで戦ったことがあった。

「オウロウか!？」

魔族だ。

巨大な梟<sup>ふくろう</sup>が、ディアヴロたちが向かう少し先に着地する。

そして、なんと人らしき姿へと変わりはじめた。

梟の頭を持った筋骨隆々の大男へ。

鎧<sup>よろい</sup>のような筋肉を薄手のシャツで覆っただけという、迫力ある外見だった。

「オウロウ、なぜ？」

エデルガルトがつぶやいた。

梟頭の巨漢が、クレブスクルムに向かって膝をつく。

「魔王様、ご復活、おめでとうございます」

当の幼女は、シェラの手をギュッと握ったまま、きよとんとしていた。

「なんじゃ、キサマ？」

「魔族オウロウにございます。先々代の魔王様より仕えておる古い魔族にて」

「ああ、そうか。じゃあ、キサマにも——」

ぽんぽん魔力を与えようとするクレブスクルムを、シェラが慌てて止める。



「ダ、ダメだよ!? ちゃんと人族を殺さないって約束してくれた魔族じゃないと!?  
ひとぞく人族が殺されて街がなくなったら、ビスケットも食べられなくなっちゃうんだから」  
 「なるほど、ダメなのだ」

思考レベルが似ているせいか、シエラはクレブスクルムを上手くうまコントロールできていた。

エデルガルトが前に出る。

「オウロウ? 今頃、出てきて……なに? 用事? 魔王様は、エデルガルトが守ってる」

たしか、オウロウという魔族は、穏健派だと言っていた。一番古くて一番強いのだっ  
 たか。

オウロウは、エデルガルトを無視した。クレブスクルムに語りかける。

「わたくしは魔王様の復活を心待ちにしておりました。魔王様に仕えることは、このう  
 えなない幸福でございます。この慶事を祝して、一差し舞いたいと存じまする」  
 クレブスクルムが首をかしげた。

「キサマの言葉は難しくてわからぬのだ」

「……失礼をいたしました。しからば、率直に申し上げますことお許しください。舞  
 う、とはすなわち——ここにいる何故か生かされている人族を皆殺しにして、魔王様の  
ひとぞく

「ご復活を祝う華といたく存じまする」

ヒツ、とシェラが身を固くした。

最初の言動で、もうディアヴロは気づいていたから、すでにレムを下ろしている。

《天魔の杖<sup>てんまつえ</sup>》を構えていた。

オウロウから、ディアヴロたちまでは、まだ一〇歩ほどの距離がある。これだけ離れていれば、魔術師に有利な間合いだった。

オウロウはなにも手に武器を持っていない。その体格からいって、おそらく拳士タイプの魔族だろう。

しかし、まだ様子を見る。

クレブスクルの反応に興味があった。

彼女はシェラの前で両手を広げる。

「ダメなのだ！ <sup>ひとぞく</sup>人族を殺すのはダメなのだ！ <sup>ひとぞく</sup>ビスケットが食べられなくなる！ シ

エラはマオーにビスケットをくれたのだぞ!? 殺すのは許さぬ！」

オウロウの梟<sup>ふくろうあたま</sup>頭が、目をすがめた。

「……なるほど、嗜好品<sup>しこうひん</sup>調達のために一部の<sup>ひとぞく</sup>人族を生かしておくくらいは座興のうちでありまする。しからば、魔獣を増やしてただきたく存じまする。できるだけ大型のを」

ディアヴロは再び興味深い情報を得た。

——なんと！ 魔獣は、魔王が意図的に増やすものだったのか！

ひとぞく 人族の間では、魔王が現れると自然と増える〃と思われていた。MMORPGクロスレヴェリの設定にすら、そう書いてある。

攻略サイトにアクセスできたなら、動画と一緒に貼り付けたい気分だった。シエラが首を左右に振る。

「ダメダメダメ！ 魔獣なんて、ひとぞく 人族を襲うんだよ!?」  
クレブスクルムが肩をすくめた。

「——だそうだ。魔獣がひとぞく 人族を殺すのなら、増やさぬほうがよいのだ」  
やはり魔王らしくない。幼女になっているせいで精神が引きずられているのだろう  
か？ それとも記憶の喪失が容姿に現れているのか？

オウロウが、ようやくエデルガルトに視線を移した。

「どういふことであるか？ ひとぞく 魔王様が人族を殺したからなど初めてである。魔族に  
力を与え、魔獣を増やし、ひとぞく 人族を根絶せよと命じるのが正しき魔王様のはず……これが  
本当に魔王様であると言えようか？」

「……エデルガルトに、もうわからない？ エデルガルトは、力をもらった！ だか  
ら魔王様は魔王様。エデルガルトは、魔王様の御意志に従う？」



「汝は若い。故に事の重大さが理解できておらぬのである。魔王とは魔の王でなくてはならず、魔とは人族を殺すものである。滅ぼす者である。大地を汚す者である。そして、魔王様の魂は限られる——このクレブスクルム様が存在するうちは、正しいクレブスクルム様は復活なされないということである」

「だから？」

「オウロウ派は、完全なる魔王様のご復活を待つものとする」

「あ、そ」

「不完全な魔王様には輪廻転生りんねてんせいをしていただきたく思いまする」

淡々とした物言いだった。

しかし、明確な宣戦布告だ。

クレブスクルムだけでは済むまい。この場にいる全員に、オウロウから殺意が向けられた。

直後、オウロウが間合いを一気に詰める。

一〇歩ぶんを一步で迫り、クレブスクルムに右拳を叩きこむ。

その直前——

エデルガルトが割りこんでいた。

馬上槍ばじょうそうで受け止める。

ドンッ、と衝撃波が広がるほどのぶつかり合いだった。

「ぐっ……おまえらは、勝手……魔族にとって、魔王様の御意志よりも大切なことなんかく、ない！ のに！」

「魔族にも世界での役割がある。汝は責務と意志を放棄しているだけのこと。愚かで拙速な行いが、このように不完全な魔王様の復活を招いてしまった……わたくしが正すのである！」

ふくろうあたま  
梟頭の巨漢が蹴りを放ってくる。

それもエデルガルトは槍を盾にして受けた。

シエラが悲鳴をあげながら、クレブスクルムの手を引いて、ディアヴロのほうへと走ってくる。

「うっきゃあああああ——！！」

「うひゃっ！ うひゃっ！」

もしかしたらシエラの真似をして声をあげているのかもしれないが、魔王のほうは楽しくて笑っているようにしか見えなかった。

ディアヴロは、走れないレムを背にかばっているので動けない。  
シエラたちがやってきた。

「ふああああ！ 魔族が！ どかんって！」

「あははは、どかん！」

涙目のシェラが意味不明な言葉を口走り、クレブスクルムが笑い声をあげた。ディアヴロは彼女たちも背後へ下がらせる。

「任せておくがいい。おい、アリシアよ！」

「は、はい！」

もう落ちこんだ表情はしていなかった。いつものアリシアだ。すでに剣は抜いている。

——大丈夫そうだな。

「レムたちを守れ。近づける気はないが……あれは最強の魔族らしいからな」

「は、はい！」

+

エデルガルトが、オウロウへ槍を突き出す。

「魔族が、魔王様に！ 刃向かうなんて……おかしい！」

オウロウが太い腕で逸らす、その表面から血が飛び散った。

「ぬっ!? なるほど……魔王様から魔力を授かった、というのは本当であつたか。し



かし、まだまだ動きが、遅オイツ！」

まっすぐに突き出された拳の三連撃が、エデルガルトの防御を突き抜ける。  
「くはっ!？」

普通、強力な打撃技を受けたなら、間合いが開くはずなのに、ただエデルガルトの体勢が崩れただけだった。

どういう理屈なのか。

敵の目の前で体勢を崩し、無防備になっってしまう。

さらなる連撃がエデルガルトに叩きこまれる。たた

——助ける義理などないが。

ディアヴロは魔術を放つ。威力は低いものの命中精度が高いやつだ。

「《ビットアロー》！」

光の矢が、梟の頭を狙って飛ぶ。

ディアヴロの魔術に反応して、オウロウが飛び退いた。エデルガルトへの追撃は防いだ。  
だが。

——チッ、当然のように魔術を避けるか。

上位の魔族になると、魔術への耐性も高くなる。それは高AGI敏捷により回避される、という理由もあるようだった。

以前、ファルトラ市領主ガルフォードと戦ったときも魔術を回避された。その経験がなかったら、少しは動揺していたかもしれない。

オウロウがこちらを睨みつける。

「半魔の人族ひとぞくごときが、魔族に刃向かうのであるか！」

ディアヴロは《天魔てんまの杖つえ》で地面を突いた。

「ククク……貴様こそ長生きしていても重要な知識が欠けているようだな？」

「わたくしが無知であるか？」

「我は魔王ディアヴロだ！ 真の魔王に刃向かうとは、この愚か者めが！」

梟ふくろうの目が丸く見開かれた。金色の眼球に黒色の瞳が浮かぶ。

「魔王、だと……？」

「一番古い魔族などといいながら、我を知らぬとは……己の無知を恥じるがいい！」

——なんて。知ってるわけないけどな。俺、ただのプレイヤーだし、魔王はロールプレイだし。

しかし、演技ロールプレイだからこそ、そんなことは考えない。

ディアヴロを知らない魔族は、無知である！ そう決めつけた。

オウロウが首をかしげる。

ぐるん、と真横まで曲げた。

「痴<sup>し</sup>れ者か。人族<sup>ひとぞく</sup>ごときが魔王を名乗るとは、その不遜<sup>ふさわ</sup>に相応<sup>ふさわ</sup>しい死を与えるのである」

「フンツ……ならば貴様には実力でわからせてやるとしよう」

「魔王だと名乗るならば、なぜ人族<sup>ひとぞく</sup>と行動する？ 出来損ないの魔王を守る？」

「これらは、我の所有物だからだ。傷をつけようとする者は誰であろうと殲滅<sup>せんめつ</sup>してくれる。それだけのこと！」

アリシアは所有物ではなく仲間だし、クレブスクラムたちは仲間とすら言えないが、いちいち魔族に経緯を説明するなんて面倒だから断言した。

打撃を受けたダメージから回復したらしく、エデルガルトが槍<sup>やり</sup>を構える。

「エデルガルトは、あなたの物と、違う？ 違う！ 魔王様、に、仕える！」

「フンツ……そのクレブスクラムがビスケットの虜ではないか」

「むう」

「俺に任せておけ。この筋肉梟は、俺が倒す」

《天魔の杖》をオウロウへと向ける。

「《フレアバースト》ッ!!」



いきなり、相手の眼前で爆発を起こす。

まずは小手調べの一撃だ。

《フレアバースト》はレベル99以下で覚えられるなかでは最上級の魔術だが、逆に言えば、限界突破以前のものでしかない。

ディアヴロの使える魔術のなかでは、それほど強いものではなかった。

しかし、MP消費を抑えられるし、発生が速い。<sup>精神力</sup>なににより周囲への影響が小さかった。

周りに仲間がいるので重要だ。

範囲が限定的といっても、先ほどの《ビットアロー》よりは広いし、発生までの速度も段違いに速かった。

——さすがに回避はできないはず！

爆炎のなかから、オウロウが飛び出してくる。

「どおおおおおおお——ッ!!」

皮膚もシャツも焼けてはいるが、その動きに衰えはなかった。

ディアヴロは驚愕に表情を歪める。<sup>きょうがく</sup>  
<sup>ゆが</sup>

そして、オウロウが目前の地面に踏みこんできた瞬間——

《スーパーマイン》が発動した。

足元に仕掛けておく魔術で、接近戦を仕掛けてくる相手に効果的である。爆発がオウロウを襲う。

つまり、ディアヴロが驚いたような顔をしたのは演技ロールプレイだった。毘わながないと思わせるためだ。

オウロウの身体が表面が焼け、爆圧に脚が歪む。

それでも、拳を突き出してきた。

「まだッまだァ!!」

「頑丈なヤツめ……ッ!!」

さすがに意表を突かれた。

しかし、ディアヴロとて無数の戦いを経験してきている。

驚くより先に、地面を蹴って間合いを取っていた。

拳が届かないところまで――

オウロウが叫ぶ。

「《クオーツランス》ッ!!」

相手のごつごつした拳から、半透明な水晶が鋭利な槍やりとなつて発生する。

――こいつも《殴り魔術師》だったのか!

しかし、ディアヴロには《魔王の指輪》がある。

いつもどおり相手の魔術を反射した。

奥の手を返すと、オウロウの胸の左側に、水晶の槍が突き刺さる。

「ごほっ!？」

頑強そうな魔族だが、さすがに動きを止めた。

ディアヴロは再び間合いを取る。

エデルガルトが横に並んだ。驚いた顔をしている。

「今のは……なに!？」

理解できないのも当然だろう。攻撃魔術に耐えて突っこんできたオウロウが、突然爆発し、しかも自身の放った魔術《クオーツランス》を反射されてダメージを受けたのだから。

フツ……とディアヴロは唇の端を歪める。ゆが

「魔王の力だ!」

おお、と彼女が目を見張った。

ぶすぶすと煙をあげているオウロウが目ですがめる。

「……これは……まさか、わたくしの魔術を反射した……《魔術反射》だといふのであ

るか? まるで《脳の魔王エンケバロウス》様のごとき?」

「ほう、一度で我が力に気づくか」



ディアヴロはゲームで、その《脳の魔王エンケバロウス》を倒したとき、報償として《魔王の指輪》を得ていた。魔術反射はその能力だ。

回復や支援系も反射してしまうので、メリットばかりではないのだが。  
オウロウがうめく。

「……まさか……こいつが本物の……？ いや、そんなはずはない……魔王様とは人族ひとぞくを滅ぼす者なのである！」

右拳を溜めはじめた。

SPが気力閃光を放つ。

発生まで時間はかかるが威力の大きい《武技》を使う気か。

「ふんっ、俺が待つてやる理由はない！ 《ライトニングバレット》！」

「今である！ やれえ——いッ!!」

オウロウが叫んだ。

——なんだ!?

ディアヴロは過酷な単独戦闘ソロプレイを続けてきた。

自分が戦い、自分を守る戦闘においては常勝無敗。自他共に認める最強のプレイヤーだ。

しかし、今は守るべき存在があった。

エデルガルトが声をあげる。

「待、てッ!!」

こちらを心配そうに見つめているクレブスクルムたち。

その背後に、魔族が現れていた。

オウロウは派閥を持っている。つまり、仲間がいるのだ。

ディアヴロは強力な魔術を放つ瞬間であり、なにを駆使しようと別の目標を攻撃するのは不可能だった。

エデルガルトが慌てて地面を蹴る、クレブスクルムたちのほうへと。

ディアヴロの魔術により、光弾が放たれた。《ライトニングバレット》がオウロウの腹部をえぐる。内側で炸裂<sup>さくれつ</sup>して、胴体の半分を吹き飛ばした。

絶命してもおかしくないダメージを受けながら――

なんとオウロウは《武技》を発動した。

しかも、駆けていくエデルガルトに向かって。

「ふうはあッ!!」

雷光を纏<sup>まと</sup>ったオウロウが、彼女に突っこんでいく。どうにか槍<sup>やり</sup>で受けるが、渴いた音

があがった。

槍が碎け散る。

「ぐッ!? つはああああ——ッ!!」

エデルガルトが吹っ飛ばされた。紫電が走り、血が舞う。

草原のうえを転がり、土煙をあげた。

オウロウは胴体の半分を失い、酷使した腕はあらぬ方向にひしゃげて、全身の表面は焼け焦げていた。

それでも、勝利を確信して堂々と立つ。

同時に——

オウロウ派の魔族が、クレブスクルムに襲いかかっていた。

おおかみ

狼の頭をして、両手は何匹もの蛇になっている化け物だ。

そいつが背後から迫っていた。

最初に気づいたシェラが悲鳴をあげる。

クレブスクルムが振り返り、ビクツと固まった。

アリシアが遅ればせながら反応したものの、もう剣を構える暇もない。

そして、レムは——クリスタルを放っていた。



「《ストーンマン》ッ!!」

巨大な石像が、魔族の前に立ちはだかる。

召喚獣だ。

クレブスクルムへと伸ばされた無数の蛇が噛<sup>か</sup>みついたのは、固い石だった。

最強の魔族であるオウロウが、魔王抹殺を任せるような魔族だ。おそらく相応に強いのだろう。

レムの喚<sup>よ</sup>んだ召喚獣は、無数の蛇に碎き散らされる。

しかし、それだけの時間があれば充分だった。

アリシアとシェラが手を引いて、魔族からクレブスクルムを引き離す。

レムも充分に離れている。

ディアヴロは極大魔術を放ち、不意打ちをした狼<sup>おおかみあたま</sup>頭の魔族を消し飛ばすのだった。

+

オウロウが胴体を半分失った姿から、元の巨大梟<sup>ふくろう</sup>へと戻る。

「……たかが召喚獣ごときに邪魔をされるとは」

驚いたことに、巨大梟に傷は見当たらなかった。もしかすると、ダメージとしては残っている可能性もあるが。

ディアヴロは《天魔の杖》<sup>てんまつえ</sup>を向けた。

「部下に騙し討ち<sup>だましう</sup>をさせたか……偉そうなことを言ってたわりに、ずいぶん姑息<sup>こそく</sup>な真似をするではないか？」

「……汝<sup>なんじ</sup>がいなければ、端から潰して終わっていたのである。なんという魔力……ただの人族<sup>ひとぞく</sup>とは思えぬ」

「我は魔王だと言ったぞ。無知なだけかと思ったが、毫碌<sup>もうろく</sup>していたか？」

「ありえぬ。だが、この強さは尋常ではない。わからぬ……わからぬ……わからぬ……」

巨大梟となったオウロウが羽ばたく。

ごうごうと砂埃<sup>すなぼこり</sup>を巻きあげつつ浮かびあがった。

——逃げるか。

魔術を放って追撃してもいいが……

ちらり、と周りを見る。

正直、魔術以外で範囲攻撃をされたら、レムの召喚獣を盾にするくらいしか彼女たちを守る手段がなかった。

しかも撃破された直後だから一番巨体の《ストーンマン》は、しばらく使えない。エデルガルトも重傷のようだ。ようやく身体を起こしたところだった。

撤退していく相手をわざわざ追い詰めて反撃を誘う必要はない。こちらは誰も失わなければ、それでよかった。

ディアヴロは杖を下ろす。

「ふんっ……興が醒めた。逃げる者などどうでもいい」

口では強気なことを言っておいた。

オウロウに弱味を見せるのは得策とは思えないからだ。

しかし、魔王ロールプレイなんてしていても、本気の殺し合いなんて本当はやりたくなかった。

いくら自分に知識や能力があっても、智恵ちえのある敵との戦闘は危険だ。まして狙われているのがディアヴロ自身ではなく仲間のほうだと、守る手段は極めて限られる。

オウロウが飛び去った。

周りが静かになる。

「シエラ、他に魔族はいそうか？」

「う、ううん……たぶん、いないと思うよ？ さっきは気づくのが遅れたけど」



「この調子だと、もう一派のほうも来るかもしれん。注意しておけ」

「わかった」

シエラが不安げにクレブスクルの手を、ぎゅつと握った。

命を狙われた幼女の魔王のほうは、今の戦闘でも恐怖心は抱かなかつたらしい。平気そうな顔をしていた。

「先ほど、マオーを守ったのは、もしかしてキサマか？」

「え？ それは……そういうことになるでしょうか」

レムがうなずいた。

召喚獣で、おおかみあたま狼頭の魔族からの攻撃を防いだことを言っているのだろう。

「よい働きなのだ。褒めてやろう」

「……わたしは、どうして、あなたを守ったのでしょうか？」

「なんじゃ。褒めてやったのだから、素直に頭を下げるがよいのだ」

偉そうに言っていると、シエラがたしなめる。

「違うよ。そういうときは、ありがとう」って言うの」

「ビスケットがないのか？」

「嬉しいうれことがあつたら、言うんだよ」

「人族はわけがわからないのだ。まあよい、言葉は相手に合わせてやらねば発する意味ひとぞく

がないからな」

「えらい、えらい」

その様子をレムが見つめて、複雑そうな表情を浮かべていた。

彼女はクレブスクルムを倒すことを目標としていた。

人族を殺さない、と約束したとはいえ、魔王としての記憶が戻ったらどうなるかはわからない。

それでもレムは咄嗟にかばった。

どうしてなのか？ 答えを出せずにいる。

アリシアが微笑んだ。

「レム様が心から、みんなを守りたいと思っていたから、自然と動けたのでしよう」

「……そう、かもしれませんね」

「さすが、冒険者は場数が違いますね。わたくしは肝心なときに身体がすくんでしまいました」

「……わたしだって。戦ったのは召喚獣です」

レムとアリシアは落ち着いた様子だった。

ディアヴロは、エデルガルトのほうに目を向ける。

「生きているか？」

「問題くはない。へいき」

仲よさそうにしている魔王たちを眺めて、彼女はため息をついた。

「……魔王様がく、たぶらかされた」

「俺のせいではないぞ？」

「わかつ、てる。でも、納得はくできない？ 人族を端からく、殺して……魔王様を城

に連れ帰るく……ことができないのは、あなたのせい？」

考えていることは、オウロウと大差なかった。自分の実力と状況を考えて、戦いを自制するくらいの冷静さは持っているようだが。

「エデルガルトはく、魔王様を守りたい。でも、人族の街に行くならく、近づけない」

「そうだな」

クレブスクルムだけであれば、尻尾を隠せばなんとかなるだろう。できれば角も隠したほうがいいか。

エデルガルトは美しいが、人族にはありえない爬虫類はちゆうるいのような瞳と、よく見れば鱗うろこの浮かぶ肌を持っていた。人族の街に近づけば、魔族だと気づかれるだろう。

エデルガルトが再びひたひた跪く。

「魔王様……エデルガルトはく、街まで、行けません？ 森におりますのでく、いつでもお呼びください」



「うむ、ご苦勞であつたのだ」

「いつか、どうか魔王城へ……全ての魔族の、望みです」

「城には、先ほどのオウロウという魔族もおるのではないか？」

「そ、それは……」

「マオーは街でビスケットを食べる使命があるのだ。邪魔をしてはならぬ」

「……わかり、ました。魔王様の御意志で、あれば！」

エデルガルトが深々と礼をした。重そうに腰を上げると、とぼとぼと森へ去っていく。

哀愁漂う後ろ姿に同情心を覚えるものの、彼女は街に入れない。

それに、隙あらば、周りの人族たちを殺してクレブスクルムを魔王城に連れ帰ろう。

と考えているようなので、近くに置くのは不安だった。

相容れないのは仕方がない。

ディアヴロは街へと歩きだす。レムがついてきた。

「もう平気か？」

「……魔族に襲われたら、腰が抜けたなどと言っていられなくなりました。それより、ディアヴロはすさまじいですね。オウロウは最強の魔族だという話でしたが……」

「想像以上に頑強だったな。智恵ちえもある。あれが魔王から魔力をもらっていたら苦戦しただろう」

隣に並んで、アリシアが苦笑する。

「それでも〴〵敗北〴〵ではなく〴〵苦戦〴〵なのですね」

「当然だ。我は異世界の魔王なのだからな。魔族などに負けはせぬ」  
シエラが、クレブスクルムと手をつないで歩く。

「ビスケットの歌♪」

「なんだそれは!？」

「夜の森を一人で歩くときはね、歌うと恐くないんだ。そんで、みんなで歌うと楽しいの。ビスケットのビ〜は、ビツクリのビ〜♪ ス〜はステキのス〜♪」

「ビ、ビ〜は！ ビ〜！」

クレブスクルムが大声をあげて笑った。

《星降ほしふりの塔》を後にする。

### 第三章 カフェ 珈琲店に行ってみる

ウルグ橋砦きょうしやうさいを通るのは深夜になった。

橋砦ほしふりでも《星降の塔》で発生した光翼は見えたらしい。しかも、魔術の爆発音まで聞こえたとかで、いろいろと質問された。

ディアヴロは「モンスターが出たから魔術で撃退した」とだけ答えた。

とりで砦の者たちは、魔族一〇〇体が攻めてきたときにディアヴロが助けている。そのため、やたら信頼されていて、通行を邪魔されることはなかった。

ファルトラ市の城壁が見えてきた。

城門にも番兵がおり、もしクレブスクルムが調べられたら大変なことになる。

エルフっぽい耳や紫色の瞳は、まだ亜人だからと誤魔化ごまかせる。

しかし、尻尾と角は目立つ。

今はアリシアのマントを借りて、ローブのように被って外見を隠していた。

「むむむ……どうして、マオーがこんな格好をせねばならぬのだ？」

「見つかったら、入れないからだよ」

シエラの説明に、クレブスクルムは渋々うなずく。



レムが不安そうだった。

「……アリシアがいるから大丈夫だとは思いますが」

「お任せください」

彼女が微笑む。

国家騎士であるアリシアがいれば、おそらく番兵たちは顔パスだろう。

ディアヴロにできることは、魔王らしく堂々としつつも、番兵に目を付けられないよう気配を消すことだけだった。

アリシアが提案する。

「あの……クレブスクルム様についてですが、城門では気をつけるとしても、街中で名前を呼んでしまうと、少々問題になるのではないでしょうか？」

おそらく、少々どころではなく問題になるだろう。

クレブスクルムは人族ひとぞくなら誰でも知っているような魔王の名前だ。

レムがうなずいた。

「……その名を人族ひとぞくに命名しようとしたら、教会に通報されて警吏を呼ばれますからね」

「ほう、そうなのか」

ディアヴロは考える。

もしかしたら、ゲームのほうでも入力不可能だったのかもしれない。

シエラ・L・グリーンウツドの苗字も、プレイヤーキャラクター名にできない仕様だった。

シエラが挙手する。

「クルムちゃんなんて、どうかな!？」

——クレブスクルムだから、クルムか。安直だな。でもクレブよりはマシか。

レムが肩をすくめる。

「……まったく関係ない名前よりは、言い間違えたときに誤魔化しやすいかもしれない」

「わたくしは皆様の意見を尊重いたします」

「好きにするがいい」

ディアヴロは鷹揚おうようにうなずいた。実のところ、命名には自信がなかった。提案して拒否されたら格好悪い。

シエラが一人で拍手する。

「はい！　じゃあ、これからは『クルムちゃん』ね？」

「ふむ、マオーはマオーなのだが、ビスケットの前には、キサマらの呼び方などささい

なことなのだ。許す」

「えへへ、クルムちゃん！ よろしくね！」

「うむ！」

「なんか妹ができたみたい。あたし、妹がほしかったんだあ。エルフってなかなか子供が生まれないんだよね」

話しているうちに城門が近づいてきた。

クレブスクルの歩幅に合わせていたせいで、もう朝日が出ている。

夜明け前に着くどころか、朝市がたっている時間だった。

城門をくぐる。

予定外が続いた《星降の塔》<sup>ほしふり</sup>とは逆に、眠気と戦う必要があるほど波乱なく、ディア

ヴロたちは宿屋《安心亭・夕暮れ店》に戻ってきた。

+

宿屋の大部屋――

中央に三人用の大きなベッドがあるだけの殺風景な部屋だ。



ディアヴロは今すぐ寝たいくらいだった。

それほど魔術は使っていないがMP<sup>精神力</sup>を消費しているのは確かだ。緊張を強いられる場面が続いたので神経が疲れていた。

しかし、ベッドに直行とはいかない。

レムが尋ねてくる。

「……クルムは、どこで寝かせるのですか？」

シエラが不思議そうに首をかしげた。

「ここでいいんじゃないの？」

ばふばふ、とベッドを叩く<sup>たた</sup>。

藁<sup>わら</sup>にシーツをかけただけの簡素なベッドだが、大きさは充分だ。

大人四人は難しいが、三人と子供一人くらいなら、なんとかなるだろう。

レムがクルムに視線を向ける。

「……魔王がこんな宿屋のベッドで？ あ、いえ……ディアヴロも魔王なのですが」

その言葉を聞いて、クルムがこちらを見上げた。

「ほう、キサマもここに寝ているのか」

——金がないからね。

などと答えるわけにはいかない。

ディアヴロは鼻で笑った。

「偉そうな場所に寝ていれば偉い……などと勘違いするような愚物ぐぶつではないのでな。人ひと族ぞくの王侯貴族は住处すみかや調度に金を使う。実に下らぬ」

「たしかにな！」

「ふふ、そうであろう」

「寢床などどうでもいい！　ビスケツトを持ってくるのだ！」

それは一緒にしないでほしいかな、と思った。

なんにしても、貧乏な冒険者だと笑われなくて済んだ。

アリシアが感心したようにうなずく。

「たしかに、身なりや屋敷の立派さが人の価値を示すなど、下らない思いこみだと思います。さすがはディアヴロ様……物事の本質を見抜いておられます」

「う、うむ」

生真面目に受け取りすぎだ。

こてん、とシェラがベッドに倒れこむ。

「あたしも、豪華な寢床より、こっちのほうがいいな。みんなが近いから、温かく感じるよ」

「……あなたたちが気にしないのであれば……かまいませんが」

かすかにレムの肩が震えていた。

さすがに、倒すために何年も人生を懸けてきた相手と、いきなり一緒のベッドで寝るのは抵抗があるか。仕方がないな。

「レムよ、しばらくはアリシアの部屋に場所を借りよ。このベッドに四人では狭いゆえな」

「えっ？ でも……」

「慣れるまでだ」

「……………そうですね」

悩んでいる様子だったが、うなずいたレムは安堵あんどの表情を浮かべていた。

そういえば、まだ部屋の借り主の許可を取っていない。どうも、こういう段取りは苦手だ。

ディアヴロはアリシアに尋ねる。

「かまわんだろうな？」

しかも、ものすごく高圧的になってしまった。気に障らないといいのだが。アリシアが深々と礼をする。

「このようなことでお役に立てるなら、望外の喜びです。どうぞ、レム様がベッドをお使いください」



「……わたしは床でいいです。冒険者ですから慣れていきます」

「遠慮は要りません。市民を守るのは騎士の役目です」

ディアヴロは手を振って追い払う。

「ふたりともベッドで寝るのだ！ 仲良くな！」

「……うつ」

レムが赤面した。

アリシアが再び礼をする。

「ディアヴロ様のご命令とあれば」

「……すみません、アリシア」

「本当にいいのです。気にしないでください」

そんなことを言いながら、二人は大部屋から出て行つた。

「ふうふう……」

ディアヴロは《天魔の杖<sup>てんまつえ</sup>》を置き、マント《暗雲の帷<sup>あんうんとばり</sup>》を外すと、ベッドに横たわつ

た。

気が抜けたせいか、全身が重い。

シエラが顔を覗<sup>のぞ</sup>きこんできた。

「大丈夫？」

「ああ、MPを消費したが……」  
精神力

この程度なら一晩寝れば充分だろう。

魔族一〇〇体を撃退したり、エルフの軍隊と戦ったときとは違っていた。

オウロウは強敵だったが一戦しかしていない。クレブスクルムに魔力を注いだぶん  
は、もうポーションを使って回復させていた。

クルムもベッドにあがってくる。もうマントは脱いで、初めて現れたときと同じ格好  
をしていた。

「こやつは、どうかしたか？」

シエラが説明する。

「あたしたちのために戦ってくれたんだよ？　がんばったの。んで、ディアヴロは魔術  
を使うと疲れて元気がなくなっちゃうの」

「ふふん、そういうえば人族も魔族も、魔力とは使うと減るものらしいな。妙なことだ」  
ひとぞく

「クルムは違うの？」

「当然なのだ！　マオーはマオーだからな！　なんというか奥からバンバン出てく  
る！」

——なんだそれ？

《魔術反射》どころじゃないチートじゃね？

疲労のせいで半ば寝ている頭で、そんなことを思った。

魔王は長年蓄積した魔力によって強いのだと考えていたが、違うのか。むしろ、もっと別の種類の……

エンジンのような……？

いや、違うか。

元いた世界の知識で近いイメージがある、と直感的に思ったが、うまく思考がまとまらなかった。

MP消費のせいではなく、単純に眠気だろうか。精神力

徹夜のうえに、昨日は一〇時間近く歩いた。儀式や戦闘までした。ひきこもりの身体だったら死んでいる。

——早く寝たい。

シエラが衣服を脱ぎだした。

「んしょ」

「は？」

「こうすると、元気になるんだよね、ディアヴロ？」

下着姿になって、すがりついてくる。

やわらかい肉体が押しつけられた。



「なにを……!？」

「ほうほう、なるほど。人族ひとぞくというのは面白いな。そうやって魔力を与えるのか」

「魔力？　ちよつと違うかも。クルムもやってみる？　あたしのほうも元気になるんだよ？」

「なんだと!?　与えたほうまで元気に!？」

「うん！　ディアヴロも、あたしも元気になるの。ウイン・ウイン？」

——おい、やめろ。

クルムも服を脱ぎだした。

「よし、試してみるのだ」

彼女が自身の服に触れると、シユルツと服が意志を持っているかのように自ら離れた。

袖やスカートは残っているが、おヘソから上は真っ裸になる。

つるん、と起伏のない胸。

わずかにアバラが浮いている。

魔王と言っても、ほとんど人間ヒューマンと変わらなかった。いや、ディアヴロが見たことがあるのは亜人ばかりだが。

ぺったんこの胸を押しつけてくる。

「ふむふむ、こうか？」

肌が触れた。

ゾクツ、とディアヴロの背筋が震える。

——なんだ、この感触は!?

シエラやレムに触れると、やわらかくてあたたかくてドキドキする。恥ずかしいけれど、体温が上がってテンションも跳ね上がる。

しかし、クルムは違う。

「んん、こんな感じなのか？」

身体から力が抜けてしまう。動けなくなってしまった。

シエラは気づいていないのか、にこにこと笑顔のままだ。

「そうそう、こうやって押しつけると、ぐっぐつと元気になるらしいよ？」

「ふむ、たしかに、マオーも楽しくなってきたのだ！」

吸いつくような肌だった。腕に押しつけられると、電気が走った感覚がして、背筋から脳髓へと響く。

精神力  
MP回復ポーションを飲んだときに近い感覚だった。

「ううう……」

「ふふふ、どうしたのだ、うめき声などあげて？　もしかして、これがよいのか？」

ディアヴロの腕に、クルムが身体を押し当ててこすりつけてくる。

肌と肌がこすれると、普通ではない刺激となって伝わってきた。

「くっ……」

「なるほど。これは楽しいのだ」

クルムが目を細める。その蠱惑的こわくてきな表情は子供とは思えないものだった。

つつ、と指先が首筋をなでてくる。

触れられた場所が、まるで氷と火を同時に押しつけられたかのようなうだ。ビリビリと強烈な刺激を受ける。

ディアヴロは鎖で縛られているかのように動けなかった。

「ぬ、くう……」

「ふふふ、太い首に、整ったあごに、歪ゆがみのない目元……キサマは……まるで作り物のようなのだ」

「うっ、それは……」

たしかに、ディアヴロは作り物の外見だった。ゲームのアバターである。

「これがよいのだな？ ふう……ふう……」

クルムが息を弾ませた。

ディアヴロの腕に身体を押しつけて、何度も何度も上下に動いて、こすりつける。



奇妙な刺激は絶え間なく寄せる波のようだ。

こちらの息も荒くなる。

いつの間にか、シェラも同じように動いていた。顔を真っ赤にして、弾んだ呼吸を繰り返し、そのやわらかな身体をディアヴロの腕にこすりつける。

「んくっ……はあ……はあ……どう？　ディアヴロ……元気になってきた？」

「ああ、もう……」

「まだまだなのだ。もつと、もつと……」

熱に浮かされたようにクルムがしがみついてくる。

どんどん、動きが速くなる。

シェラのもらす吐息が、だんだんと甲高いものに変わっていく。同じように、クルムのほうもまた――

「ふあ！　あ……なんか……これ、すごいのだ。マオーが、なんか、ふわって……ッ」

「あッ、んッ、ああッ、なんか魔力を、流しこまれてる……みたいだよお。ディアヴロ、あたし……あたし、魔力が……ふああッ！　あふれちゃうッ！」

「くっ！」

ディアヴロは歯齧<sup>はが</sup>みした。

シェラが背筋を弓なりに反らせる。

「あッ！ んあッ！ 魔力が、あふれ……ッ……んはああああ——ッ!!」

「なんか、なんか来るのだ！ 来るのだ！ お、奥から……ッ！ ひぐううっ！」  
ビクビクッ、とクルムが身体を震わせる。

接触しているため、ディアヴロには感知することができた。

理解しがたいほど膨大な魔力が、クルムの中から湧き出してくる。これは蓄えられていた魔力などではありえない。

普通の魔術師がコップ一杯の魔力を持ち、ディアヴロが浴槽一杯の魔力を持っているとしたら、クルムのは川の流れを垣間見るかのようなだった。

——根本的に、仕組みが違う!?

膨大な魔力の<sup>ほとぼし</sup>迸りを浴びて、ディアヴロは呼吸すら苦しいほどになった。魔力で溺れる。

「お、おい……そんなに溢れ<sup>あふ</sup>させるな！」

「んッ、ふああああッ！」

ガクガク、とクルムが震えながら抱きついてくる。

そして、彼女が——

くぱっ、と口を開いた。

鋭い牙が並んでいる。

――喰<sup>く</sup>われる!?

かぷっ、とディアヴロの首筋に歯を当ててきた。

甘噛みだ。

わずかな痛痒<sup>つうよう</sup>が、感覚をより深くまで刻みこんでくる。

その直後、クルムが糸の切れた操り人形のように四肢を弛<sup>しかん</sup>緩させた。

「ふあ……」





ぐでん、と覆い被さってくる。

魔力の奔流も途絶えた。

さっきまでが嘘うそのようにディアヴロは身体が軽くなつたと感じる。

クルムだけでなくシェラまで乗っかって、気絶するように眠りこんでいるのだが……  
まるで重さを感じないほどだ。

MPは全快して、身体精神力の疲労も消えていた。

それどころか感覚は鋭敏になり、四肢に力強さが漲みなぎっている。変なクスリでも飲んだ  
かのようにだった。

もしかすると、魔王から魔力を与えられた魔族はこんな感じなのではないか。

——俺が混デイーマン魔族だからか？

わずかに混じっているという魔族の血が、魔王の魔力に反応したのかもしれない。

+

起きたのは昼過ぎだった。

昼夜逆転。

ゲーム漬けだった頃を思い出す。

「うわ……」

ほとんど裸のままのシエラとクルムが、ディアヴロに覆い被さるようにして寝ていた。

——いくら暖かい土地だからって風邪ひくぞ？

しかも、べったり濡<sup>ぬ</sup>れていた。

汗か。

「やれやれ……」

「な、なんて格好をしているのですか!？」

いきなり声が大部屋に響いた。

ドアを開けたところで立ち尽くしているのは、レムだった。目を丸くしている。

「……シエラも……クルムまで!？」

「い、いや、これはだな。ちよつと暑かったゆえ」

「暑かったから服を脱いだのなら、どうして、そんなふう<sup>ふう</sup>にへばりついているのです

!？」  
「わかりません！ まったく理解できません！」

——俺もまったくわからん。



つかつか、とレムがベッドまで近づいてきて、シエラのほっぺをつねる。

「どういうつもりですか、シエラ!？」

「うに、おひゃよ、ヒエム」

「くっ……クルムも……どうして、裸でディアヴロのうえで寝ているのですか!？」

むくりとクルムが頭をあげた。悪魔のような笑みを浮かべる。

レムが後ずさった。

「ううう……!？」

「くっくっくっ……よい日覚めなのだ。ビスケットを持ってくるがよい」

「……食堂は一階です」

「む。人族ひとぞくの街は決まり事が多いものだな。寝るのも食うのも同じトコでよかろうに」

ぶーぶー言いながらも、クルムがディアヴロから降りた。

はあ、とディアヴロは息をつく。

寝る寸前にとんでもないことをされたせいで、しばらく寝付けなかったのだ。回復は

問題ないが、妙なフワフワ感があつた。気疲れというやつか？

「おい、起きるがよい!」

ディアヴロは腕を持ち上げる。それを抱きしめるようにして寝ていたシエラが、ベッドから転がり落ちた。

「痛——ッ!？」

なんの騒ぎか、とアリシアが驚いた顔をして部屋に来る。

とにかく全員が起きたということで、ディアヴロたちは朝昼兼の食事を取るために食堂へと向かうのだった。

「ならば、この街を燃やすしかないのだ！」

《安心亭・夕暮れ店》の食堂で、物騒な宣言をしたのはクルムだった。

シエラが慌てる。

「な、なに言ってるの!？」

「だって、ビスケットがないと言ったぞ！　ビスケットがないと！」

「宿屋の食堂にはないより。えっと、《ピーター》っていうパン屋があつて、そこには売ってるよ？　クルミ入りが究極だよね」

「……《ピーター》のビスケットは美味おいしいですね。ベーコンパンが至高ですが」  
レムがうなずいた。

ディアヴロも同意する。

「あそこの焼きたてパンは、異世界から来てでも食べる価値があるな」

アリシアは護衛官のように傍らに黙って立っていた。じつ、とクルムを見つめている。

「……」

もしかすると、まだ魔王として警戒しているのかもしれない。クルムが腕組みして偉そうに言う。

「ならば、案内するがよい！」

「どうする？ あたしが買ってきてもいいけど？」

シエラが困ったように、ディアヴロに尋ねてきた。

たしかに、クレブスクルムのことは隠すべきだ。街に魔族が現れただけで大騒ぎになるのだから、魔王がいるなどと知られたら混乱の規模は想像もつかない。

だからといって、ずっとクルムを部屋に閉じこめておくのか？

それは可哀想だし、不可能だろう。

そのうち外出したいと言いだすに違いない。

都合のいいことに、クルムにある魔王としての特徴は、ローブだけでほぼ隠すことができる。温暖な土地だからフードまで被っている者は多くないが。

出発前にレムが確認する。

「……種族や関係などを聞かれたら、どうしますか？」



「尻尾を見られたらどうにもならんが、角は飾りだと言ってやれ。その耳は目立つから、エルフだと言うしかないな」

シエラが首をかしげた。

「へいき？ エルフの耳とは、ちよつと違くない？」

「細かいことは気にするな。巨乳のエルフよりは珍しくなからう」

「むー」

シエラが自分の胸を見下ろした。

あれくらい大きいと、足元が見えないというが、本当だろうか。想像もつかなかった。

アリシアが話を進める。

「その《ピーター》というお店は、どこにあるのですか？」

「南地区だよ！」

「……ひとまず、中央広場まで出ましようか」

そういうことになった。

+

東通りを中央広場へ向かって歩くと、冒険者協会の大きな建物が見えてきた。シエラが指さす。

「あ、エミールじゃない？」

あちらも気づいたようだ、やたら目立つ金ピカ鎧よろいの青年がいた。

眉が濃く意志の強そうな顔立ち、ひと房だけ垂れた前髪。精悍せいかんな顔つきで、人間ヒューマンにしては長身である。

冒険者協会が一番の戦士、エミール・ビュシエルベルジェルだった。

今日はパーティーメンバーらしき者たちと一緒にだった。

以前、誘拐されかけたシエラを助けてくれたときの白いローブ姿の少年もいる。

「エミール、ぼくらは先に行ってるよ？」

「おう！ 俺は、いつものヤツな！」

「冷めないうちに来てね？」

そう言つて、パーティーメンバーたちは冒険者協会に入っていく。

エミール一人がこちらへ来た。

「よお、親友ともよ！ 調子はどうだ？」

「べつに変わりも……いや……なかなか、悪くないぞ」

ディアヴロはレムとシエラを見る。

自分をこの世界に召喚した二人。彼女たちは問題を抱えていた。シエラは祖国に追われていたし、レムはクレブスクルの封印を抱えていることに悩んでいた。

それらが、全てではないが解決に向かいつつある。

視線に気づいて、レムが微笑む。

シエラが楽しそうな笑みを浮かべていた。

エミールが<sup>おおげさ</sup>大袈裟に両手を広げる。

「おお、美しい女性たちよ！ 元気にしてるかな？ 俺様と会えなくて寂しかったんじゃないかい？」

こいつは悪いヤツではないが、妙に女性にこだわるところが問題だった。レムがため息をつく。

「……相変わらず、必要ないときは距離を置きたくなる人ですね」

「ホント、悪い人じゃないんだけどねー。前に助けてくれたし」

シエラが苦笑した。

アリシアが丁寧にお辞儀する。

「先日はご挨拶もなしに、失礼いたしました。わたくし、国家騎士のアリシア・クリステラと申します」

シエラが<sup>さら</sup>攫われかけたとき、アリシアとエミールは顔を合わせている。あときは誘



拐犯もあり、ゆつくりと話す機会はなかった。

エミールが、キランと齒を輝かせるスマイルを見せる。

「我が名は、エミール・ビュシエルベルジェール！ 全ての女性の味方である！ なにか困ってることがあれば遠慮なく相談してくれ」

「はい、ありがとうございます」

アリシアの反応は完璧だが、それゆえにエミールの渾身の持ちネタが流されたような悲しさがあった。

苦笑いしたエミールが、ふと視線を落とした。

ローブを被ったクルムに目を留める。

「えっと……おい、親友よ？ この子は……？」

「エルフだ」

そういえば、関係は決めていなかったな。

しかし、エミールは細かいことは気にしない性格だった。

「やあ、エルフのお嬢ちゃん、君の名前はなにかな？ 俺様はエミール、全ての女性の味方だ。なにか困ったことがあったら頼るといい。いつだって助けに駆けつけるからな！」

クルムが睨みつける。

「なんだ、この馴れ馴れしいヤツは？ マオーを助けるだと？ 言うではないか、それほどの実力があるか試してやるとしよう！」

「へ？ マオー？」

「そうだ！ 我が名は――もがもが」  
後ろからシェラが両手で口を塞いだ。

「クルムちゃん！ この子は、クルムちゃん！ あたしの妹なの、よろしくね！」  
「えっ!? じゃあ、エルフの国の王女ってことか!?」

「あ……えっと……」

自分の肩書きをよく考えずに発言したようだ。

シェラは家出中とはいえ、グリーンウッド王国の王女だ。しかも兄が亡くなってしまったので、もしかすると今は第一継承権を持っている。

その妹なら、エルフの王女だろう。

レムが額に手を当てた。

「……ばかシェラ……ちよつといいですか、エミール？ わたしたちは目立つのを好みません。そして、あなたの格好と大声はとても目立ちます。理解しますか？」

「俺様の格好と声はともかく、レムちゃんたちは充分に目立ってると思うぜ？」

否定はできなかった。

角のある混魔族と、巨乳のエルフと、黒色の豹人族だ。デリーマン しかも、二人は《隷従の首輪》をつけている。

そのうえ、女の国家騎士までいる。

珍品だらけだった。道行く人たちの注目を集めてしまうのは仕方がない。

「……だとしても、立ち話をしている時間はないのです」

「なるほど。そういえば、俺様も暇ではなくてな。王都から聖騎士サドラーというヤツが来ているらしい。なにかと評判の悪いヤツだ。俺様は女性が無用な被害に遭わぬよう見張るつもりなのだが……知ってるか？」

ディアヴロはうなずいた。

「昨日、石にしてやった。もう元に戻ったのか？」

「なにイ!? もうやり合ったってのか!？」

「あのような雑魚ざこに、この俺が臆することはないが……たしかに、罪のない者に危害を加えそうなヤツではあったな」

「やれやれ……相変わらず俺様の予想を超えるよな、貴様は。まあ、その様子なら、そっちは心配なさそうだな。市民たちのことは任せてくれ。俺様が守る！」

「うむ」

エミールが肩をすくめた。



「まあ、最初から貴様が聖騎士ごときに負ける心配はしておらんがな。ただし、やりすぎるなよ？ 親友ともの手配書が張り出されるのは見たくないからな」

聖騎士を殺したりしたら、おそらく国から追われる身になるだろう。

それは避けたいところだった。

ディアヴロは鼻を鳴らす。

「刃向かう者がいれば、叩たたき潰つぶす。それだけのことだ」

「そうは言うがな……相手は教会だぞ」

アリシアが深々と頭を下げる。

「申し訳ありません。王都の有識者たちも、聖騎士の過激な行動は憂慮ゆうりよしているのですが……なにかありましたら、わたくしにも教えていただけますか？」

「ほう、事情がありそうだな」

「はい……あ、冒険者の方に頼むのですから謝礼はさせていただきます」

「いらんさ！ 美人の役に立てるならそれで充分だ。それじゃ、なにか気になることがあれば報告させてもらおう！」

ビツ、と指を振ると、エミールは冒険者協会へ入っていった。

その後、南地区に行き《ピーター》というパン屋を訪ねる。

グラスウォーカーの男三人でやっている店で、ウサギの描かれた看板がかかっていた。

クルムはビスケットをあるだけ買い、他の者も焼きたてパンを選ぶ。

店内のテーブルで食事して、ちよつと遠回りして市を見ながら宿へ戻った。

平和な一日だった。

+

翌日――

ディアヴロたちは《安心亭・夕暮れ店》で昼食をとっていた。

アリシアは国家騎士の仕事があるとかで、今日は朝から出かけている。

レムが席を立つ。

「……午後は魔術師協会へ行ってきます。一応、セレスには世話になっていますから、報告しておいたほうがいいでしょう」

「たしかにな」

「……クルムを連れて行くのは不安ですし、ひとりで行ってきます」

「許す。夕方までには戻れ」

「はい」

シエラが手を振る。

「行つてらっしゃい、セレス様によろしくね」

クルムは我関せずビスケットを食べている。と思ったのだが――  
一枚、ビスケットを差し出した。

「どこへ行くか知らぬが、腹が減ったら食べるがよいのだ！」

「……………はい」

「違うぞ。ゝありがとうゝなのだ！」

「あ……………そうでしたね。ありがとうございます」

レムは複雑な表情をしつつも、ビスケットを受け取った。

わずかに笑みを見せる。

――少しは慣れてきたのかもしれないな。

そして、彼女は出かけていった。

昼食のあと、他に客もない食堂で、シエラがクルムに歌を教えている。

この世界の歌がどういうものかは知らないが、いわゆる童謡というやつか。なぜか食べ物  
の歌ばかりだった。



シェラが入口を指さす。

「シルヴィさん！」

やたらと布の少ない服を着た女の子だった。胸元と腰しか隠していない。

赤色の髪を肩の高さで切り揃そろえている。

グラスウォーカーという種族で、頭にウサミミがあり、丸い尻尾もあった。そして幾つになっても外見が子供のまま変わらない。

シルヴィはファルトラ市冒険者協会会長をしている。それなりの年齢のはずだ。しかし、彼女は子供の外見に相応の無邪気な振る舞いを見せた。

ブンブンと元気いっぱいに腕を振る。

「や、ディアヴロさん！ みんなも、元気かな！」

そう言つて、空いている椅子に腰掛けた。

シェラが尋ねる。

「シルヴィさんもお食事ですか？」

「うん、なんかもうかな。でも、ディアヴロさんたちに会いに来たんだよ」

「……また面倒な依頼ではなからうな？」

最初の依頼は罫わなだった。

次の依頼は簡単なお使いかと思いきや、魔族一〇〇体との戦闘になった。

そして、先日は「エルフとの戦争を防いで」だった。

シルヴィが苦笑する。

「変な依頼ばかりじゃないでしょ？　ちよつと前には薬草摘みのクエストもあったし」

「ふん……」

あれも、魔族は現れ、野盗には襲われで、大変だったが。

シルヴィが、クルムのほうを見る。

「今日は依頼じゃないよ。ディアヴロさんのところに、新しい女の子が入ったって聞いたから、どんな子かと思ってね？」

「エミールから聞いたわけか」

「そうそう。クルムちゃんだっけ？」

クルムはビスケットを頬張<sup>ほおば</sup>っていた。ちゃんとオムレツも食べさせたが、だいたい暇さえあればビスケットをかじっている。

「にゃんにゃによだ？」

シエラが苦笑しつつ、クルムの口元をハンカチでぬぐった。

「食べながらしゃべらないの。はい、飲みこんで……ああもう、こんなにこぼして……かわいいんだから！」

本当に妹ができたような気分でのだろう。顔がいちいち緩んでいて幸せそうだった

た。

シルヴィが笑みを浮かべて眺めている。

「……普通の子供みたいだね」

相変わらず、油断できないヤツだ。

にこにこ笑いながら、探っているわけか。

「どこまで知っている？」

シルヴィを敵に回すのは得策ではない。できれば味方につけておきたいが……

彼女は肩をすくめた。

「なにも？　ただ、心配になって来ただけだよ。ディアヴロさん、子供にも容赦ないイメージがあるから」

ジト目で見られた。

ふと先日のことを思い出す。

MP回復ポーションの代わりに、とシルヴィが持ってきた酒を飲み、前後不覚になつてしまったのだ。

そのとき、シルヴィになにかしたらしい。

——まったく覚えてないんだよなあ。

レムとシェラが大部屋に戻ってきたときには、いなくなっていて——



ディアヴロが酒瓶とシルヴィの服の一部を掴<sup>つか</sup>んでいたのだった。  
なにかしてしまっただろうな。

しかし、魔王が「酔っ払って子供に手を出した」などと思われるのは問題なので、知らない振りをしておいた。

「我は子供などに興味はない。魔王であるからな、うむうむ」

「まあ、そういうことにしておくけどー」



微妙にシルヴィの声が冷たかった。

逆に温かみのある雰囲気で、クルムに声をかける。

「困ったことがあったら、ボクにも相談してね？ 冒険者協会はわかるかな？」

「ふむ、キサマもマオーに仕えたいというわけか、ひとぞく人族にもわかっている者がいるではないか」

「マオー？」

「これをくれてやろう！」

クルムが偉そうに胸を張って、手を突きだす。

差し出されたのは、ビスケットだった。

ああ、とシルヴィが苦笑する。

「ディアヴロさんのところの子だねえ。ありがとう」

彼女は受け取ったそれを口に放りこんだ。

「これは『ピーター』のかな？ 美味しいねー」

+

一週間後――



教会の鐘が三回鳴って、午後三時であることを告げた。

ディアヴロたちは珈琲店<sup>カフェ</sup>へ向かっている。

「……すみません、わざわざ足を運んでもらって」

中央地区への門をくぐったところで、改めてレムが言葉を重ねた。

シエラが弾んだ声をあげる。

「いいじゃん！ あたし、珈琲店に行くの、すっごく楽しみにしてたよ！」

「……たしかに、前に約束していましたね」

アリシアが尋ねる。

「シエラ様は珈琲店が好きなのですか？」

「えへへ、どんなものか聞いたことしかないんだけどね。いつか珈琲店をやりたいって思ってるんだあ。レムが珈琲<sup>コーヒー</sup>をお客さんに運ぶ人で、ディアヴロがコップを拭く人」

いつの間にかコップを拭くことになっていた。

レムが肩をすくめる。

「……まだ、将来のことまでは約束していません。まあ、珈琲店に連れて行くという約束はしていましたね。ただ、こんな形になるとは思っていませんでした」

「気にすることないよ？ あたしは珈琲店に行ければ嬉しい<sup>うれ</sup>いから」  
アリシアがうなずく。

「今回のこと、必要な段取りかと思えます。レム様が気に病むことではないでしょう」  
「……そうでしょうか」

目的地は中央地区にある珈琲店<sup>カフェ</sup>。

そこには、魔術師協会の会長であるセレスティーン・ボードレールが待っている。一連のことを報告したレムに対して、セレスが「ぜひ会わせてほしい」と言いだしたからだ。

そんなわけで、クルムも同行していた。

シエラが手を引いている。

ディアヴロは列の一番後ろから、女たちを眺めていた。大勢の会話に入っていくのは苦手だ。

レムは不安がっている。

「魔術師協会に連れて行くのは難しいと言ったら、珈琲店を指定されて」  
アリシアがうなずく。

「妥当だと思います。相手がクルム様に危害を加えようと考えたとき、魔術師協会内では抵抗も難しいでしょう」

「……セレスは魔王の魂が封印されているのを知っていながら、わたしに自由を許してくれました。今さら、そんな心配はないと思いたいですが」

「人の本心は誰にもわからないものです」

「……今回は、もうひとつの心配のほうが……いえ、ディアヴロがいれば大丈夫だと思いますが」

「なるほど」

彼女たちが言葉を濁したのは、クルムがいるからだった。

つまり、急にクルムが魔王として覚醒し、セレスを襲った場合を心配しているのだろう。

そのときは、ディアヴロが防いでくれると期待されているようだ。

なにが起きてもいいように準備はしてあるが、ここ数日のクルムを見ると、そんな心配は杞憂きゆうだろうと思われた。

——こいつ、たんなるゝ食っちゃ寝ゝだぞ。

ビスケットが好きなだけの幼児そのものだった。

シエラは幼稚園の先生みたいになって、連日のように歌を教え、オモチャを作っている。

打ち解けきっていた。

心配すべきは、ビスケット代が馬鹿にならないことか。

このパーティーの所持金が尽きたときが、世界に魔王が降臨するときではないか、と



思うくらいだった。

中央地区は石壁に仕切られている。

前に領主の館へ行くときも、この門を通った。

ひともんちやく

あときは門番と一悶着あったが、今回は国家騎士のアリシアがいるので顔パスだ。

足元が石畳からタイル張りに変わる。

れんがづく

建物も石造りではなく煉瓦造りの屋敷がならび、富裕層の住んでいる街であることを

これでもかと示していた。

そこらじゅうに治安維持のための見張りが立っている。

何度か角を曲がった先に、小洒落た造りの店を発見した。こじやれ

シエラが感嘆の声をあげる。

「うわあ……これが、珈琲店だよね!？」カフェ

基本は煉瓦の建物だが、木組みで庇が作られている。ひさし鉄の看板が入口にかかっている。  
た。

なにより、扉にガラスが嵌まっている。は

ガラスのついた扉なんて、こちらの世界に来てから初めて見た。  
レムが紹介する。

「……これは、王都の建物と同じ造りだそうです。もうセレスが来てるかも。入りましようか」

ドアを引き開けた。

珈琲コーヒーの香りが漂ってくる。

この世界に来て、何度か珈琲を飲んだことがあるが、それらとは違う香りのように思えた。

シエラがクルムの手を引いて、きよろきよろしながら入る。

「わあ！　すごい！　なんか、すごい！」

「ふむ、よくわからんが……ここに、本当に美味うまいビスケットがあるのだな？」

「あるよ。スコーンっていうんだって。王都の珈琲店に行っただっていう子が自慢してたよ」

アリシアが何か言いたそうな顔をしていたが、黙っていた。

よく考えると、彼女は王都に住んでいる。しかも公爵家令嬢だ。おそらく珈琲店くらいは行ったことがあるだろう。

ディアヴロも召喚される前の世界で、ある程度の知識は得ていた。

——スコーンはビスケットじゃないよなあ？

店内には五つのカウンター席と、二つの四人席があった。

さほど広くはない。

できたばかりということもあって、店内はどこもピカピカで新しくて綺麗きれいだった。かなりの高級店という話は聞いていたが、元いた世界の店と比較しても高級感に満ちている。

——やばい。緊張してきた。よく考えたら、俺、高級喫茶なんてリア充空間に入ったことがない。

これ、三〇〇円でプラスチックや紙のカップに甘い珈琲コーヒーが出てくる系の店とは違うやつだ。

店には客が一人しかない。

椅子に腰掛けたまま、こちらに笑みを浮かべた。

顔立ちは優しげで、豊満な体つきを長いローブで包んでいる。

壁には長杖スタッフが立てかけてあり、彼女が魔術師であることを物語っていた。待ち合わせの相手——セレスティヌ・ボードレールだ。

「あらあら、いらっしやい……って店員さんがいるのに私が言うのも妙な感じね？」  
レムが会釈した。

「……待たせてしまいましたか？」



「実は、楽しみにしすぎて、だいぶ早く来ちゃったの。でも、この店にして正解。どれだけ待ってても飽きなかったわ。実は私も珈琲店カフェに来てみたかったのよ？」

子供っぽい笑みを浮かべた。

シエラが身を乗り出す。

「わ、わたしも！ 珈琲店、すっごく楽しみでした！」

「あらあ、じゃあ、私と同じなのね。王都と同じ味の珈琲を飲めるなんて素敵よね——あ、その子かしら？」

正体を知っているはずなのに、セレスの表情は穏やかだった。

クルムと見つめ合う。

「キサマは何者なのだ？」

「はじめまして、セレスといいます。この街の魔術師協会の長をやらせてもらってるわ」

「ほう、なるほど。街の結界を維持しているのは、キサマか」

クルムが視線を巡らせる。どうやら彼女には結界に使われる魔力の流れが見えているようだ。

レムがわずかに緊張して顔をこわばらせた。

セレスが微笑む。

「そうよ、責任重大なの。だから、一人でここに来るのは大変だったわ。でも、よかった……だって、とってもかわいらしいもの。会えてよかったわ」

「マオーはビスケットを食べに來ただけなのだ！」

「そうなの？ とっても美味しいわよ。座ってちょうだい」

「うむ！」

クルムが腰掛け、自動的に隣がシェラの席に決まる。彼女は保護者のようなものだ。その流れでレムが残った席に座る。

四人席なので無理に一つのテーブルに集まらず、ディアヴロとアリシアは隣の席を使うことにした。

アリシアとふたりきり。

さらに緊張が高まってしまう。

——こんなリア充喫茶で、こんな美人と向き合うことが、俺の人生に起きるなんて。ディアヴロは内心のドキドキを悟られぬよう、ことさら堂々と振る舞う。

「なんでも頼むがよい」

「ありがとうございます、ディアヴロ様。でも大丈夫でしょうか？」

アリシアがテーブルにあるメニューを指さした。

ちなみに《安心亭》で珈琲を飲むと一杯二〇〇Fだ。他の店でも三〇〇Fは超えな

コーヒー

フリス

い。

この高級店は……

珈琲一杯、三〇〇〇Fだった。

——はああああ!? ゼロ三つ!?

思わず声が出るところだ。

安心亭の一泊（朝食とベッドの一人分）にも匹敵する金額だった。

——こんなところを待ち合わせに指定するとは！ セレスめ、こちらを破産させる気か、鬼め！ 魔女め！

その悪<sup>あ</sup>しき女が、ニツコリと笑みを浮かべる。

「ここは私が払いますから、好きなものを注文してくださいね？」

「なんだ、女神か」

ディアヴロのつぶやきは幸い誰にも聞きとがめられなかった。

出された珈琲は、いつも飲んでいるのとは別物だった。

酸味は強めだが苦味に対するアクセントになっていて飲みやすい。意外にも連想するのはオレンジジュースだった。砂糖とは違う甘みがたしかに存在している。

——すげえ！ この味なら都内で出しても通用するだろ！

クルムは珈琲は苦くてダメだったようだが、なんとココアとスコーンが出てきて、ず



いぶん喜んでいた。

「甘い！ 美味<sup>おい</sup>しい！ 美味<sup>おい</sup>しいぞ、この泥水とビスケットは美味<sup>うま</sup>いのだ！」

どうやら、おやつ的なものは全てビスケットらしい。

「クルムちゃんに気に入ってもらえてよかったわ」

「うむ、褒めてやろう！ いつもビスケットもいいが、ここのビスケットも美味かったのだ！」

「うふふ……おかわりも、どうぞ？」

ずいぶんと楽しんだ様子だった。

帰るときに――

シエラとクルムとアリシアは先に店を出てもらった。

会計を済ませるわずかな時間だけ、ディアヴロとレムとセレスは言葉を交わす。店員にも聞こえないよう、声をひそめて。

「セレスよ、事情はレムから聞いているな？ クルムは記憶を失っているが……魔王だ。貴様はどうするつもりか？」

魔術師協会は敵に回したくない。

しかし、彼女には人<sup>ひと</sup>族<sup>ぞく</sup>を守る義務があるのも確かだった。

どう動くのか？

「ふふ……あんな魔王はいないと思うの。人族を殺さず、おやつが好きだなんて。そんなの魔王じゃないでしょう？」

セレスの楽しげな笑みは陰ることがなかった。

レムが心配そうに尋ねる。

「……わたしたちは、そう言ってもらえると助かりますが……セレスは大丈夫なのか？ 処罰されたりは？」

「貴女あなたのときと同じね。事が公になればわからないわ。でも、私はね……その必要がないのに縛りつけて自由を奪うようなことは、やだなあつて思うのよ？」

セレスはファルトラ市の結界を発生させる鍵となっている。この街から出ることはできない。

本人が選んだことではあるが、自由を失っている立場ではある。

だからこそ、彼女の言葉は信じられるものだった。

十

中央地区の南門から、広場のほうへ出る。

こちらのほうが近道だろう、とアリシアが言ったからだが……

露店がならんで、買い物客でごったがえしていた。富裕層の住む中央地区と違って、こちらはまさに庶民の街という感じだ。

「すみません、こんなに混んでるとは……」

アリシアが申し訳なさそうに言った。

仕方がないだろう、市場が混んでいちばいるのは彼女のせいではない。

普段はディアヴロの外見のせいで、道行く人たちが距離を置くのだが、ここまで大勢いるとそうもいかなかった。みんなが買い物に夢中だから、ぶつかっても気づかないような者も多い。

面と向かい合わなければ、魔王もなにもなかった。

クルムが人混みに苛立いらだちはじめる。

「ええい、燃やすか！」

「メ！」

シエラが言っただけで聞かせた。

たしかに、燃やすわけにはいかないが……その気持ちかわかるくらい人混みを縫って歩くのは大変だ。

アリシアがクルムに手を伸ばす。



「はぐれないよう、手をつなぎましょう。いつもシェラ様に任せきりですから、ここはわたくしが」

「ふむ？ 仕方がないな。では、キサマがはぐれないよう、マオーの手をしっかり握っておくがよいのだ」

迷子を心配されているのはクルムのほうだと思うが……

ディアヴロは西通りのほうへと歩きだす。連れがはぐれないか心配する魔王というのは、ちよつと違うかな、と思うのだ。

レムが後ろを気にしていた。

シェラが隣にならんで、腕を掴つかんでくる。

「待ってよー」

「ふんっ、どうせ目的地は宿屋だ。はぐれても問題あるまい？」

「そうだけど、みんなで歩いたほうが楽しいよ」

「好きにするがいい」

「うん！」

最近妹の面倒をみる姉のような様子だったシェラだが、もともと子供っぽいところがある少女だ。

ディアヴロの腕に抱きついてくる。

ひさしぶりに、ぎゅう、とやわらかいものを押しつけられて、ディアヴロは動揺を顔に出さないよう苦勞した。

先頭はディアヴロとシエラで、レムが続き、その後ろがアリシアとクルムだ。

——なんだか、RPGのパーティーメンバーみたいだ。先頭にいるのは勇者じゃなくて魔王だけだ。

魔王・召喚術士・召喚術士兼弓使い・騎士・魔王……ずいぶん偏った編成だった。いくら歩いて混雑を抜けたとき、シエラが声をあげる。

「みんながいないよ!？」

はぐれてしまったのか。

レムとアリシアとクルムの姿がなかった。

この場合、少ないのは自分たちだから、こっちははぐれたことになるのか？

しかし、先頭は自分たちだったわけで……

——歩くのが速すぎたのか？ 集団行動で先頭を歩いたことなんかないから、わからなかったぞ。

レムやアリシアなら、はぐれても宿に向かうだろう、と考えた。

妙な胸騒ぎがする。

足早に《安心亭・夕暮れ店》へと戻った。

レムとアリシアとクルムは帰ってきていない。しばらく待つことにした。

二〇分くらいは待っただろうか――

近所の教会から、午後五時の鐘が聞こえてくる。

先に耐えきれなくなったのは、シェラだった。

「あたし、戻ってみるよ！　もしかしたら中央広場で、あたしたちを捜してるかも！

ディアヴロは待ってて。行き違いになっちゃうかもしれないから」

「うむ」

こんな状況だと、魔王ロールプレイに徹することもできない。

クルムは魔王だが、子供だ。

レムやアリシアと一緒になら大丈夫だとは思いますが……

いや、一緒ならもう帰ってきているか？　完全にはぐれて一人迷子になっている可能

性のほうが高かった。

そして、責任感の強いアリシアは一人で捜し回っている？　レムはどうしているか？



あれこれと考えているうちに、シェラは中央広場のほうへ駆けだしていた。

「早く見つけないとね！」

時間が経てば、買い物客は減ってくる。そのぶん迷子も見つけやすいだろう。しかし、嫌な感じは収まらなかった。

杞憂きゆうであればいいが、待っているだけというのは落ち着かない。

ディアヴロは宿屋の看板娘に声をかける。

「おい、レムかアリシアかクルムが帰って来たら部屋で待っているよう伝えるのだ。決して外に出ないように、と」

「いいよ。メイちゃんにおまかせだぞ☆」

いつもの口調だったが、やや真剣味を感じさせるものだった。

ディアヴロは広場に向かう。

しかし、搜索者がシェラ一人から二人になったところで、そう意味はない。

探すならば、もっと人手が必要だった。

考えながら歩いていると、西通りにある大きな建物が目に入る。

「そうか……」

冒険者協会があった。

## 第四章 レムの話

教会の鐘が五つ鳴るよりも前――

ディアヴロたちと中央広場ではぐれた直後のこと。

レムは建物と建物の間の、路地裏にいた。

「……どういふつもりですか？」

二人を追いかけて、何度か見失いかけつつも、ようやく追いついたのだ。

にぎやかな中央広場と違って、ここは薄暗くてゴミが散乱しているような場所だった。

家から出たゴミを路地裏に捨てて、そのままになっている。

空気が乾いているせいで、異臭はそれほどでもないが、好んで訪れたい場所ではなかった。

その路地裏の先に、アリシアが立っている。

彼女はクルムの手を引いていた。

クルムのほうは、どうしてこんな場所に連れてこられたのか、全く理解していない様子だ。ビスケットをほおば頬張っていた。

「ん？ キサマ、どうかしたのか？」

「……えっと、こんな場所に、あなたを連れてきた理由がわからないのです。アリシア、どうしてなのですか？」

アリシアが薄笑いを浮かべていた。

「本当はクルム様だけを連れて行って、あとからシェラ様を呼びだすつもりだったのですが……まあ、レム様と一緒にでもいいかもしれませんね。なにが鍵になるかわかりませんから」

普段のアリシアと気配が違う。

レムは警戒をして、クリスタルを入れた革ベルトのポケットに手を伸ばす。いつでも召喚獣を喚び出せるように身構えた。

「……なんの話ですか？」

「クルム様はどうして記憶を失っているのでしょうか？ 魔族の司祭様の話では、魔王様の復活に必要なのは魔力だけではないから……というのです」

「……魔族の司祭？」

そういえば、エデルガルトが智恵ちえを借りている相手として、挙げていたのを思い出す。

緊張感が増した。



「ええ、あのあと……街の外に出て、エデルガルト様に話を聞いたのです。どうしたら魔王様が記憶を取り戻して、完全に、覚醒するのか」

「なにを言っているのですか、アリシア!？」

「魔王様が記憶を失っていないければ、もっと早く本当のことが言えたのですけれど……」

「……アリシア、あなたは人族を殺すような魔王が復活することを望んでいてもいいのですか？」

「そう言っていないませんか、わたくしは？」

レムは声が震えてしまう。

「……アリシア……あなた……それでは……まるで魔王崇拝者ではありませんか!？」

「ええ、そういうことになるのでしょうかね」

アリシアが嬉し<sup>うれ</sup>そうに笑みを浮かべた。

これまでに見せてきた遠慮がちな笑顔とは違う晴れ晴れとした表情だ。それは本心を明かすことのできた解放感のせいなのか。

クルムが、アリシアを見上げる。

「キサマがなにを言っているのかわからんだ。マオーは復活している。これが完全で完璧で完成なのだ」

「しかし、人族は殺さないのでしょうか？」<sup>ひとぞく</sup>

「うむ、そんなことする理由は思い出せない。そして、ビスケツトが作れるのは人族だ<sup>ひとぞく</sup>けだからな！」

「だから……魔王様には覚醒していただくとうと……目を覚ましていただくとうと……」

「くどいぞ！ 燃やされたいか!？」

「はい、魔王様が覚醒してくださるのであれば、わたくしが最初に燃やされるくらい、むしろ幸福の極みです」

クルムが嫌そうな顔をして、アリシアから距離を取ろうとする。

しかし、アリシアは優しげな笑顔を浮かべたまま手を離さなかった。

「もうよい！ マオーは帰るぞ！」

「そのためには、わたくしや、立ちほだかる者を殺す必要があるでしょう。そのとき魔王様は覚醒されるはず」

レムは召喚獣のクリスタルを取り出した。

アリシアの知識はエデルガルトを通じて魔族の司祭から得られたものらしい。根拠のない妄言ではない。

——つまり、クルムが人族を殺したとき<sup>ひとぞく</sup>本来の魔王として覚醒する？  
そんなこと絶対に阻止しなければ！

「アリシア、なぜ魔王を覚醒させようなどとするのです!？」

「醜い人<sup>ひとぞく</sup>族を滅ぼし、美しい魔族の世界にするのが、わたくしの望みだからです」

その姿はいつもと変わらない。

しかし、まるでアリシアの形をした化物と対峙<sup>たいじ</sup>しているかのようで、不気味でしかなかった。

もう話し合うべきことはない。

「……クルムは返してもらいます」

アリシアは国家騎士だ。相当な実力を持っているはず。

——勝てるでしょうか？

レムは召喚獣のクリスタルを握りしめた。

一対一でも難しい敵だったが、さらに相手側に仲間が現れてしまう。

路地裏にやってきたのは、見覚えのある騎士たちだった。

そして、土を蹴る足音を立てながら、悠々と一人の男が歩いてくる。重厚な鎧<sup>よろい</sup>に、何本も剣を提げていた。



「クリステラ殿、こちらでしたか。少々捜してしまいましたよ?」

うさんくさいほどに爽やかな笑みを浮かべた青年は、聖騎士サドラーだった。

その瞳には前に見かけたときの何倍も暗い炎が宿っている。

前に見たときは、嘲笑するような苛立たしい余裕があったが、今は空腹の獣のようだ。

アリシアが冷たい視線をこちらに投げた。

「申し訳ありません。足止めをされてしまったもので、こちらの冒険者に……いえ、魔王崇拜者に」

レムは目を丸くする。

「なっ!? 魔王崇拜者はあなたでしょう、アリシア!」

「まさか。わたくしは潜入調査の末に、貴女たちが魔王崇拜者であることを突き止め、いずこからか連れてこられた女兒を保護したのです」

「……そういう筋書きですか。わたしを聖騎士に売ったのですね?」

「いいえ、この子を救っただけです」

「……くっ」

レムは考える。

アリシアの目的は人族を滅ぼし、ひとぞく魔族の世界にすることらしい。そのためにクルムを

魔王として覚醒させたがっている。

クルムが人族を殺したときに魔王として覚醒する——と魔族の司祭が語ったという。

しかし、だからといって、レムを聖騎士に引き渡す理由は？

そもそも、聖騎士を関わらせる理由は？

わからなかった。

レムは冒険者としては経験も積んでいるし、駆け引きにも疎くない。それでも、まだアリシアの真意が読めなかった。

「……ひとつわかっていことは、あなたたちにクルムは渡せない！　ということだけです！」

レムはクリスタルを投げた。

召喚獣を喚ぶ。

「……来なさい！　《アスラウ》ッ!!」

三本の角を持つ雄牛だった。その巨大さは自然の牛をはるかに凌駕する。突進力に優れており、一撃の打撃力はレムの持つ召喚獣の中で最も強かった。

サドラーに対しては、《三角耳亭》で不覚を取ったが、ここで負けるわけにはいかない。

クルムを取り戻さなければ！

聖騎士と国家騎士と、さらに従騎士四人を相手に勝つのは、かなり困難だろう。

しかし、ここで派手な音をたてて戦っていれば、人が来るはず。

ディアヴロが気づく可能性も高まる。

そう計算していた。

《アスラウ》が聖騎士へと突っこんでいく。

サドラーが命令を下す。

「盾になりなさい」

その一言で、従騎士たちが一齐に《アスラウ》の正面に出た。

一人が角で突かれて、かなりの重傷を負う。しかし、他の三人に抑えこまれ、巨大な召喚獣の突進は力を失ってしまった。

レムは理解に苦しむ。

「まさか!? 死んでしまうかもしれない命令に、どうして従うのです!？」

サドラーが笑った。

「神が、かくあれ」と望むから、我々は生きていられます。死ぬということは、すなわち神から天に招かれただけのこと……そして、生前に神の御意志に従っていた者は死後に許されます。御意志に背いていた者は罰を受けて魔に墮<sup>お</sup>とされる。なにより、僕を守ることは神を守ることに等しい。恐怖心から僕の命令を拒むような不信心者は従騎士



にはいませんよ」

ゆつたりとサドラーが剣を抜く。

そして、《アスラウ》の首筋に突き刺した。

剣をそのままにして、二本目、三本目の剣を腰から抜いては、ざくざくと突き立てる。

「ふはっ！ ふははっ！ なかなか頑丈な召喚獣だな！」

《アスラウ》が暴れるが、従騎士たちが必死に抑えこんだ。

ダメージを蓄積させた召喚獣が、とうとう消滅して黒ずんだクリスタルへと戻ってしまふ。

いくら抵抗できない状態だったとはいえ、あまりに早かった。

従騎士が盾になったことも驚愕だが、きょうがくこれほど早く巨大な召喚獣を倒したサドラーの

実力も尋常ではない。

戦士系としての実力は領主ガルフォードにも迫るほどか？

これくらい高レベルになると、もうレムには推し量れなかった。

普段、街の見回りや薬草摘みをしている冒険者とは、まったく異なる強さがある。

——しかも、聖騎士は魔術を使う。

「くっ……来なさい！ 《ストーンマン》！」

さらに召喚獣を出す。

本来なら、逃げだすべきだった。

サドラー一人を相手にしていても、レムの持っている召喚獣では勝てる可能性が低い。

そのうえ従騎士四人——もう戦えるのは三人か。それと、アリシアもいる。

クルムは事態がわかっていない様子で、ただ不機嫌そうな顔をして眺めていた。彼女にとっては楽しくない余興か。その程度の感覚なのかもしれない。

《ストーンマン》が巨大な石の拳を振るう。

従騎士を吹き飛ばした。

アリシアが目をすがめる。

「もしかして、お手伝いが必要なのでしょうか、サドラー様？」

「いやいや、それは無用ですよ」

「しかし、ここで時間をかけては人が集まってしまう。なにかと不都合かと存じますが？」

「ふふ……意外ですね。クリステラ殿は僕が働かないほうがいいのかと思っていました」

「魔王崇拝者を放っておけないというお考えには、賛同しております」

「そうですか。先日、貴女を疑ってしまつて申し訳ありませんでした。国家騎士アリシア・クリステラ殿は正しく神の御意志を理解する素晴らしい人物であつたようです。あなたの行いを神は見ておられますよ」

「ありがとうございます」

「まあ、なんにしても、心配は無用です。そろそろ終わりにしましょう……私に屈辱を与えた男の仲間だ。容赦はしません」

サドラーが従騎士たちに命令する。

「早く捕らえろ！ 丁寧に、傷つけずにな。そのほうが、あとから味わ<sup>みず</sup>わせる苦痛が瑞々<sup>みず</sup>しいものになる」

「はい！」

返事はいいが、従騎士たちの実力では《ストーンマン》の頑強な身体に致命的なダメージを与えるのは難しいようだった。

その間に、レムはさらに召喚獣を喚ぶ。

強力な召喚獣を連続で、しかも同時に使うのは、かなり魔力を消費する。

しかし、ここで戦わなくては！

クルムが尋ねてくる。

「なんだ？ もしかして、キサマはこの者たちを殺したいのか？ ならばマオーを頼る



がいい。こっちの鎧よろいの連中はビスケットと関係ないからな。一瞬で灰に――」

「やめなさい！」

レムは叫んだ。

クルムがビクツと身をすくめる。

複雑に絡んでいたレム自身の感情がようやくまとまり、気づく。

自分がどう思っているか、言葉にする。

「……クルム……あなたは人を殺さないでください……あなたはビスケットを食べて、みんなと笑って、シエラと歌っていてください……それが、わたしの望みです」

「本気か？ キサマでは、こいつらには勝てないぞ？」

「……あなたに、ひとぞく人族を殺してほしくないんです。それだけは、忘れないでください」

「よくわからないが、わかったのだ。約束するのだ」

クルムがため息をついた。

レムは微笑む。

「……わたしは……あなたのことが、本当は恐くて、たぶん憎いとさえ思っていました。でも、この数日で、まるで家族のようで……それは嫌ではなかったです。今は、あなたを失いたくないと思っています。この命を懸けてでも！」

新たなクリスタルを放つ。

《シャドースネイク》を召喚——聖騎士へと飛ばした。

影のような黒い蛇だ。まといついて動きを縛る。

そして、レムは拳に爪を装備して、《シャドースネイク》を追うように突撃した。

「はああああ——ッ!!」

サドラーが唇の端を歪める。<sup>ゆが</sup>

「ふふ、さすがは最前線となるファルトラ市の冒険者です。実に戦意旺盛だ。勇気があり、実力があり、非常に素晴らしい」

相手が腰にある剣を抜き、振るう。

《シャドースネイク》が斬られた。

レムは鉄爪をつけた右拳を叩き<sup>たた</sup>つける。

しかし、その直前に、サドラーに睨<sup>にら</sup>みつけられた。

——しまった《無詠唱》!?

「ふぐっ!!」

「神の前にひれ伏すがよい、魔王を崇拜せし背徳者よ!」  
身体の自由を奪われた。

倒れこむ。

「あぐっ……!!」

レムは地面に手をついた。身体に力が入らない。

まるでサドラーに対して頭こうべを垂れているかのようになり、戦うことができなくなってしまう。  
った。

また《麻痺スタン》か。

彼が耳元でささやく。

「貴女は非常に素晴らしい。希望がなければ絶望もないですからね、僕に勝てるかもしれないなどという馬鹿げた希望を抱いたことは、本当に素晴らしいですよ。そして、深く絶望するといい」

サドラーの手が、レムの頭に触れた。

接触した場合にだけ使える魔術は強力だ。そのなかには、意識を奪うための魔術も存在する。

まるで後頭部を殴られたような衝撃が走って、レムは視界が暗くなっていくのを感じた。

薄れゆく意識の中で手を伸ばす。

クルムが目を見開いた。

アリシアが、レムの耳元でささやく。



「必要なのは……憎悪なのです」

レムの意識が途絶えると、召喚獣《ストーンマン》が魔力供給を断たれてクリスタルへと戻るのだった。

十

意識が戻る――

ゆさゆさと自分が揺れているを感じた。

レムは目を開ける。

薄暗い。

自分を覗きこむ者<sup>のぞ</sup>がいた。

小さな人影は、ローブを被っている。

「キサマ、無事か？」

「クルム！」

思わず手を伸ばし、彼女の無事を確かめた。

上から下まで見てみる。

どこもケガなどしていないようだ。

「……無事でしたか。ああ……よかった」

「マオーになにかあるわけなからう？ キサマのほうが急に寝てしまつて変だったのだ」

「……サドラーの魔術でやられたようですね」

「ああ、さっきの変な光は魔術だったのか。あの程度の小さな魔力の者に負けるとは、情けないのだ」

「……そうですね」

この街の冒険者として、レムはそれなりに知られた存在だったが、最近では連戦連敗だった。

ディアヴロ、魔族、聖騎士……

ため息をこぼす。

それから、視線を周りに移した。薄暗いが、なんとか見える。

檻おりの中だった。自分たちを囲んでいるのは鉄格子の檻だ。上も下も覆われている。立ちあがることができないほど低い。

クルムでも頭がつかえるだろう。

そして、檻には厚布が掛けられていた。このせいで中が薄暗いのだ。

手足は拘束されていない。

するまでもない、ということか。武器は取り上げられていた。

揺れているのは……？

馬車の荷台なのだろう、と想像がついた。

「……わたしは、どれくらい気絶していましたか？」

「ビスケット一袋、食べるくらいだな」

ぽりぽり、と彼女はビスケットを食べている。こんな場所でもか。

自分たちがエデルガルトに対して取った手と同じやり方で、クルムを懐柔されてしまつたらしい。

クルムがビスケットを食べている間だとすれば、一〇分もないか。

馬車に積みこまれる時間を最小に見積もっても、まだ街からは出ていないはず。

檻おりにかけられた布から、わずかに太陽の光が漏れている。この時間に左側から日差しがあるということは、馬車は北に向かっているのだろう。

中央地区？

いや、もっと進んで北地区か。

ヒューマン  
人間の街が広がっている場所で、亜人の多い南地区に比べると豊かな所だ。

あまり行かないので、どんな建物があるかいまいち覚えていなかった。



大声を出せば、街の人が気づいてくれるだろうか？

例えば、<sup>ひとざら</sup>人攫い〴〵と叫んだら？

——聖騎士と国家騎士が相手では、無駄でしょうね。

社会的信用は、相手のほうが圧倒的に上だった。

レムは落ち着いて思案する。

——考えてみると、妙ですね？

先ほどの会話を吟味していくと、アリシアが本当のことを語ったようには思えなくな  
った。

クルムが<sup>ひとごと</sup>人族を殺したら、魔王として覚醒する？

だとしたら、レムを気絶させたあと、クルムを攻撃したらいい。クルムはこんな様子  
だが、おそらく魔王としての力を持っている。

魔族に魔力を与えたことといい、数々の戦闘を冷静に見ていたことといい、サドラー  
を、あの程度の小さな魔力の者〴〵と評したことといい。かなり強そうだ。

アリシアがクルムを本気で攻撃していたら、彼女は望みどおり、クレブスクルムが最  
初に殺した<sup>ひとごと</sup>人族〴〵になれたのではないか。

命が惜しくなった？

それなら、従騎士を使うこともできただろう。

情報が足りないので断言はできないが、グルムが人族を殺したら覚醒するひとぞく”というアリシアの言葉は嘘うそではないか？ という推測が成り立った。

では、魔王を覚醒させたい——などという魔王崇拝者としての言葉も嘘なのか？ それは都合のいい期待をしすぎか。

事実として、レムとクルムは、アリシアによって聖騎士サドラーへと引き渡されてしまったのだ。

「……くっ……わたしが、もっと強ければ」

すつ、とクルムがビスケットを差し出してきた。

「食べるがいいのだ」

「え？ あの、ありがとうございます」

もう夕飯の時間だから、たしかにお腹は減っている。レムは手のなかのビスケットを見つめた。

「……マオーのせいで苦労したらしいな？ レムよ」

「え？」

言葉にも、名前を呼ばれたことにも驚いた。

クルムが肩を落とす。

「アリシアが言っていたのだ。レムはマオーのせいで多くの苦労をしてきた。レムだけ

じやなくレムの母親やその母親や……ずっとずっと……だが、さきほどはマオーを守るために戦ったのだ、と聞いた」

「……そうですね。負けてしまいました」

「キサマはマオーのために戦った。マオーのことを憎んでいてもおかしくないというのに」

「……苦勞したことを否定はしません」

「今も、マオーのせいで、こんなところに閉じこめられているのだろう？ マオーは人族ひとぞくのことはよくわからないが……レムがマオーに示した忠誠は、大いに評価するぞ」

「……忠誠ではありませんよ」

「うん？」

レムは膝を抱えてうつむく。

迷いながらも気持ちを話すことにした。

「……神様は《魔王クレブスクルム》の魂をわたしの何代も前の先祖に封印しました。

おかげで、代々の女性たちは、みんな人目を避けるように生きてきたのです。魔王を解き放たないために、身体を大切にし、必ず女兒を残し……みんな自分の人生の多くを犠牲にしました。多くのことを諦め、定住もせず、周囲と距離を取り、孤独と恐怖に怯えおびる人生を送ったのです。どうして……わたしだけが？ 《魔王クレブスクルム》の魂を



封印する器などに？」

クルムが首をかしげた。

「つまり、マオーのせいで、キサマは自由がなかったのだな？」

「そういうことになりますね」

「なるほど。自由がないのはいかな。腹立たしいことだ」

意外にも通じるものがあつた。

「……考えてみれば、わたしたちが苦しんでいたのと同じ時間を、あなたは封印されて過ごしたのでしたね」

「半分、寝ていたようなものだがな。しかし、自由を奪われたことを恨むのは、わかる」

「……あなたも、わたしたちを恨んでいるのですか？」

「マオーが恨んでいるのは神だ」

「そう、ですか」

寝物語のように聞かされてきた神話が、事実であつたことにレムは驚きを感じる。

しかも、魔王本人から語られようとは……

クルムが寂しそうに言う。

「ん……キサマがマオーを恨んでいるのは当然だな。マオーは嫌われて当然なの

だ……」

レムはため息をついた。

そんな悲しそうな顔をしないでほしい。

クルムが人族に害を為す悪逆の王であれば、悩む必要はなかった。

きつとディアヴロが倒してくれただろう。何代も続いた憎しみを叩きつけることができたはずだ。

ところが、復活したクレブスクルムは、あまりにも無邪気な子供だった。

レムはうつむく。

「……ずっと、そんなふうに思っていました。けれど、あなたもまた魔王に生まれてしまっただけなのですね」

「う、む？ たしかに、マオーはマオーとして生まれたな」

「……自分で選んで、わたしたちの人生を狂わせたわけではない……同じなのだと気付きました。あなたは、わたしと変わらないのですね。普通ではない運命を背負わされているだけの……普通の人です」

「マオーは人族ではないが、レムの言いたいことはわかった」

「……だから、あなたを守りたいのです。おそらく——アリシアは本当のことを言っています。クルムが覚醒するのは人族を殺したときか？ あるいは別のことが鍵になる

のでしょうか？ とにかく彼女は魔王の覚醒を目論もくろんでいます」

「そのようだな。まったく、マオーは完璧で完全で完成だと教えたのに」  
ぽりぽり、とビスケツトをかじりながら言う。

その姿は完璧でも完全でも完成してもいなかったが、レムは言わなかった。  
代わりに自分に言い聞かせるように、つぶやく。

「……みんなのところに、帰りましようね。きつと帰れます」

「マオーが力を使っているのなら、こんな鉄の箱など壊せるし、あの鎧よろいの連中など一撃で消し炭なのだ！」

レムはクルムを抱き寄せる。

初めて、自分から触れた。

あたたかい。

「……そんなことをしてはダメです。いいですね？ 約束しましたね？」  
クルムは少し迷ってから、うなずいた。

「うむ、約束したのだ」



ほどなくして、馬車の動きが止まった。

目的地についたらしい。

騒々しい音を立てて檻おりに掛けられていた布が外される。

もうすぐ西日がファルトラ市の城壁に隠れるところだった。

檻が開けられる。

サドラーが手招きした。

「出てください。貴女たちを救済する場所に着きましたよ」

「……………」

従騎士たちが手を伸ばしてきて、レムは腕を掴つかまれて引きずり出された。

霊園だった。

周りは墓地であり、人の気配はない。

まだ暗くなっていないのに、街の喧噪が聞こえなかった。そして、城壁が近い。

ファルトラ市の北端か。

そういえば、上流階級の者たちが使う霊園があったな、と思い出す。平民の使う墓地は城壁の外にあった。柵で囲われているが、ときどき水害や獣害にやられることもあるらしい。

クルムは相変わらず。アリシアの用意していたビスケットで、すっかり言いなりだ。

先ほど、ちゃんと約束したが……

不安になる。

——ビスケツトと引き替えに、人族を殺したりしないでしょうね？

目の前の建物が、鐘を鳴らした。

ちょうど六回。午後六時を告げる鐘だった。

教会だ。

かなり古いが、ちゃんと手入れされている。石壁は何度も補修された跡があり、ステンドグラスは新しいものが嵌められていた。

鐘楼の屋根には教会の聖印が掲げられている。中央が円で三方に線が伸びた形をしていた。大きな木製の扉が開けられ、レムたちは中へ入るように背中を押される。

外観どおり、古いがよく手入れされた教会だ。

しかし、妙な臭いが鼻をつく。粘つくような、甘いような、不思議な臭気だった。鉄が錆びたような……

その臭いの元は、教会の奥に置かれた器具だった。

椅子の一部がどかされて、なにやらいろいろな器具が置かれている。

なにに使うものなのかはわからなかった。

しかし、サドラーにまつわる噂うわさを思い出す。

彼は魔王崇拝者と思われる者を拷問にかけて、告白に追いこみ、処刑するのだという。

レムは目を見開いた。

——この幾つもある赤錆あかさびの浮いた物体は、全て拷問器具なのですか!?

レムは、サドラーを睨にらみつける。

「……わたしは魔王崇拝者などではありません。どれほど痛めつけられようと、絶対に偽りの告白などしません」

「ああ、よかった」

「……なんですか?」

「僕の噂を知っている者は、この器具を見ただけで、〃自分は魔王崇拝者でしたが、もう改心しました。神様への信仰を示させてください〃などと言って泣きだすんです。そんな浅はかな言葉が信じられますか? 貴女は正ただよしく、僕たち聖職者を欺こうとする魔王崇拝者ですよ」

「くっ……どうあっても拷問にかける気なのですね」



「いえいえ、よく勘違いされることなのですが、僕は拷問なんてしたことはありません」

「……この器具はなんですか？ 調理器具には見えませんが？」

「普通の人には拷問だと誤解されますが……僕がしている行為は『救済』ですよ。魔王を崇拜するなど、人族<sup>ひとぞく</sup>として間違っています。その魂が穢<sup>けが</sup>れてしまった者たちを助けるための行為なのです。僕は全ての人族<sup>ひとぞく</sup>を救ってさしあげたい」

確信に満ちた声だった。

意味がわからない。

びっしりと金属の棘<sup>とげ</sup>がある器具や、鉄の台とノコギリなどには、どれも赤黒い汚れがこびりついており、使いこまれた跡があつた。

それに、救済だと言うが、拷問した者を処刑するという噂ではないか。

「……あなたは人殺しを『救済』だと言うのですか？」

サドラーが首を横に振る。

「僕は人を殺していませんよ。ただ、救われた結果として神の許しを得て、天に招かれ<sup>まね</sup>ただけです」

「なにを……!？」

「いつも、その姿には感涙を禁じ得ませんよ。穢れた魂が、僕の救済により清められ

て、神に許される、その瞬間には」

「……それは……拷問をした結果、死んだだけではないのですか!？」

「いいえ、僕が許したのだから、神が許したということでしょう。であれば、死とは天に招かれた結果の幸福なもの」

自分が許したから、神が許したことになる？

おかしい理屈だった。

「……あなたは神にでもなったつもりなのですか!？」

神を語ることは教会において固く禁じられていることのはず。

しかし、サドラーは表情を変えない。

善良そうな笑みを浮かべている。

「そうですね。これはあまり言いふらすことではないので、いつもは努めて秘しているのですが——実はどうやら、僕は神であるようなのです」

「は？」

「ですから、この世に降臨した神そのものなのですよ。わかりませんか？」

「……あきれて物も言えませんか」

「恵まれた家に生まれ、恵まれた肉体を持ち、恵まれた頭脳を誇る——あらゆる天の寵ちよう愛あいを受けた僕は、神がこの世を救うために降臨したと思えないのです」

そう信じ切っているのだろう。言葉には自信が満ちていた。

レムは閉口する。

「……言葉でなにを言っても無駄なようですね」

サドラーが、レムの耳を指さす。

「そんなことはありません。僕との会話が無意味であるはずがない。こうして言葉を交わすことで、貴女の罪の深さがわかるのです」

「……下らない。わたしは魔王崇拝者などではありません」

「あなたは……その耳が悪い」

「なっ!？」

レムは後ずさり、自分の頭のうえにある三角の耳を手でかばった。

背筋が、ゾワリとする。

「尻尾もよくありませんね」

「……これは、ひょうじんぞく豹人族の特徴です。色が黒い者は少ないですが、おかしくはありません」

「いえいえ、僕にはわかります。神の耳目は誤魔化ごまかされませんよ。では、さっそく切除するとうしましょう」

「なっ!？ あなたは拷問はしないと、言っていないませんでしたか!？」



「ええ、拷問ではありません。魂の穢<sup>けが</sup>れの元となっている部分を切除していきます。悪くなっていない部分は、大切です。神に与えられた肉体ですからね。だから、できるだけ細かく、端から削っていきます」

「……そ、そんな」

相手の意図を察して、レムは恐怖に膝が震えだす。

こいつは、穢れの元だと言い張って、自分を端から切り刻むつもりなのだ。

サドラーに上から下まで、舐<sup>な</sup>めるように見つめられた。

「ふむ、僕に召喚獣を投げつけた、その手もよくない」

「……あなたは地獄に落ちますよ」

「口も悪いですね。歯を抜いてみましようか」

サドラーが合図すると、従騎士たち三人が近づいてきた。

「そうそう、貴女の召喚獣のせいで、忠実な従騎士の一人は重傷で、治癒の奇跡を与えて寝かせています。まったく、とんでもないことをしてくれましたね？」

「盾にしておいて……」

従騎士たちに両腕を掴<sup>つか</sup>まれた。

召喚獣も武器もなく、サドラーへの対抗手段もない。

悔しかった。

レムはアリシアのほうへ視線を向ける。

「……わかりません。あなたは、なぜこんな者に協力しようと考えたのですか？ わたしたちを裏切ってまで」

アリシアが肩をすくめた。

「私には、私の目的がありますから。痛いのが嫌でしたら、助けを求めてはいかがですか？」

ぽん、と彼女は隣にいるクルムの肩に手を置いた。

レムの恐怖心が伝わったのか、クルムは険しい表情をしている。珍しくビスケットを食べる手も止まっていた。

「もしかして、キサマは助けを必要としているのではないのか？」

「……ひ、必要は……ありません！ 約束は守ってください」

「う、うむ」

クルムには手出ししないよう言い含めてある。

しかし、この状況でどうすればいい？

アリシアが苦笑した。

「レム様はこれから自分の身に起きることを理解されていないのではありませんか？」

「……理解していますよ。わたしがわからないのは、あなたの目的です。魔王を復活さ

せて人族を滅亡させる？　そのために、こんなことが必要ですか？」

サドラーが、アリシアのほうを見た。

彼女は笑みを絶やさない。

「まあ、わたくしが魔王復活を？　やはり、魔王崇拝者はおかしなことを言うものです」

「……アリシア……あなたが、わたしに示した理解も、一緒にシェラを助けに行ったことも、全て嘘うそだったのですか？」

「本当に……おかしなことを言いますね」

アリシアが背を向けた。

「サドラー様、わたくしは痛そうなのを見るのが苦手なのです。あとはお任せしてよろしいでしょうか？」

「ええ、あとは僕に任せてください。それと、クリステラ殿の身の潔白は、この僕が保証しますよ」

「ありがとうございます。では、食事をしてから戻りますわ」

「わかりました。その頃には、この魔王崇拝者は神に許されているでしょう」

余命が宣告されたようなものだった。

アリシアがクルムの肩に手を置く。



「そうそう……この子供は、魔王崇拝者たちに捕まっていただけの被害者です。傷つけたりしないでくださいませ？　ビスケットがなくなったら与えてください」

「ええ、もちろんです。僕たちに救われた可哀想な子供ですからね」

レムは従騎士二人に肘掛けのある木の椅子に座らされた。

両手を男たちに押さえつけられる。

クルムが部屋の隅から、こちらを見つめていた。

——本当に助けを求めないのか？　そう表情が尋ねている。

我が身かわいさにクルムに助けを求め、もしも魔王として覚醒してしまったら？

絶対に嫌だった。

魔王クレブスクルムを復活させないために、自分の母親も祖母も大勢が苦勞してきたのだ。それに、今のクルムがいなくなったら、きつとシエラが悲しむ。妹のようだったと言っていたのに。

サドラーが巨大なハサミを取り出した。

「ふふ、悲鳴ならいくらあげてくださっても結構ですよ。ここは霊園の奥にある教会です。陽の沈んだあとの墓地など、誰もいないでしょう」

「……悪辣な……あなたには良心の呵責かしやくというものがありませんか!?」

「ありますよ？　魔王崇拝者を救済しないと胸が痛みます。それでは、さっそく救済し

ましよう。その不気味な耳を切り落とすことで……」

ひようじんぞく  
豹人族の耳に刃物が近づいてきた。

「ううう……」

「これで、貴女は少しだけ正常に近づけますよ。正しい人間へ」  
ヒューマン

「……人間が正常なんて、たんなる亜人差別でしょうに！」

「穢<sup>けが</sup>れを穢<sup>けが</sup>れと言つて、なんの間違いが？」

レムが身体をよじつて逃げると、従騎士に首輪を掴<sup>つか</sup>まれ、引き戻される。

「動くな！」

従騎士が怒鳴った。

サドラーがハサミを閉じる。

バツン！

レムは瞬間的に身体を振っていた。耳の付け根が熱くなる。切られた!?  
しかし痛みは少しだけ。

逃げたぶん全部は切られなかったようだ。

サドラーが声を荒らげる。

「動くなと言われたのが、わからないか！」

怒鳴りながら、腰から剣を引き抜いた。

押さえつけられているレムの右腕に、真上から突きおろしてくる。

ズンツ、と刃に貫かれた。

刺された。

サドラーの剣は、レムの右腕を貫いて、椅子の肘掛けまで達していた。

「ッ!？」

頭の中をぐちゃぐちゃにされるような痛みに悲鳴さえ声にならない。

ドクツ、ドクツ、と椅子に血が垂れた。

クルムが駆け寄ってくる。

「レム——!?! レム! レム! 痛いのか?! 痛いのだろう! なんで、やられっぱなしになってるのだ! 殺すぞ! こいつら殺すぞ! かまわんだろう!?!」

「ううう……ダメ……」

「キサマ! そのままではキサマが死ぬのだぞ!?!」

死は恐ろしい。

けれども、クルムを魔王にするわけには……



サドラーが腰から別の剣を抜いて、クルムへと突き出す。

「邪魔をするな！」

振られた剣の鋒が、クルムの被っていたローブを斬り割いた。ぱさりと床に落ちる。

角が露あらわになった。

そして、トカゲのような尻尾も。

クルムが普通ではないことがサドラーたちに知られてしまった！

レムは右腕の痛みすら忘れて言う。

「ッ！ 逃げなさい！」

しかし、クルムは逃げだしたりしなかった。

サドラーも従騎士たちも、一瞬、クルムのことを凝視して固まっていた。

それから沸騰したような声をあげる。

「こいつ！ 魔族だ！」

クルムの瞳に怒りの色が満ちた。

「愚か者め！ マオーはマオーなのだ！ キサマら灰にしてくれるぞ!？」

「その角……あの混魔族を思い出す。そうだ……あいつも魔族に違いない。領主に軍隊を出させて今夜にも討伐してくれる！」

あの混魔族——デーマンディアヴロのことか。

焦点の定まらぬ目をして、サドラーが剣を持って前へ出る。クルムに近づいた。

「忌々しい……この僕に屈辱を与えた……その角はけが穢れている！」

「なんだと、キサマ？」

「クリステラ殿も、その角と尻尾を見たら、僕が正しかったと認めるだろう……魔族めが。人の子の振りなどして、穢らわしい！」

サドラーが剣を振り上げた。

クルムが睨にらみつける。

「マオーにあだなす気か？　よかろう！　レムを傷つけたこと、キサマの死をもつてあがなうがいいのだ！」

「魔族のガキが僕に偉そうな口をきくな。耳が穢れる！　その角、打ち砕いてくれる！」

剣で斬りつける。

そのとき、レムは椅子を蹴っていた。

サドラーとクルムのやり取りに目を向けて緩んでいた従騎士たちの手を振りほどき、身体を前へ。

右腕に激痛が走る。

肘掛けまで貫通して、まるで杭<sup>くい</sup>を打たれたようになっていた。骨にまで届く激痛。しかし、レムの思考は自分の痛みにはなかった。

夢中で椅子を蹴りつける。

腕の肉が裂けて、骨が切断されようとも関係なかった。

「クルムッ!!」

レムは身体を投げ出す。

今、まさにサドラーの剣が、クルムの頭へと振り下ろされようとしていた。そこにレムは割りこんだ。

迫る剣から、クルムを守る盾になる。

彼女を胸の中へと抱きしめる。

右肩に熱が走った。

まるで焼けた鉄を押しつけられたかのようなうだ。

斬られた。

冷たい刃が身体の中へと入ってくる。

大量の血がこぼれた。

クルムを濡<sup>ぬ</sup>らしてしまう。



「……ひゅ」

レムの口からは言葉にならない空気しか出なかった。  
クルムが悲鳴のような叫び声をあげる。

「レム——!?」

倒れこんだ。

床に、倒れて、レムの周りに血が水たまりのように広がっていく。

傍らにしゃがみこんだクルムが、何度も名前を呼ぶ。

「レム！ レム！ レム！」

「……逃げ……なさい」

「レムも！ レムも連れてく！ こいつら殺して、キサマは生かす！」

「……やく、そく」

「そ、それは……約束はしたが！」

「僕の邪魔をしたな!? 亜人ごときが！」

サドラーの剣が、とどめとばかりにレムの背中から、床までを貫いた。

「——ッ!!」

大量に血が飛び散る。

レムの血だ。

真っ赤な血が。

クルムは目を見開いて震える。

ひとぞく人族は死んでしまう。こんなにも血を流したら死んでしまう、とクルムは知っていた。

こんなにも血を流したら、レムが死んでしまう。

血。血。血。

命が、消える。

クレブスクルムは絶叫した。

レムは倒れ伏したまま、教会全体を震わせるような声を聞く。  
なにかが起きている。

自分の命が尽きようとしているのは間違いない。

しかし、それ以外に重大なことが、起きているのを感じた。

路地裏でアリシアがつぶやいていた言葉を思い出す。

“必要なのは……憎悪なのです”

そう言っていた。

——なにに必要なのか？ それは、クレブスクルの覚醒に？  
この状況になるまで、レムにはわかっていなかった。憎悪という感情の作り方なんて。

そして、今になって知った。

憎悪は大切な者を奪われたときに生まれる。

十

聖騎士サドラーは天井近くを見上げた。

小さな子供だったはず。

奇妙な角と、トカゲのような尻尾の生えた……おそらく亜人の雑種。

魔族と決めつけた。

そして、いつものように処刑するはずだった。

処刑されるだけの無力な子供のはずが、自分よりも巨大な何かに姿を変えている。

本当に魔族だったのか？

血溜まりに倒れたままの豹人族が、うめく。



「……クレブスクルム」

それは魔王の名だった。

サドラーは改めて巨大な化物を睨みつける。にら

あの子供は、なんと言っていた？　「マオー」だと？

「まさか……魔王だなどと……ばかな……ありえない……」

クレブスクルムが手を横へ薙ぎ払う。

衝撃波が広がった。

従騎士たちが、小さな悲鳴をあげて頭をかばう。

教会の壁と屋根が吹き飛ばされた。破片が燃えて、落ちてくる前に灰と化す。

魔術だったのか、それすらわからない。

伝統ある教会が鐘楼も聖印も石壁も屋根もステンドグラスも破片さえ残さずに消滅させられてしまった。

かろうじて、人の高さの壁と床だけが残される。

そして、クレブスクルムの背中から空に届かんばかりに巨大な光の翼が広がった。

まばゆい光翼が天を突く。

そこから、まるで空に描くかのように、魔術陣が展開される。

拡大していくのは、見たこともない線と記号だ。ファルトラ市を囲む結界と衝突して

火花を散らした。

耳障りな音が響く。

——本当に魔王クレブスクルムなのか？

サドラーは三本の剣を床に突き立て、従騎士たちに命令する。

「極大魔術を使います！ 盾になりなさい！」

「は、はい！」

三人の従騎士たちが、サドラーの前に立つ。

「ふふ……たえ本物の魔王だろうと……僕の極大魔術によって塵も残さず消え去ることでしょう」

サドラーは自信に満ちていた。

たとえ魔王を前にしても、冷静さと余裕を失わなかった。

揺るがぬ信仰とは、揺るがぬ自信であり、勝利への絶対なる確信だ。

サドラーは自分を神だと考えていた。

神そのものだ、と。

だから、魔王と相対したのも、自分の伝説を彩る一節でしかないと信じていた。

クレブスクルムがサドラーたちを睨んだ。にら

紫色の瞳には憎悪の炎が揺れている。

「オオオオオオオオ——ッ!!」

空気を震わせる絶叫。

それでも、サドラーは余裕の笑みを浮かべていた。

「ふふ……僕の魔力に気づいたか、魔王め……しかし、もう遅いな」

魔力は形を成して魔術が完成する。

究極の魔術が。

「消し飛ぶがいい、《フレアバースト》ッ!!」

爆炎がクレブスクルの身体を覆う。

そして——

効果はなかった。

魔王に目に見えるダメージを与えることはできていない。

サドラーは魔王へと手を突きだしたまま、固まってしまった。

「え?」

クレブスクルが拳を振り上げる。

叩<sup>たた</sup>きつけてきた。



——まだ、大丈夫だ。

サドラーには確信があつた。

自分は神であり、もしも死ぬような危機に見舞われても必ず生き残る。なぜなら、神だからだ。

盾になっている従騎士たちの上半身が蒸発する。

熱風に顔を焼かれた。

それでも、サドラーは勝利を信じている。

——見てろ、もうすぐだ。神の力が魔王を倒すぞ。

——僕は絶対に死んだりしない。なぜなら、神だからだ。

——ほら、もうすぐだ。もう魔王の拳は迫っている。今こそ神の力が目覚めるとき！

——あああ、早く、早く、ほら、ほら、ほら！ 神の力よ、今だ！

「……あれ？ 僕は神ではないのですか？」

クレブスクルの巨大な拳が、サドラーの頭に届く。

膨大な防御魔術を施された鎧が抵抗し、頑強な肉体が生を繋ぎ止めようとした。

無駄だ。

まだ人族の範囲に留まる程度の強さしかないサドラーの身体は、魔王の一撃により、あつさり砕け散る。

防御魔術が破綻して、肉体は血を撒き散らし、その飛んだ血すらも蒸発した。消し飛ぶ。

サドラーは、盾になって死んだ従騎士たちと同じように、下半身しか残らなかった。

床に倒れ伏したまま、豹人族の少女が見上げる。

その身体がゆっくりと冷たくなっていく。

彼女の姿を見て、魔王クレブスクルムは憎悪の叫び声をあげた。

けれど、もう憎悪の理由など思い出せない。

ただ殺意だけが膨らんでいく。

覚醒は成ったのだ。

魔王クレブスクルムの産声が、墓地に響き渡った。

## 幕間

ファルトラ市、西の門――

城壁に兵たちが並んでいる。

領主ガルフォードの姿もあった。

彼は目をすがめて、西の地平線を見つめる。

ちょうど太陽が沈んでいくところだった。

いつもは夕焼けに照らされて赤く染まるはずの草原に、黒い影が落ちている。

ガルフォードはつぶやく。

「……あれが、全て魔族だと？」

三〇年前の《人魔戦争》を戦い抜いた英雄でさえ、声に動揺が混じった。

城壁の上に立つと、地平線近くに川とウルグ橋砦きうようせうが見える。

その向こうに、無数の魔族が押し寄せている、と報告が来ていた。

あれだけ多くの魔族が相手では、ウルグ橋砦の守備兵など時間稼ぎにもならないだろう。

すでに撤退命令を出していた。

魔族の数は二〇〇とも三〇〇とも報告を受けているが、混乱した兵たちの情報なので



正確性は疑問だ。

しかも、魔族は数など重要ではない。

問題は質だった。

本当に強い魔族は、特殊な武器でないとダメージを与えることができない。

通常の武器で攻撃しても、表面を傷つけるばかりで芯に通らないのだ。

そういった上級の魔族が何体いるか……

相手の戦力により、戦術が変わる。

兵たちの顔は青ざめていた。

指揮官の前で嘆き悲しむような弱兵はいないが、おそらく内心では逃げだしたいと思っ  
っていることだろう。

このうえ不測の事態が起きたら、戦う前に部隊が崩壊しかねなかった。

ガルフォードは兵たちに声をかける。

「諸君、我々は死ぬ為に此処ここにいる。如何いかなる強敵が来襲しようと思不退転である。市民  
が避難して、王都の主力部隊が戦線を構築するまで、最後の一兵になろうとも時間を稼  
がなければならぬ。自らが捨て駒であることに矜持きやうじを持て。人族ひとぞくが大局的な勝利を収  
めるための礎いしずえなのだ」

兵たちの表情が変わった。

恐怖を押し殺しているものから、守るために死ねる男の顔へと。

——しかし、全軍の士気が維持できるのはどれほどの間だろうか、とガルフォードは考える。

轟音ごうおんが響いた。

魔族たちの魔術か!? と兵たちがどよめく。

違う。

音は市内からだった。

ガルフォードは振り返り、北地区での爆発を目にする。

墓地のあたりか。

爆炎があがっている。

いかに経験豊富な指揮官といえど、魔王が復活して教会を薙なぎ払ったものだとは、想像できなかつた。

「……光の翼？」

そして、見たこともない魔術陣が空に広がっていく。

いや、ガルフォードは三〇年前に同じものを見たことがあった。

——魔王の魔術陣だと!?

なにごとかと動揺する兵たち以上に、知っているが故にガルフォードは動揺した。しかし、態度には出さない。

黙って北地区を睨にらんだ。

再び、ドン！ と大きな音が響いた。

西の門から北地区の墓地までは、かなりの距離がある。貴族なら馬車を使うほどだ。だから、魔王クレブスクルムによって聖騎士と従者たちが消し飛んだことなど、見えようはずもなかった。

いずれにせよ、放ってはおけない事態が起きている。

ガルフォードは北門と東門を任せている部隊長のことを考えた。

こういうときに自己判断で動ける者ではない。

——自分が向かうべきか。

西門は部隊長に任せ、一〇〇〇……いや二〇〇〇を残す。五〇〇〇を率いて大通りから北地区へ……

小さな人影が、城壁の階段を上ってきた。

グラスウォーカーだ。



胸元と腰を薄布で覆っただけの格好で、赤毛と兎うさぎのような耳を揺らして駆けてくる。

「やー、ここにいたんだね、ガルフォードさん！」

冒険者協会会長のシルヴィだった。

ガルフォードは剣に手をかける。

「今は戦時下だ。冒険者の出る幕はないが？」

彼女が両手を振った。

「ちょ、ちよつと待った！ ボクの話聞いてよ。損はさせないから！」

「北地区へ可及的速やかに部隊を向かわせなければならん。君の話聞いている暇などない」

「そう！ そこ！」

「ふむ？」

ガルフォードは剣から手を離した。顎をしゃくつて続きをうながす。

シルヴィが光の翼のあたりを指さした。

「北地区の墓地のほうは、ボクたちに任せてほしいな。それはこっちで対応しておくからさ」

「……ウルグ橋砦きょうしうさいに迫っている魔族どもの大軍は、まだ結界の外だ。むしろ北地区に現れた存在のほうが脅威である、と私は判断するが？」

「うん、そうだよな」

「しかも、あの魔術陣は……」

「三〇年前にも見たアレだよな、たぶん」

「わかっていて尚、なお任せろと言うのかね、君は？」

シルヴィが力強くうなずく。

「ディアヴロさんが向かったから大丈夫だよ。だから、あっちのことは任せてね？」

「……なるほど」

また、あの混魔族に絡んだ事態か。ディーマン

「能力の高さは認めるが、信用できるとは言えんな」

「悪い人じゃないよ？」

「感情で大通りと建物を破壊し、女性に首輪をつけて連れ回し、グリーンウッド王国の要求を拒絶して王女を返さず、街の領主と戦った者が？」

「ははは……一部はガルフォードさんのせいもあるんじゃない？」

「やはり、信用できんな」

「そう？　じゃあ、仕方ないけど……警告はしたよ？」

シルヴィは笑顔のままだ。

しかし、その目が冷たく光った。

ディアヴロという魔術師の強さは、ガルフォード自身が経験している。エルフの秘宝である巨大な召喚獣との戦いも見ていた。

ファルトラ市駐留部隊の精鋭一万にも匹敵する戦力か。あるいは<sup>りようが</sup>凌駕するほどの強さだ。

ガルフォードは改めてシルヴィに尋ねる。

「この街には一〇万の市民がいる。城壁の八本の塔による結界で守られているが、内側から結界が破壊されれば西方に現れた魔族たちが攻めてくるだろう。駐留軍だけでは支えきれない可能性が高い。意味がわかるかね？」

「うん、ディアヴロさんが失敗したら、この街は全滅だね」

「さらに背後には、結界を持たない街がいくつもある」

「わかってるよ。大丈夫。ボクだって、たくさんの人が死ぬのを見たくないからね。だから、ディアヴロさんが戦いやすいように近づく人は減らしたいんだ」

「……部隊を一〇〇〇人ほど向かわせる」

「ああ、そう？」

「責任感の強すぎる自警団員や、野次馬を遠ざけるには人手が必要だろう。市民を守るのは冒険者ではなく軍隊であるべきだ」

シルヴィが笑みを浮かべてうなずいた。



「さっすが、ガルフォードさんだね！　じゃあ、協力してがんばろう」

「北地区は任せる。いいかね？　なにがあるうとも結界の塔と、魔術師協会は死守するように」

「うん、セレスさんは守るよ。頼れる子たちに任せてるから安心してね？」

彼女は遊びに行く子供のような軽い感じで手を振って、城壁の階段を下りていった。

## 第五章 魔王と魔王

魔王復活の三〇分前――

教会が六つの鐘を突いた。

ディアヴロは冒険者協会に入る。

ちょうど夕飯時とあつて、一階の食堂はごったがえしていた。

そのなかに、シルヴィの姿を見つける。同じテーブルに、エミールもいた。

ファルトラ市の冒険者たちは、ディアヴロの強さを知っている。だから、その姿を見て自然と口をつぐんだ。

それほど、ディアヴロは自分でも気づかないうちに険しい顔つきになっていた。シルヴィがこちらに気づく。

「やあ、ディアヴロさん。どうかしたの？」

「親友<sup>とも</sup>よ、一人で来るとは珍しいな。なにかあつたのか？」

「なにか……そうだな……」

口ごもる。

――魔王ってどうやって人に頼みごとをするんだ？

クルムの搜索を依頼したい。

しかし、ディアヴロの知っている魔王は命令することはあっても、人探しを頼むことはなかった。

命令なら簡単だ『クルムがいなくなった。レムとアリシアもだ。捜すがよい』と言え  
ばいい。

けれども、そんな態度で頼むことか？

いくらコミュ障でも、なにか違うってことはわかる。

魔王ロールプレイは使えない。

そうになると、素<sup>す</sup>の自分で頼まなくてはいけない。

脂汗が浮かぶ。

エミールが首をかしげた。

「どうした、親友<sup>とも</sup>よ？ 顔色が悪いぞ？」

「……あ……いや……」

事情を話そうとする。

今までの対人関係での失敗がフラツシユバックした。

誤解されたこともある。

傷つけたこともある。



馬鹿にされたこともある。

話したときは快く接してもらっても、あとで笑いものにされていたこともある。

思い出したら、喉が痙攣けいれんしたように動かなくなった。

シルヴィが怪訝けげんな顔をする。

「どうしたんだろうね？」

そのとき、グラスウォーカーの少年——子供に見えるが歳はわからない——が駆けこんできた。ボロ布をマントのようにしている。

「失礼！」

「やあ、なにかあった？」

シルヴィが頭を傾けて、耳を相手に伸ばした。

ボロ布のグラスウォーカーが、こしょこしょと何事かを伝える。

考えてみれば、シルヴィはファルトラ市の冒険者協会を仕切っている会長だ。

エミールも戦士系の冒険者たちを束ねている幹部である。

——子供の搜索なんかで手を煩わせるなんて、非常識かもな。

魔王ロールプレイでは、非常識に思えることでもばんばん言えるが、素の自分を出そうとすると、いくらでも「話しかけない理由」が浮かんた。

ディアヴロは胸騒ぎがするものの、まだ事態を「たんなる迷子」としか考えていなか

った。レムの窮状も、アリシアの裏切りも知らなかった。

だから、切り出せない。

突っ立っていることしかできなかった。

ボロ布のグラスウォーカーから話を聞いていたシルヴィが目を見開いた。

慌てたように声をあげる。

「ディアヴロさん！ レムさんとクルムちゃんが、聖騎士に連れていかれたよ!？」

「なんだと!？」

怒声をあげたら、数名の冒険者がのけぞって椅子から転げ落ちた。

シルヴィが立ちあがる。

「みんな——ッ!! 緊急クエストだよッ!! レムさんとクルムちゃんの救出だ!

ディアヴロさん、シエラちゃんは!？」

「中央広場で、クルムを捜してるはずだ」

「それじゃ、そっちは後回しだね。急ごう! 聖騎士の馬車は北地区に向かったらしい

から!」

「場所はわからないのか!？」

「確定してないけど、たぶん、北地区の壁近くにある教会! 聖騎士は五日前から、そ

こを根城にしてるんだ!」

「そこまでわかっていれば、充分だ！ 感謝するッ！」

「……え？」

ディアヴロは冒険者協会から飛び出した。

走る。

この世界で行ったことはないが、北地区の教会ならゲームにも存在した。ゲームなら街の端から端はダッシュで一分もかからないが……

異世界のファルトラ市は直径三キロ以上ある。

徒歩なら三〇分。

道が真っ直ぐではないから、もったかかるか。

——しかし、レベル150の身体は伊達<sup>だて</sup>ではないはず！ 走りきるしかない！

もう日が暮れて、市場は閉じつつある。おかげで買い物客は少なく、全力で走っても人とぶつかる心配はなかった。

冒険者協会で、シルヴィが目を丸くしている。

「……感謝する」って言った？」

「ああ、言ったな」

エミールがうなずいた。



シルヴィは嬉し<sup>うれ</sup>そうに微笑む。

「なんか、初めて会ったときよりいい感じになったね、ディアヴロさん」

「親友<sup>とも</sup>は最初からいいヤツさ。あいつは、女性の味方だ！ だからこそ、俺は手助けしたいと思うんだ」

「そうだったね。そろそろ馬車の準備ができたかな？　じゃあ、エミールさん、あつちは頼んだよ」

「相手は聖騎士だろ？　ディアヴロに手助けが要るのか？」

《三角耳亭》での一件は、もう広まっていた。ディアヴロなら聖騎士なんか相手にならない、と評判だ。

シルヴィが肩をすくめた。

「それならいいんだけど……どうも嫌な予感がするんだ。エミールさんのパーティーには、優秀な治癒魔術師もいるしね？」

隣のテーブルに座る、白ローブの子に視線を向けた。相手は恥ずかしそうに顔をうつむかせる。

照れ屋だが、実力は確かだった。

エミールが剣を片手に立ちあがる。

「よくわからんが、シルヴィが言うなら従おう！　みんな、行くぞ！」

白ローブの他にも大勢の冒険者が応えて席を立つ。

シルヴィは周りの冒険者たちに、いくつか指示を出した。

協会の前に大型の荷馬車がやってくる。その荷台に、大勢の冒険者たちが乗りこんだ。

エミールが尋ねてくる。

「シルヴィは行かないのか？」

「ちよつと騒がしくなりそうだからね。ボクは領主のところに顔を出してくるよ」

「なるほど……聖騎士をぶつとばしたあと、軍隊に囲まれちゃたまんないもんな」

「うん、あと、ディアヴロさんには言う暇がなかったんだけど……どうやら、聖騎士サドラーと一緒にレムさんとクルムちゃんを連れ去った人がいてね」

「ほう？ あんなヤツに仲間がいるのか？」

「アリシアさんみたいなんだ……」

ため息まじりに言った。

エミールが複雑な表情をする。

「そいつは……ううむ……彼女は国家騎士だ。立場的に、いろいろあるのかもな？」

「うん、いろいろ事情がありそうだから、頼むよ」

「任せておけ！ シルヴィこそ、領主のほうを頼むぜ！」

馬車が走りだした。

それから、数分後――

北地区から衝撃波がファルトラ市に広がった。

光の翼が天を突き、空に魔術陣が展開されていく。

魔王の咆吼ほうこうが響き渡った。

十

ディアヴロは息を切らせて、走ってきた。

墓地だ。

多くの墓石がなぎ倒され、酷く荒れ果てていた。打ち捨てられた結果ではない。

この場にいる怪物のせいだった。

曲がった角があり、五つの赤い光点が頭部にある。

鎧を着た人族のようにも見えるが、近づけば見上げるほどの巨体だろう。地面から僅わずかに浮いている。表面は昆虫の外骨格のように硬そうだ。背中からは光の翼が空へと伸びている。



魔王クレブスクルムだった。

その背後には、教会だったのではないかと思われる建物の跡がある。腰の高さまでしか壁が残っておらず、あとは瓦礫<sup>がれき</sup>すらなく消滅していた。

まるで壁の一部だけ残して撤去してしまったかのようなうだ。

視界の端に、ばたばたと浮かぶ丸い物体が目に入った。

「ん？」

見覚えのあるバスケットボールくらいの丸い鳥——《ターキーショット》だ！

その召喚獣が、辺りを一周して消えた。

ほどなく、墓場の奥から駆けてくる。

やはり、シェラだった。

「ディアヴロ——!!」

「貴様か。どうしてここに……?」

「だって！ あれってクルムちゃんでしょう!? だから、あたし、慌てて！」

「なるほどな」

冒険者協会より、中央広場のほうが北地区には近いから、ほぼ同時に到着したわけか。

「そうだ！ ディアヴロ！ 教会の中に、なんか！ レムが……」

「なに!？」

「血が……いっぱい！」

シエラが顔色を青ざめさせる。

ぞわっ、とディアヴロの背筋が震えた。

サドラーに連れて行かれてから、どれぐらいの時間が経過している？

なにがあったのか、まったく想像がつかない。

しかし、なにかが起きて、レムは教会で倒れており、クルムは魔王の姿になってしまっていた。

ディアヴロは腰のポーチから、ありったけのHP回復ポーションを取り出す。

生命力

全部で九缶ある。

「持っていけ！俺はクレブスクルムを引きつける。貴様がレムを助けるんだ！」

一瞬、シエラは恐怖をにじませた。

しかし、しっかりとポーション缶を受け取る。

「わかった。あたしが、レムを助けるよ！」

「よし、回りこんで行け」

「うん！あ、ディアヴロ……」

「なんだ？」

「怪我しないでね？　それで、クルムちゃんを助けて」  
考える。

周囲の惨状を見れば、あれはもうクルムではなく、魔王クレブスクルムなのではないか、と思う。

果たして、話し合いなど成立するのか？

——いや、絶望的だとしても、悲観論を口にするなど魔王ではない！  
ディアヴロは黒色のマントを払う。

「誰に言っている、シェラよ。我は魔王ディアヴロ！　全て任せておくがいい！」

彼女が目尻に涙をうかべてうなずいた。

シェラが走りだす。

ディアヴロは、クレブスクルムの前へと歩いていく。

——倒すのではなく、助けるのか。

そんな余裕があるのか？　と巨大な魔王を見上げるのだった。



クレブスクルムと対峙<sup>たいじ</sup>する。

ディアヴロは真っ直ぐに、その顔を睨<sup>にら</sup>みつけた。

「クルムよ、俺のことがわかるか？」

「オオオオオオオ—— ツ!!」

返事の代わりに、咆吼<sup>ほうこう</sup>で応えられた。

そして、拳が振ってくる。

ディアヴロは知り得ないことだが、この一撃で従騎士三人と聖騎士は、その生命を終えた。

威力は絶大だ。

それはそうだろう。人の倍近くある身体が、まるでボールでも投げるようなフォームで拳を叩<sup>たた</sup>きつけてくるのだから。

——だが、避けるのは難しくないな。

咆吼や威力に萎縮しなければ、大振りなだけに避けやすい。

悩む。

このまま攻撃せずに声をかけ続けるか？

「……まあ、正義の味方なら、そうするのだろうな」

「オオオオオ——！！」

二撃目も回避した。

地面がえぐられ、墓石が砕け散る。

ディアヴロは逃げ回ってばかりはいなかった。

「クルムよ！ あいにくと俺はそこまで優しくないぞ、なんせ魔王だからな！ 俺の顔も、言葉も忘れたというのなら、力尽くで屈服させ！ 嫌でも思い出させてくれる！」

《天魔の杖》<sup>てんまつえ</sup>で地面を突いた。

魔力を流しこむ。

そして、すぐに移動する。

クレブスクルムが拳を横薙ぎ<sup>よこな</sup>にしてきた。

姿勢を低くして避ける。

相手の動作は駄々をこねた子供のようにだった。しかし、威力が桁外れなのは間違いない。いくら《漆黒の虚》<sup>しっこくうろ</sup>が物理ダメージ減少の効果を持っていたても、あれは無理だ。

対人レベルの威力ではない。

本当なら、もっと離れて強力な魔術を連発したほうがいいのだろう。

しかし、壁が近い。

結界の塔も、そう離れていなかった。

クレブスクルムへの攻撃で、塔まで壊したらファルトラ市は魔族や魔獣から無防備になっってしまう。

最悪、石壁は破壊してしまってもいいが、結界の塔だけは守らなくてはならない。ディアヴロは杖で地面を突いた。

魔力を流しこむ。

——あと、十一カ所か。

用意しているのは、設置型の大規模魔術だった。

通常の《詠唱魔術》ではなく、《陣式魔術》に近い。

準備が手間なわりに、相手が設置した場所の内側にいてくれないと意味がないので、対人戦では使えないが……

クレブスクルムの戦い方は子供も同然だ。

パターンを見切れれば、発動の機会があるかもしれぬ。

——このまま、拳を振り回すだけなら、楽なんだけどな？

クレブスクルムが動きを止めた。

そう簡単にはいかないか。

相手が大きく息を吸う。

ディアヴロは直感的に悟る。対応して魔術を放っていた。



「《ヴォルカニツクウォール》!!」

地面が爆ぜ、炎が噴き出した。空にも届くのではないかというほど高い炎の壁ができる。

レベル80の火と土属性の魔術だった。

深くまで息を吸ったクレブスクルムが、ごうごうと息を吐き出す。

いわゆる《ブレス》だった。しかも、黒色。

——《闇の吐息<sup>ブレス</sup>》か。

MMORPGクロスレヴェリにおいてブレスは純粹な《属性攻撃》に分類される。魔術ではないので《魔王の指輪》による反射は働かない。

物理攻撃ではないので《漆黒<sup>しつこく</sup>の虚<sup>うつろ</sup>》による物理ダメージ減少もない。

多くの場合に対応できるよう装備を選択し、強化しているディアヴロだが、多種多様な攻撃の全てに万全とはいかなかった。

どうにか、クレブスクルムのブレスは《ヴォルカニツクウォール》で遮断できた。

「ふんっ……能力<sup>パラメーター</sup>値の差は、技術でカバーだ」

「フフフフ……」

クレブスクルムが両手を広げて笑った。

戦っている相手がクルムなのはわかっている。救いたいという気持ちもある。

しかし、対戦者に嘲笑されるというのは、ゲーマーとして愉快なものではなかった。ここまで防戦一方だから、仕方がないことではあるが……

——見てろ、攻略してやるぞ！

ディアヴロは杖で地面を突き、足を止める。

クレブスクルの両手に、パリパリと紫電が走った。

「雷撃系の攻撃か!？」

ディアヴロは地面を蹴って逃げる。

空から無数の雷が追ってきた。

通常なら一撃だけ落ちてくるはずの雷光が、まるで一帯を襲うかのように、次々と降ってくる。

——これは、魔術だ！ 《ライトニングメテオ》!? 違うのか!?

ディアヴロは唇の端を歪めた。

「貴様には、魔族オウロウとの戦いで見せたと思っていたが……やはり、クルムの記憶は失っているようだな!？」

《魔王の指輪》が発動する。

降ってきた雷が、全て反射した。

クレブスクルに無数の雷撃が降り注ぐ。

一瞬、死んでしまうのではないか、と心配になるほどの攻撃だった。

白煙があがる。

ところが、クレブスクラムはほとんどダメージを受けていない様子だった。

ディアヴロは舌打ちする。

「魔術防御力が高すぎるぞ!？」

これが運営の実装したモンスターなら、魔術師系をやっているプレイヤーからクレームがつくレベルだ。

「これでどうだ! 《スターダスト》!」

水系の魔術を放った。レベル30程度なので、はつきり言って弱い魔術だ。

エフェクト  
演出は派手だった。

キラキラとした六角形の氷の結晶が、舞い散る。

当然、クレブスクラム相手にダメージを与えられるような魔術ではなかった。

しかし、これには面白い使い方がある。

ディアヴロくらいチャージ詠唱時間の短い魔術師だと、連発が可能だ。

立て続けに五発ほどたた叩きこむ。

相手の周囲が、《スターダスト》の演出だらけになった。エフェクト

めくら  
目眩ました。



魔術が効かない相手にも、いろいろ使いようはある。

低レベル魔術で攪乱かくらんしつつ、ディアヴロは間合いを充分に開けて、地面を杖で突いた。

魔力を注ぎこむ。

「オアアアアアアア—— ツ!!」

クレブスクルムが咆吼ほうこうをあげた。

《闇の吐息ブレス》の前の呼吸は見逃していない。

拳は届かない。

魔術なら反射できる。

この距離なら、ミスはないはず。

巨大な物体が飛んでくる。

—— 棺!?

殴っただけで地面を爆散させるほどの腕力で投げつけられたのは、地中に埋まってる棺だった。

《スターダスト》の攪乱かくらんにより、相手の動きも見えにくくなっていたのが仇あだとなる。  
避けきれなかった。

+

シエラは建物だった場所へと足を踏み入れる。

残った壁や床や長椅子から、かつては教会であつたのだらうと推測できた。

召喚獣で偵察したときには気づかなかったが、床には大量の赤い液体がぶちまけられていた。バケツをひっくりかえしたところの量ではない。

「ひっ!？」

それが血だと気づいてシエラは小さな悲鳴をもらした。

こんなにも血が出ていたら、絶対にレムは生きていないだらう。

背筋が凍る。

しかし、それらの血はレムのものではなかった。

よく見れば人の身体が転がっている。

四人ぶんだった。

よろい  
鎧を着た男が――

周りを見回しても、下半身だけしかない。

腰から上がどこへ行ってしまったのか、シエラにはわからなかった。

クレブスクルの拳が当たった瞬間、吹き飛んで蒸発してしまったなどと、想像すらできなかった。

——そんなことより、レムを！

正体不明の不気味な器具が転がっている場所へと歩いていく。

シエラは叫ぶ。

「レム——ッ!!」

駆け寄った。

《ターキーショット》で見つけたところに彼女は倒れていた。

黒髪はべったり血で濡れ、何カ所も剣で斬られたり刺されたりした傷跡がある。

酷い。この傷はクレブスクルによるものではなく、サドラーたちにやられたのだろう。

「レム！ レム！」

返事はなかった。

シエラは傍らにしゃがみこむ。

泣きだしてしまいそうだ。



そんな暇はない。

生きているかを確認することより先に、ディアヴロからもらったポーション缶を取り出した。

「レム！ 死んだらダメだよ！」

金属の缶にはまったコルク栓を外す。中の液体をレムに振りかけた。

シエラは祈る。

祈りながら、次々とポーションをかける。

多すぎるだとか、死んでいたら無意味だとか、そんなことは考えず、九本ともぜんぶ彼女にかけた。

「レム！ 生きて！ 死なないで！ せっかく自由になったんでしょ！ 今までがんばってきたのに！ ああ、神様、お願いします！ まだレムを連れていかないでください！ ずっとみんなのために封印をがんばって守ってきて、ようやく自由なんです！ あたしと珈琲店<sup>カフェ</sup>をやるんです！ だから連れてかないでください！ こんなにがんばったんだから少しくらい見逃してくれたっていいと思うんです！」

ふわり、と空から暖かい光が降りそそいだような気がした。

こほ……

「……かつてに……決めないでください……こほっ……まだ、一緒にやるとは」

「神様——ッ!!」

シエラは飛びついた。

「痛いですよ、バカシエラ!」

「だって!」

「ああ、でも……痛いです。さっきまで、感覚がなかったのですが……」

「すごい! ディアヴロの作ったポーションすごいね!」

「……なるほど。そういうことでしたか。さすがは、ディアヴロです」

シエラは尋ねる。

「どうして、こんなことになっちゃったの? レムは死にかけてるし、クルムは暴れてるし」

レムが苦々しげな顔をした。

「……アリシアに……裏切られました」

「うそッ!? どうしてアリシアさんが!? なにかの間違いじゃないの!」

「……わたしもそう思いたいですが……どうやら、彼女は最初から人族を殺す魔王の復ひとぞく

活を望んでいたようです」

「ええっ!?　なんで!?　そ、それじゃ、まるで……」

「はい、アリシアは魔王崇拝者だったのです」

「そんな……」

レムから経緯を聞いて、シエラは悲しくなった。

ぽろぽろ、と涙がこぼれる。

「ひどい……ひどいよ……」

「……まったくです。おかげでクルムには悲しい想いをさせてしまいました。おそろく、仲良くなった者を失うことが魔王覚醒の鍵だったのでしょうね」

「そんなの、ひどい」

「……そう泣かないでください」

「だって、クルムも……レムも……かわいそうで……」

「たしかに死にかけましたが、冒険者ならよくあることです」

「心が痛いことは、あんまりないよ」

「……ええ、でも……あなたが来てくれましたから、もう痛くありません」

レムが身体を起こす。

シエラが背中を支えた。



「だ、大丈夫？」

「……もちろんです。ん？」

床には大量のポーションが落ちていた。

レムが目ですがめる。

「これ、ぜんぶ使ったのですか？」

「うん」

「……ディアヴロに渡されたのですよね？」

「そうだよ」

ずしん、と地響きがした。

近くでディアヴロとクレブスクルムが戦っているのだ。

レムは齒<sup>はが</sup>齧みする。

「これは、ディアヴロの持っているHP<sup>生命力</sup>回復ポーション全部だったのでは!? 覚醒したクレブスクルム相手に、アイテムなしで戦っているのですか!？」

「ああ……!？」

もう一度地響きが伝わってきた。

そして、いくつもの足音が迫ってくる。鎧よろいの金属音もした。

まさか聖騎士の仲間じゃ!? とシエラは身を固くする。

レムが声を低くして言う。

「……逃げなさい、あなた一人なら」

「やだ! そんなの……もう絶対に……レムが死んじゃうかもしれないなんて」

シエラは手で涙をぬぐう。

そして弓を構えた。矢をつがえる。

崩れかけた壁から――鎧姿の男が顔を出した。

見間違えようもない金色の鎧。

「おっ、当たりだな。美しい女性たちよ、安心してくれ。この俺様が来たからには、もう大丈夫だ!」

「エミール!?」

シエラとレムが同時に声をあげた。

彼の後ろから、他の冒険者たちも姿を現す。

ディアヴロは吹っ飛ばされた。

——棺などで！

墓石に背中を打ちつける。墓石が砕けた。

一瞬、呼吸が止まる。

《漆黒の虚》<sup>しっこく うろ</sup>による物理ダメージ減少がなかったら、これで終わっていただろう。

ディアヴロは立ちあがると、すぐに走りだす。

倒れていた場所に次々と棺が飛んできた。

「やるな……クルムのくせに工夫するではないか……」

物を投げつけるのは、子供がよくやる攻撃のひとつだと気づく。

結局、クレブスクルムは幼児だ。

強力な魔術と《闇の吐息》<sup>ブレス</sup>を持っていて、他にもいろいろ特殊な攻撃があるのかもしれないが……

拾った物を投げつけるという手段を選んだ。

予想ができていれば、投げるモーションから狙いは読める。棺は大きいが、避けられないことはなかった。



——それでも、かなりのダメージを喰<sup>く</sup>らったな。

ディアヴロは腰のポーチをまさぐる。

指先には何も触れなかった。

「そういや、俺としたことが……」

生命力

HP回復ポーションは全てシエラに預けてしまったのだった。

レムを助けられたのならいいのだが……

ソロブレイ

いつも単独行動ばかりしていたから、他人のために使ってしまったアイテムがない、という状況には慣れていなかった。

ぽたぽた、と足元に鮮血が落ちる。

頭から出血していた。

はつきりと負傷したのは、この世界に来てから初めてかもしれぬ。

「オオオオオオ——!!」

クレブスクルムが咆吼<sup>ほうこう</sup>をあげる。

ずんずん、と壁に向かって歩きはじめた。

——なにをする気だ？

ファルトラ市を囲む城壁まで歩き、クレブスクルムが拳<sup>こぶし</sup>を叩きつけた。

——まさか、結界の塔を破壊するのか!?

このタイミングで内側から狙われたら、守る手段がない。

しかし、そうではなかった。

クレブスクルムは城壁の一部をえぐり取る。

そいつを頭上に掲げた。

「ウオオオオオオオオオオ——ンッ!!」

「おい、まさか……」

ディアヴロは慌てて駆けだす。

投げつけてきた。

「くそお!」

相手の立場になって考えてみれば、拳は避けられ、ブレスは防がれ、魔術は反射された。

唯一効果を発揮したのが、投げつける。だったのだ。

それを軸に戦法を組み立てるのは、間違っていないかった。

ファルトラ市の城壁の一部が降ってくる。

あやうく潰されかけた。

「うおっ! あぶねえ! いつから、クロスレヴェリはド○キーコ○グになったんだ

!？」

運営はラスボスに、こんな攻撃をさせる気か!？」

墓地の奥から、ガシヤガシヤと金属の当たる音が近づいてくる。

金色の鎧姿よろいが見えた。

「おおい、親友ともよ!」

「来るな! 魔術に巻きこむぞ!？」

「ああ、任せるさ! これだけを言いに来た——レムちゃんは無事だ! シエラちゃんもな! もう教会から連れ出したから気にするな!」

それは、願ってもない朗報だった。

一瞬、表情がほころぶ。

エミールが親指を立てて、「グッ!」と歯を輝かせた。

「親友ともよ! やっちなえ!」

「ふっ……貴様にしては、なかなかの働きだ。褒美に俺の極大魔術を見せてやろう。ちようど仕上がったところだ」

「なに?」

ディアヴロは地面に杖つえを突いた。



魔力を流しこむ。

「これで、十三カ所目……完成だ」

エミールが尋ねてくる。

「それは魔術なのか？」

「うむ、この世界には、こういう魔術もあるのだ。いわゆる《禁呪》だがな」

「な、なに、禁呪だと!？」

「ククク……」

——ゲームの設定ではな！

十三カ所に魔力点を設置する《陣式魔術》に近いものだ。

威力は高いが手間がかかりすぎるため、ほとんど使われることはなかった。

設置している間に、相手が効力の範囲から出てしまったら意味がない。範囲を広く取り過ぎると、そのぶん威力が落ちる。

今回は、途中からクレブスクルムが城壁のところまで移動したため、ぎりぎり城壁をかすめるような設置になってしまった。表面が溶けるくらいは勘弁してもらおうとしよう。このままでは、城壁を全て投擲の弾にされかねない。とうてき

結界のための塔は範囲から外しているから大丈夫のはずだった。

少しだけ不安ではある。

ディアヴロとて、この世界で使うのは初めての魔術だからだ。

ゲームとは魔術の効果が微妙に違う。どうなるかは使ってみなければわからなかった。

クレブスクルムに視線を向ける。

「我が一撃で目を覚ますがいい、クルムよ……《アポカリプスアビス》 ツ!!」

十三カ所の魔力点から光の柱が立った。

範囲内に竜巻が発生する。

四大元素は荒れ狂い、物体はことごとく塵へと変わっていった。

稲妻が走り、マグマが吹き出し、凍りついたものが、一瞬にして爆散する。

この魔術は地水火風の四属性を持っていた。

闇属性の存在に対して、極めて高い効果がある。

ツ!!

クレブスクルムが悲鳴をあげた。

その声すらも、魔術の強烈な効果ゆえに、外へは漏れてこない。そのはずだった。

「オアアアアアアアアア ツ!!」

苦しむ声が聞こえてくる。

こぼれているのか。

範囲の外にまで影響が及びつつあった。

ぎりぎり接している程度だったはずの城壁が、その形を失っていく。

エミールが頭を抱えた。

「お、おい、親友<sup>とも</sup>よ！ やりすぎだ！」

「それどころではないぞ……こっちまで危なくなってきた！」

足元が崩れだす。

ディアヴロは後ずさりし、とうとう地面を蹴った。

「走るがいい！ 死にたくなければな！」

「ぐはあああ——!?」

エミールが悲鳴をあげながら走りだす。

割れた地面から、底が見えた。

魔力の流れが渦巻いている。噴き出した四大元素が稲妻を帯びた竜巻となって天へと昇る。

範囲の外だったはずの城壁と、さらには崩れた教会を巻きこむ。

とうとう、北地区の墓地の大半を呑みこんだ。



地面がすり鉢状にえぐれている。

元あったものは、全て灰燼かいじんと帰していた。

その底に――

立っている者がいる。

すり鉢の縁から、底にいる者を睨にらんで、ディアヴロは驚愕きょうがくしていた。

――まさか、ダメージがないなどと言うまいな!?

正直、これだけの魔術を連発するほどMP精神力に余裕はない。

やはり、準備が足りなかったか?

覚醒直後とはいえ魔王を倒そうと思ったら、最上級のMP精神力回復ポーションを大量に用意しておく必要があったのか?

ディアヴロの隣でエミールが驚嘆の声をあげる。

「うおお……すげえ……墓地がなくなっちゃったぞ……!?!」

「今のうちに逃げるがいい、まだ魔王は健在だ」

「な、なに!?!」

すり鉢の底で、魔王が叫ぶ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ——！！」

クレブスクルの表面が砕けた。

振り上げた右腕が、割れた石像のように落ちる。

——さすがに効いているか！

正直、あんど安堵した。

あれでノーダメージでは、事実上「魔術師には倒せない」と言われたようなものだ。

クレブスクルの表面には、細かいヒビが大量に入っていた。

それでも相手は戦意を失っていない。

残る左手を握りしめた。

すり鉢の縁に、ディアヴロたちとは別の人影が現れる。

「ク——ル——ム——ツ！！」

ぶんぶん、と手を振るのは、シエラだ。

それと、レムだった。

ディアヴロは危険だと感じる。クレブスクルは、クルムだったときの記憶を持っていなかった。

レムやシェラだろうと攻撃される可能性が高い。

クレブスクルムが地面を蹴った。

ディアヴロは《天魔の杖》<sup>てんまつえ</sup>を構える。

一度の跳躍で、クレブスクルムはレムたちの近くへと跳んでいた。

エミールが焦った声をあげる。

「お、おい!?! まずいんじゃないか!?! どういうことだ、あの化け物が……クルムちゃんだったって!?!」

「そうだ!」

詳しく説明している暇はなかった。

もうレムたちが近すぎる。魔族とは格が違う。弱い魔術では効果がない。

——どうする!?!

レムが両手を広げる。

「……クルム、わたしは元気です。もういいのです。戻ってきてください」  
シェラがビスケットを差し出した。

「ほら! 一緒に食べよう!」

魔王クレブスクルムは左の拳を振り上げる。



「オオオオ……オオオオオオ……」

ディアヴロは見ていることしかできなかった。わずかでも、二人が離れてくれれば放てる魔術はいくらでもある。

まだMPは尽きていない。精神力

しかし、クレブスクルムが二人の声に反応しているのも確かだ。

戻れるのか、クルム？

——戻ってこい！

ディアヴロは祈った。

クレブスクルムが拳を下ろす。

巨大な左手を、レムとシェラに差し出した。

ひび割れた指先に、レムが触れる。

「痛かったでしょう……もう大丈夫です。わたしは大丈夫です。さあ、帰りましょう」

「はい、ビスケットだよ。また珈琲店カフェにも行こうね！」

大きな手にシェラがビスケットを載せた。

クレブスクルムの表面のヒビが、どんどん増えていく。

「オオオオ……オオオオオ……」

クレブスクルムの体が崩れ始めた。

翼のある巨人が、年月を経た石像が風化して自重で崩れるかのように、破片を落としながら形を失っていく。

もう空に伸びる光翼はない。

空を埋め尽くしていた魔術陣も消えていた。

崩れた断片は砂になり、風に吹かれて消えていく。

ビスケットを両手にのせた女の子がしゃがみこんでいた。

角と尻尾がある。

紫色の瞳がレムを見つめていた。

「生きて……おったのだな」

「……ええ、ディアヴロとシェラに救われました」

レムがクルムを抱きしめる。

クルムがか細い声で言う。

「マオーは謝らなくてはならないのだ。レムとの約束を破ってしまった」

「……はい」

「レムが殺されたと思ったとき、頭の中が真っ赤になって……」

「……それは、クルムが魔王だからです。仕方がないことなのです。誰が許さなくても、わたしは、あなたの側に立ちます」

二人をシェラが抱きしめる。

「あたしも！ あたしも二人の味方だよ！」

ディアヴロは杖つえを下ろした。

「ふう……」

そういえば、一部始終を見ていた者がもう一人いる。

隣でエミールが腕組みをして立っていた。

「いいものだな、美しい女性たちの友情というのは！」

「この件、どう報告する気だ？」

「ふふ……親友ともは功績を褒められるより、目立たないほうがいいのだろう？ 案ずる

な、俺様は女性の味方だ！ 彼女たちを泣かせるようなことはせん！」

「そういえば、貴様はそういうヤツだったな」

心配はいらないか。

気が抜けた。

倒れそうになってしまう。



ぼたぼた、と地面に血が落ちた。

——そういえば、けっこうなダメージを喰らっていたな。

しかし、魔王が倒れそうなど見せるわけにはいかない！

ディアヴロは気合いを入れ直した。

+

近隣の住民が混乱しているだろう——そう言ってエミールたちは治安維持のため、馬車に乗って去っていった。

ディアヴロはレムから事情を聞き、アリシアのことを知った。

「そうか……」

言葉がなかった。

また裏切られたのか、と思うと胸が痛い。

しかし、なにか事情があったのかもしれない。シエラの時きもそうだった。

レムが殺されかけたことを思えば、簡単に許すことはできないが、簡単に憎むこともできなかった。

そろそろ宿に引き上げようかと思っていると、明るい声が響く。

「やあ、ディアヴロさん！ おつかれさまだったね！」

ディアヴロは鼻を鳴らした。

「ふん……今回のことは、貴様たちの働きもあつてのことだ。この俺の役に立ったことを誇るがいい」

やっぱり、素直に礼を言うことはできなかった。

シルヴィが苦笑する。

「それはどうも。ボクも街が守れて嬉しいよ。ところで、ちよつと聞きたいことがあるんだけど……」

視線の先にはクルムがいた。

レムとシェラが手を繋いでいる。

ディアヴロは嫌な予感がした。

「なんだ？」

「あの子は魔王クレブスクルムだよね？」

シルヴィの表情から笑みが消えていた。

——こいつ、見ていたのか。

シルヴィは冒険者協会会長だ。

そして、冒険者の一番の使命は「魔王復活を阻止すること」だった。隠し通すのは無理か。

「そうだとすると、貴様はどうするつもりだ？　こいつも俺の所有物となったが？」とびっきり威圧的な口調で言った。

いつもの魔王ロールプレイで押し切ろうとする。

ディアヴロと戦う危険性を考えれば、無害になったクルムのことは容認してくれるのではないかと期待した。

しかし、シルヴィの表情は硬いままだ。

「野放しにはできないよ。ボクは冒険者協会の会長だからね。墓地を消滅させるほどの魔術を使っても、倒すことはできなかったじゃないか」

——そこまで見ていたのか。

「我と戦うと言うか、シルヴィよ!？」

「ボクはディアヴロさんのことは信用してるけど、聖騎士を殺したクレブスクルムのことまでは信じられないかな」

レムが叫ぶ。

「あいつは、たんなる人殺しです!」



「ディアヴロさんがいなかったら、この街はクレブスクルムに滅ぼされてたよ？　今、西方に魔族の大軍が押しかけてきてるんだ。知ってたかい？」

「なっ……!？」

クルムが首を横に振る。

「マオーは呼んでない！　エデルガルトは森で待ってると言っただが、呼んでないのだ！」

「そんなこと、ボクたちにはわからないからね。むしろ、今が好機だと考えるべきじゃないかとさえ思うよ？」

冷たい声だ。

ディアヴロはため息をつく。

「貴様は意外と堅物かたぶつだな」

「引き締めるところは引き締めないとね。ボクは人族の明日をひとぞく守ってるつもりなんだ。それが冒険者でしょ？」

「クルムは安全だと思えないか」

「説得力に欠けるね。ボクは一度目は絶対に信用する。裏切られたら二度と信用しない。シンプルでしょ？」

「貴様、我に勝てるつもりか？」

実力差を分析する。

シルヴィは《拘束》<sup>バインド</sup>や《沈黙》<sup>サイレント</sup>などの状態異常魔術<sup>バッドステータス</sup>を使ってくる。

所詮は魔術師だ。ディアヴロには《魔術反射》がある。負ける要素はない。

「ボクの戦い方を誤解されてるかな？」

迫力を感じた。

気<sup>け</sup>圧<sup>お</sup>されるわけにはいかない。

しかし、シルヴィを敵に回すのは得策ではない、と直感が告げている。

——これをバトル前の口上だと考えると、大失敗するぞ！

むしろ、アドベンチャーゲームの選択肢だった。しかも、選択を誤ると即バッドエンドに直行するタイプの、アレだ。

セーブ&ロードなしの一発勝負で、おそらくクルムの命が懸かっている。

——待てよ。

どうして、シルヴィと戦う、か、クルムを殺される、の二択だ？　ここは交渉もできるし魔術も使える世界だ。

選択肢は無限のはず！

ディアヴロはクルムに尋ねる。

「貴様は、この街での生活を大切に思っているか？」

「ん？ 当然なのだ」

「だが、先ほど暴れたせいで、今のままでは街で暮らせないそうだ」

「む……それは困るのだ」

「そこでな、このディアヴロが、ひとつ教授してやろう。冒険者たちに命を狙われず、この街でビスケットを食べていられる方法がある」

シルヴィが身を乗り出した。

「そんな方法、あるわけが——!?」

「貴様が言ったのだぞ、シルヴィよ」

「えっ!?」

クルムが興奮気味に言う。

「おお、よいぞ！ ディアヴロの案がいいのだ！ マオーはビスケットを食べていたいのだ！」

レムとシェラも賛成のようだ。

「……そんな方法があるなら、ぜひお願いします」

「そうだよ！ ちゃんと元に戻ったのに、冒険者に狙われるなんてひどいよ！」  
ディアヴロはうなずいた。

そして、ポーチから白色の石を取り出す。



《契約の魔石》だ。

「今から、貴様に《奴隷魔術》をかける！ 断るならば、もはや戦いしかない！」

クルムが目を見開いた。

「マオーを奴隷にするだと!？」

「そうだ！ このディアヴロの下僕になるがよい！」

シルヴィも驚いていた。

「えええっ!? ディアヴロさん、そんなのナシじゃないの!？」

「貴様が言ったではないか。〴〵一度目は絶対に信用する。裏切られたら二度と信用しない〴〵 そう言っただけだ！」

「い、言っただけ……」

ふんっ、とディアヴロは胸を張った。

「ならば！ 〴〵我が《奴隷魔術》を一度は絶対に信用する〴〵 べきであろう!？」

「うわあ……無茶苦茶なこと強気で言いはじめた！」

「ほう？ 貴様は都合が悪くなると自分の発言を撤回するような者なのか。そういうのは、人の上に立つ者として、どうなのだ？ 信用とか、あるのだろうか？」

「まさか、ディアヴロさんに『人の上に立つ者としての信用』を語られるとは思わなかったなあ」

シルヴィがため息をついた。

彼女はクルムを見る。

「でも、魔王クレブスクルムが、そんな『奴隷魔術』なんて受け入れるのかな？」  
クルムは考えこんでる様子だった。

その肩に、シェラが手を置く。笑顔を浮かべた。

「だいじょうぶ！ あたしもディアヴロに隷従してるけど、慣れれば首を洗うときに邪魔になるていどだから！」

「なんだとー!?」

クルムが目丸くした。

レムがうなずく。

「……たしかに、それくらいしか不自由はありませんね。あとは、街で好奇な目で見られることですが。ああ、わたしもディアヴロに隷従しています」

彼女は自分の首輪をつまんだ。

シェラが楽しそうに言う。

「もともと、ディアヴロといったら目立っちゃうし、同じだよね！」

「……同じとは言えませんが、冒険者協会に命を狙われるよりはいいでしょう」  
ふむふむ、とクルムがうなずいた。

シルヴィが口元を引きつらせる。

「本気なの？　ディアヴロさん……魔王に、本気で？」

「それで貴様が納得するのならば、な」

ディアヴロは睨<sup>にら</sup>みつける。

シエラがお願いする。

「信じて、シルヴィさん！」

「……先ほどの理屈から言えば、一度は信じるべきでしょう。シルヴィが自分の言動を  
翻すような人だとは思いたくありませんね」

レムが理論的に追いこんだ。

クルムが両手を挙げる。

「よし！　許す！　マオーに《奴隷魔術》とやらを使うがよいのだ！」  
シルヴィが――

「負けたよ。ディアヴロさん」



白旗を揚げた。渴いた笑い声をあげる。

「はは……クルムちゃんに《奴隷魔術》をかけるなら、ボクは一度だけ信用するしかないね。その魔術が魔王クレブスクルムに効果を発揮するのは知らないけど」

「俺を誰だと思っている？　魔王ディアヴロだぞ！」

クルムが胸を張る。

「許す！　さっそく魔術を使うがよいのだ！」

ディアヴロはうなずいた。

白い石を手にする。

そして、先日、シエラが召喚獣にやった手順を思い出した。

——あれ？　俺、クルムにキスすんの？

シルヴィが見てる。

当然、シエラも。

レムが首をかしげた。

「やり方がわかりませんか？　わたしの言うとおりに唱えてください」

——はい。

ディアヴロは観念した。





## 終章 エピローグ

ファルトラ市北地区に光の翼が広がったとき――

アリシア・クリステラは魔族の大軍の中にいた。

大小様々な異形の者どもに囲まれ、ファルトラ市を攻めるつもりで待機している。隣にはエデルガルトがいた。

「おおお、クレブスクルム様がー!!」

彼女が歓喜の声をあげ、周りも同調する。

「アリシアのー、言ったとおり！」

「いえ、司祭様から教えてもらっただけのことです。クルム様に大切な人を作り、その者が壊されるように仕組みました」

「難しいー、こと……すごい」

「ひとぞくひ弱な人種であるわたくしには、これくらいしか……」

「魔王様、復活したらー、みんなに魔力をもらえる！ 傷ついても治してもらえる！  
ひとぞく人族に勝てる？ 勝てる！」

エデルガルトの言葉を聞いて、魔族たちが声をあげた。

ファルトラ市に現れた光翼が天を突く。

空に魔術陣が展開された。

あれこそ、クレブスクルム様の存在する証！ と魔族たちが騒ぐ。

アリシアの仕掛けは成功した。

大望は果たされつつある。

静かに歓喜のときを待った。

魔族たちは、ファルトラ市の結界が壊れるのを待っている。

街の中で覚醒した魔王クレブスクルムが、魔術師協会か結界の塔を破壊してくれれば、魔族たちは街へ突入する。

ファルトラ市は魔王復活を祝う祭りの場となるだろう。

エデルガルトの提案に乗った魔族は多かった。エデルガルト派の魔族たち一〇〇体だけではない。

バアル派の魔族たちも来ている。

オウロウも来ていた。

光翼も現れた。魔王を示す魔術陣も広がっている。

いつ、結界が壊されるか!?

歓喜の瞬間は――

訪れなかった。

全てが静寂へと戻る。

エデルガルトが「クレブスクルム様の気配が小さくなった」とつぶやいて、アリシアは作戦が失敗したことを悟った。

二人のところへ、真っ先に詰め寄ってきたのは、オウロウだ。

空飛ぶ一本角を生やした巨大梟ふくろうが、いかめしい声をあげる。

「どういふことか？ 魔王クレブスクルム様の光翼も魔術陣も消えてしまったが？」  
責めるような口調だった。

周りにいる魔族も、エデルガルトとアリシアを糾弾しはじめる。

バアル派は人族を殺すことひとぞくしか考えていない。それが無理だとわかったら、さっさと森へと引き上げてしまった。

しかし、先日の戦いの遺恨があるせいか、オウロウ派は収まらない。

「多くの魔族に無駄足を踏ませた責任を取ってもらうのである」



そうだ！　そうだ！　と魔族たちが拳を振り上げた。

エデルガルト派の魔族たちは擁護する者もいたが、逆にオウロウを支持する者も出はじめた。

仕方がないか。

エデルガルトの出兵が失敗するのは、これで二度目だった。

一度もウルグ橋砦きょううきょうを越えていない。

そして、この作戦の失敗はアリシアの責任でもある。

けれども、人族を滅ぼすこともできず、失敗の腹いせに魔族に殺されるなんて、あまりに無意味だ。

アリシアは悔しかった。

エデルガルトに耳打ちされる。

「合図したら、街へ……走れ？」

「……ッ!？」

わあああ、と魔族同士が言い争いをする。

もともと人族ひとぞくよりも荒っぽい者たちだ。だからこそ、普段は顔を合わせないように離れて暮らしている。

口論が殺し合いに変わるのに、そう時間は必要なかった。

当然、失敗の原因であり人族であるアリシアに、魔族たちが牙を剥く。

エデルガルトが槍を旋回させた。

「《スイングスパイク》ッ!!」

いきなり《武技》を使い、迫ってきた魔族たちを薙ぎ払う。

戦端は開かれた。

仲間を倒され、オウロウ派の魔族たちがエデルガルトに迫る。

そのとき、魔族たちを蹴散らして駆けてきたのは、エデルガルトの愛馬だった。

魔獣《グランドドラゴン》だ。

頑強な身体を持ち、どんなモンスターよりも速く大地を駆ける。当然、魔族だつて追

いつけない。

「走れ！」

命令され、アリシアは走っていた。

後ろは見ない。

次の瞬間に、魔族の牙が上半身を持っていくかもしれない。

だとしてもエデルガルトを信じる他にできることはなかった。

人族を殲滅するための礎になるのはいい。

しかし、こんなところで憂さ晴らしの餌食になるのは、あまりに無駄死にだった。

脇腹に衝撃が走る。

――殺された!?

内臓が潰れたかと思うほどだった。

しかし、脇腹に当たったのは、抱きかかえる腕だった。

エデルガルトだ。

彼女の頭から、だくだくと血が流れていた。

「なッ!? やられたのですか、エデルガルト様!?

「しゃべゝるな……舌を嚙<sup>か</sup>む」

「わたくしとて馬術は会得<sup>えとく</sup>しております。そんな素人<sup>しろうと</sup>ではありません」

馬上で舌を傷つけずに話すくらいはできる。

エデルガルトがうなずいた。

「じゃ……まかす」

アリシアは引きずり上げられ、グランドドラゴンに跨<sup>また</sup>がせられる。

それからエデルガルトが、がつくりと倒れこんだ。

グランドドラゴンが片手で支えてくれなかったら、落ちていただろう。

「エデルガルト様!?

アリシアは必死で手綱<sup>たづな</sup>を掴<sup>つか</sup>んだ。



小さな棘<sup>とげ</sup>が無数についている手綱で、手袋ごしにもかかわらず、鋭い痛みが走った。倒れてしまったエデルガルトを支えると、その手にベツタリと血がつく。追いつがる魔族は引き離した。

グランドドラゴン<sup>きんどうごん</sup>は異常なほど速い。

ウルグ橋砦<sup>きようしやうさい</sup>を通るが——意外にも番兵はいなくなっていた。あまりに魔族の数が多いから、退去命令が出たのだろうか。

ファルトラ市が近づいてくる。

アリシアは唇を噛む。

人族<sup>ひとぞく</sup>を殲滅<sup>せんめつ</sup>したかった。美しい魔族の世界を見たかった。

しかし、今のアリシアは、エデルガルトを助きたい一心だった。

あとかき

『異世界魔王と召喚少女の奴隷魔術』第三巻を読んでいただき、ありがとうございます。

著者の『むらさきゆきや』です。

今巻ではレムに封印された魔王クレブスクリムを復活させてしまいました。ディアヴロは、あえて魔王を復活させて、自分が倒す！ と意気込みますが……まさかの幼女です。幼女には勝てません。いろいろあつて、結局は魔王VS魔王に。

（ディアヴロが壊した城壁は、同世界観の他シリーズでも語られてみたり）

今回は珈琲店<sup>カフェ</sup>が登場し、この世界のお菓子について書いてみました。それと、ようやくタイトルにある《奴隷魔術》のシーンが出せました。第一巻ではディアヴロが寝ていましたから。

物語としては一区切りついたので、次巻はアリシアやエデルガルトの筋を追いかけて、新しい展開に向かえれば、と思っています。予定だと来年の頭です。

宣伝になります——<sup>ふくだなおと</sup>福田直叶先生によるコミカライズが、WEB漫画ニコニコ静画『水曜日のシリウス』にて開始されました。無料公開中です。

『覇剣<sup>はけん</sup>の皇姫アルティーナ』（ファミ通文庫）

『放課後のゲームフレンド、君のいた季節』（MF文庫J）

『放浪勇者は金貨と踊る』（富士見ファンタジア文庫）

『艦隊これくしょん・艦これ・瑞<sup>ずい</sup>の海<sup>うみ</sup>、鳳<sup>ほう</sup>の空<sup>そら</sup>』ノベライズ（角川スニーカー文庫）

それぞれ刊行中です。

9月25日にオーバーラップノベルスからB6判で『異世界チート戦争』というシリーズをはじめます。ざっくり説明すればチートVSチートです。よろしくお願いします。

謝辞――

鶴崎貴大先生<sup>つるさきたかひろ</sup>、素敵ないラストをありがとうございます。限界に挑戦していく感じが

楽しいですね！

デザイナーのアフターグロウ大石様<sup>おおいし</sup>、今回もありがとうございます！

担当編集の庄司様<sup>しょうじ</sup>、「こんなに伸び伸びやっついていいのかな？」と思うくらい自由にや

らせてもらって本当に感謝です（それと次回のラジオも楽しみにしております）。

講談社ラノベ文庫編集部の皆様と、関係者の方々。応援してくれている家族と友人たち。



そして、読んでくださった読者様に最高レベルの感謝を。ありがとうございました！

むらさきゆきや



ニコニコ静画  
『水曜日のシリウス』にて  
コミカライズ  
連載中!

大人気ファンタジー

# 異世界魔王と 召喚少女の奴隷魔術

The King of  
Darkness Another  
World Story

SLAVE&MAGIC

漫画 福田直叶

原作 むしろあゆみ

キャラクター原案 鶴崎貴大



原作公式サイト  
➡ <http://www.isekaimaou.com>

ニコニコ静画・『水曜日のシリウス』  
➡ [http://seiga.nicovideo.jp/manga/official/w\\_sirius/](http://seiga.nicovideo.jp/manga/official/w_sirius/)



ゲームで魔王

やっていたら異世界に召喚された!?

ILLUST 鶴崎貴大

むしゅかのあま



# 異世界魔王と 召喚少女の奴隷魔術

The King of  
Darkness Another  
World Story

SLAVE MAGIC

公式サイト  
開設中!

最新情報はこちら!

➡ <http://www.isekaimaou.com>



## むらさきゆきや

---

### 作家

『覇剣の皇姫アルティーナ』（ファミ通文庫）

『異世界魔王と召喚少女の奴隷魔術』（講談社ラノベ文庫）

『放浪勇者は金貨と踊る』（富士見ファンタジア文庫）

『放課後のゲームフレンド、君のいた季節』（MF文庫J）

『艦隊これくしょん-艦これ-瑞の海、鳳の空』（角川スニーカー文庫）

著者サイト → <http://murasakiyukiya.net/>

### Illustration

**鶴崎貴大** (つるさきたかひろ)

---

低糖質ダイエットにハマってます。  
炭水化物を控えるだけで  
あとは好き放題食べてるのですが  
意外と体重が減っていった驚きです。  
オススメ！

本作品は、二〇一五年九月、小社より講談社ラノベ文庫として刊行されたものを電子書籍化したものです。

◎本電子書籍内の外部リンクに関して

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。  
また、リンク先のwebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。



いせかいまおう しょうかんしょうじょ どれいまじゅつ  
異世界魔王と召喚少女の奴隷魔術3

二〇一五年一〇月一日発行

むらさきゆきや

©Yukiya Murasaki 2015

発行者 清水保雅

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二・一二・一二

〒112-8001

◎本電子書籍は、購入者個人の閲覧の目的のためにのみ、ファイルの閲覧が許諾されています。私的利用の範囲をこえる行為は著作権法上、禁じられています。

15A0825E

01